

K113遺跡

北35条地点

1996

札幌市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、札幌市北区北35条西6・7丁目の札幌市所有地の売却のための整地に伴い実施した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、札幌市文化部文化財課加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、仙庭伸久、秋山洋司が担当し、加藤が主として調査にあたった。
- 3 本書は、加藤、秋山が執筆したが一部の分析調査は、下記の方にお願いし原稿を賜った。

炭化植物種子　　静修女子大学教授（前北海道大学教授）　吉崎昌一氏
北海道大学埋蔵文化財調査室　　椿坂恭代氏

木製品保存処理および樹種同定
北海道埋蔵文化財センター　　田口　尚氏、岡本育子氏

動物遺存体　　東北大大学文学部考古学研究室　　富岡直人氏

- 4 発掘調査・整理作業に下記の人々が主として従事した。

現場作業（順不同）

高木ミツエ、小柳リラコ、佐藤紀子、森山久美、東出千春、土肥研晶、清水顕史、大政徹也、最上洋子、藤田桂子、西村恵子、成田啓子、中川悦子、飛世玲子、鈴木美恵子、鎌田栄子、今田スミ子、佐藤由紀子、前田典子、嶋美和子、佐藤朗子、関本泰子、藤巻孝子、松谷セツ、若林美和子、矢島幸枝、宮前瞳、三浦敏子、長町民子、柿崎としえ、林春子、高橋朋子、橋岡明子、土田絹代、高木美恵子、杉山恵子、斎藤恭子、緒方陽子、太田小夜子、三浦有貴、松本直子、松波耕介（東海大学学生）、駒田透（札幌大学学生）

整理作業（順不同）

フローテーション選別：高木ミツエ、データ整理：小柳リラコ、清水顕史、土器実測・トレイス：佐藤紀子、土器実測：森山久美、図面整理・トレイス：東出千春、遺物写真撮影・焼付：三浦進、出土遺物データ整理：船渡川力、土器拓本：西村恵子、吉田友美、挿図整理：最上洋子

- 5 発掘調査・整理にあたっては、下記の機関より協力を賜った。

北海道住宅供給公社、札幌市管財部

- 6 発掘調査・整理にあたっては、下記の方より協力・助言を賜った。

菊地滋人氏、北海道埋蔵文化財センター

目 次

第1章 発掘調査に至る経過	9
第2章 遺跡の位置と環境	9
第3章 発掘調査の方法	10
第4章 遺跡の層序	10
第5章 遺構および遺物	17
第1節 壺穴住居跡	17
第2節 焼土・炭化物・炭化材	48
第6章 発掘区出土土器	54
第7章 K113遺跡北35条地点出土動物遺存体	富岡直人 71
第1節 出土状況	71
第2節 出土動物遺存体の概要	71
第3節 K113遺跡北35条地点における動物遺存体の出土状況	75
第4節 K113遺跡北35条地点における狩猟・漁撈活動	76
第8章 札幌市K113遺跡北35条地点出土の炭化植物種子	吉崎昌一 椿坂恭代 78
第9章 木製品保存処理および樹種同定	田口 尚 岡本育子 81
第1節 K113遺跡北35条地点出土木製品の樹種同定および保存処理について	81
第2節 樹種同定について	83
第10章 まとめ	85

挿図目次

第1図	K113遺跡北35条地点付近地形図(1) (1:25,000)	6
第2図	K113遺跡北35条地点付近地形図(2) (1:2,500)	7
第3図	K113遺跡北35条地点セクション図(1) (A-Bセクション(1))	11
第4図	K113遺跡北35条地点セクション図(2) (A-Bセクション(2))	12
第5図	K113遺跡北35条地点セクション図(3) (C-Dセクション(1))	13
第6図	K113遺跡北35条地点セクション図(4) (C-Dセクション(2))	14
第7図	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡および出土石器実測図	18
第8図	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡かまどおよび柱穴実測図	19
第9図	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴出土柱根実測図	20
第10図	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡実測図	22
第11図	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡かまど実測図	23
第12図	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(1)	24
第13図	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	25
第14図	K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡実測図	29
第15図	K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡かまど実測図	30
第16図	K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡出土遺物	31
第17図	K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡実測図	33
第18図	K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡セクション・焼土・柱穴実測図	34
第19図	K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡焼土・柱穴・ピット1実測図	35
第20図	K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴出土木製品実測図	39
第21図	K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡出土遺物	40
第22図	K113遺跡北35条地点焼土実測図(1)	49
第23図	K113遺跡北35条地点焼土実測図(2)	50
第24図	K113遺跡北35条地点焼土実測図(3)	51
第25図	K113遺跡北35条地点焼土実測図(4)	52
第26図	K113遺跡北35条地点炭化物実測図(1)	53
第27図	K113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(1)	58
第28図	K113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(2)	59
第29図	K113遺跡北35条地点出土動物遺存体遺構別重量組成	76

付図目次

付図1	K113遺跡北35条地点遺構配置図
付図2	K113遺跡北35条地点遺物分布および焼土・炭化物配置図

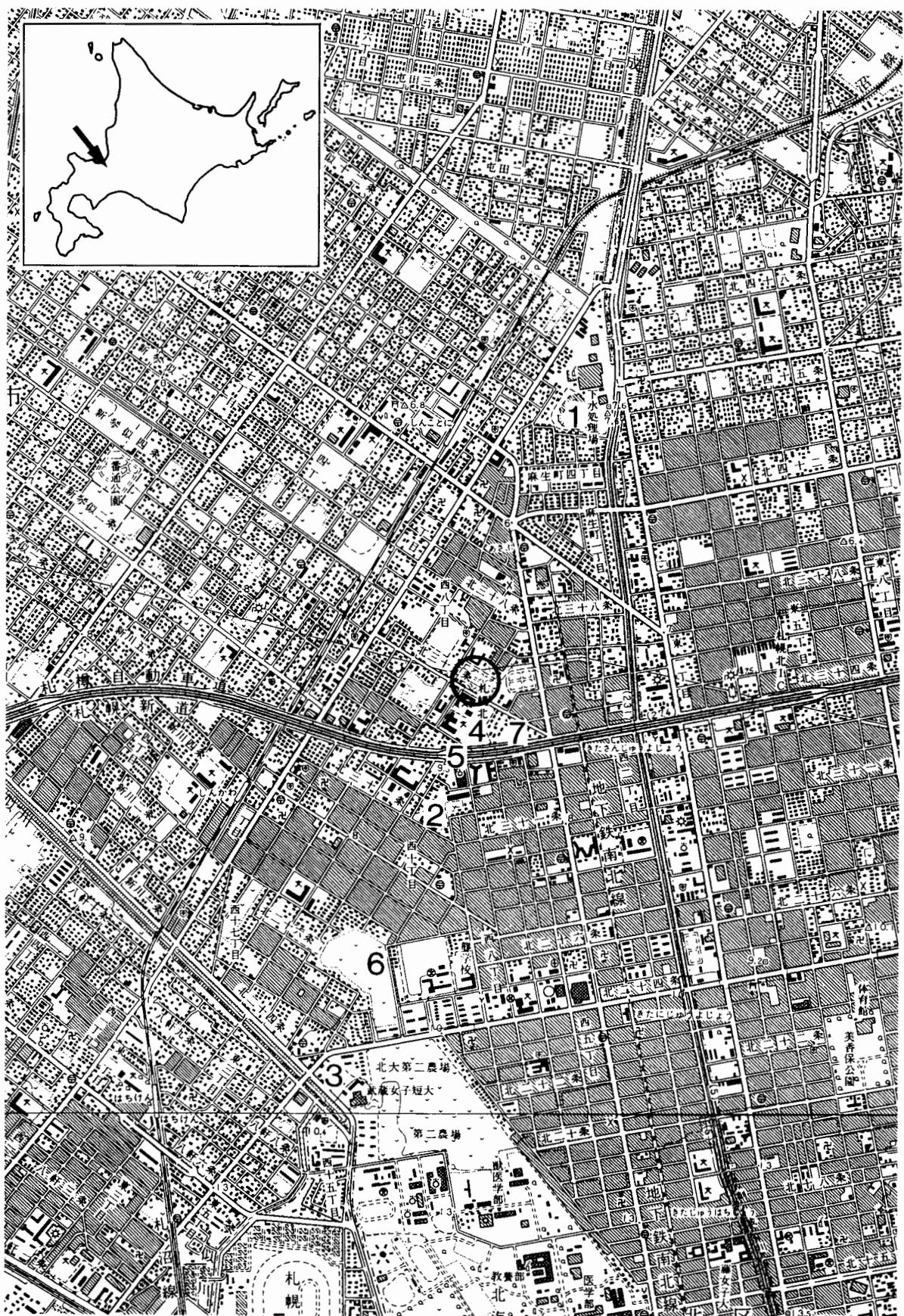
挿表目次

第1表	K113遺跡北35条地点竪穴住居跡一覧表	41
第2表	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土土器属性表	42
第3表	K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡出土土器属性表	44
第4表	K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡出土土器属性表	44
第5表	K113遺跡北35条地点竪穴住居跡出土石器・礫計測値一覧表	46
第6表	K113遺跡北35条地点焼土・炭化物一覧表	47
第7表	K113遺跡北35条地点発掘区出土土器属性表	66
第8表	K113遺跡北35条地点発掘区出土石器・礫計測値一覧表	68
第9表	K113遺跡北35条地点出土土器接合一覧表	70
第10表	K113遺跡北35条地点出土動物遺存体種名表	71
第11表	K113遺跡北35条地点出土動物遺存体(魚類)集計表	72
第12表	サケ科犬歯状歯による最小個体数	75
第13表	K113遺跡北35条地点出土動物遺存体(鳥類・哺乳類)集計表	75
第14表	K113遺跡北35条地点出土炭化種子表	80

図版目次

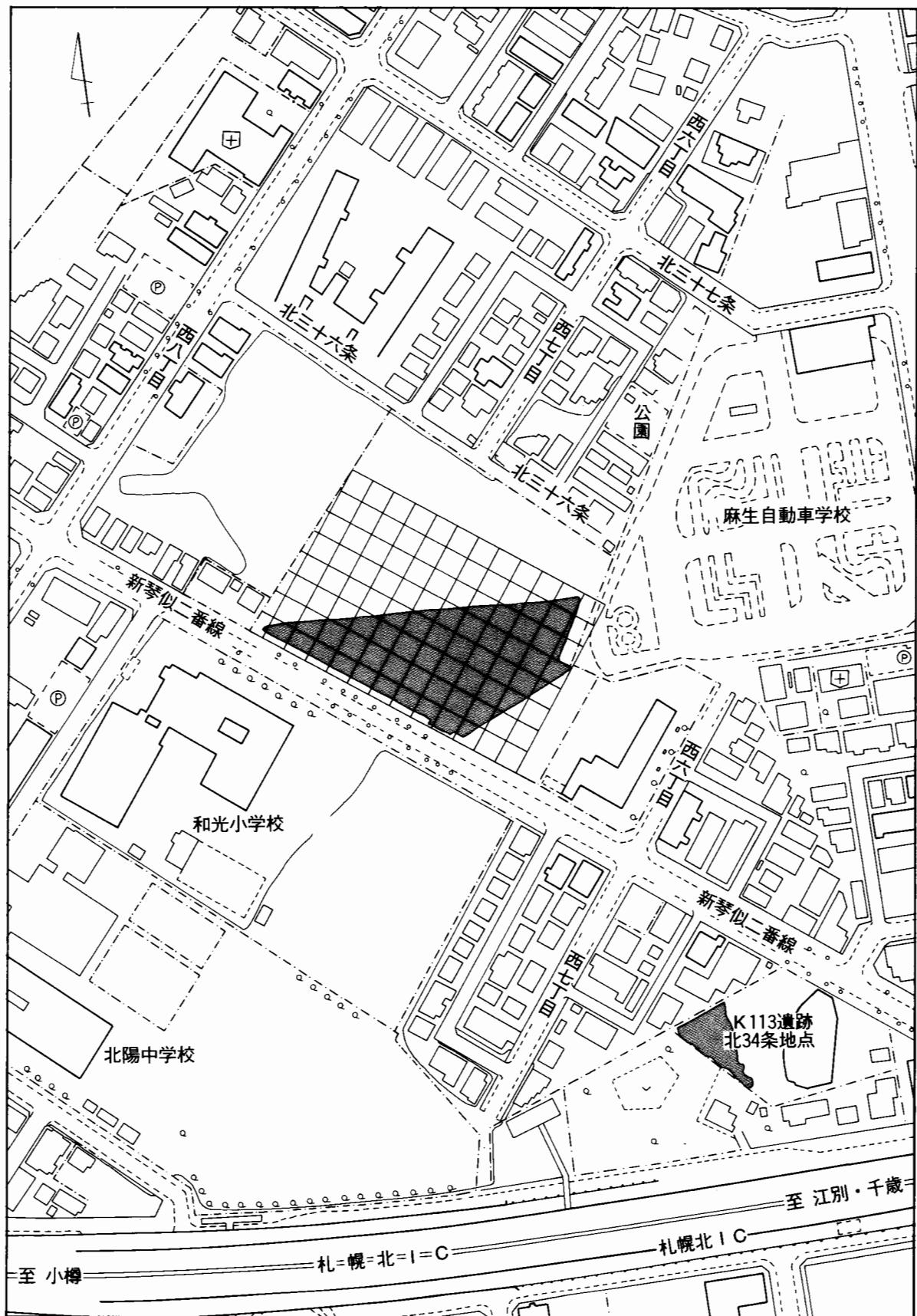
図版1	K113遺跡北35条地点付近空中写真(1:10,000)	89
図版2 A	K113遺跡北35条地点全景(南東より)	90
図版2 B	K113遺跡北35条地点発掘状況(南東より)	90
図版3 A	K113遺跡北35条地点(11-03区南北壁セクション 南より)	91
図版3 B	K113遺跡北35条地点(11-06区南北壁地割れ 南東より)	91
図版4 A	K113遺跡北35条地点(11-03区東西壁セクション 北より)	92
図版4 B	K113遺跡北35条地点(10-03区東西壁セクション 北より)	92
図版5 A	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡発見状態(北東より)	93
図版5 B	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡炭化物出土状態(北東より)	93
図版6 A	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡(北東より)	94
図版6 B	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡かまど(南西より)	94
図版7 A	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴1 断面(右), 完掘(左)(南西より)	95
図版7 B	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴2 断面(右), 完掘(左)(南西より)	95
図版8 A	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴3 断面(右), 完掘(左)(南西より)	96
図版8 B	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴4 断面(右), 完掘(左)(南西より)	96
図版9	K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡出土柱根	97
図版10 A	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡(北東より)	98
図版10 B	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡遺物出土状態(北東より)	98
図版11 A	K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡かまど(北東より)	99

図版11 B	K 113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡（北東より）	99
図版12	K 113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(1)	100
図版13	K 113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	101
図版14 A	K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡（北東より）	102
図版14 B	K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡かまど（東より）	102
図版15 A	K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡炭化物出土状態（北西より）	103
図版15 B	K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡出土遺物	103
図版16 A	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡（北より）	104
図版16 B	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡（南より）	104
図版17 A	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡礫・炭化物出土状態（南東より）	105
図版17 B	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡礫・炭化物出土状態（西より）	105
図版18 A	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡焼土1（北東より）	106
図版18 B	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡Pit 1（西より）	106
図版19 A	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴1断面（西より）	107
図版19 B	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴1木片出土状態（西より）	107
図版20	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴出土木製品 (1・2:柱穴1, 3:柱穴2出土)	108
図版21	K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡出土遺物	109
図版22 A	K 113遺跡北35条地点焼土10・18（南より）	110
図版22 B	K 113遺跡北35条地点焼土18地割れ部分土器出土状態（西より）	110
図版23	K 113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(1)	111
図版24	K 113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(2)	112
図版25	K 113遺跡北35条地点出土動物遺存体	113
図版26	K 113遺跡北35条地点検出の種子類(1)	114
図版27	K 113遺跡北35条地点検出の種子類(2)	115
図版28	K 113遺跡北35条地点竪穴住居跡柱穴出土木製品樹種顕微鏡写真	116



第1図 K113遺跡北35条地点付近地形図(1) (1 : 25,000)

(1 : K 446, 2 : K 460, 3 : K 36, 4 : K 441北33条地点, 5 : K 441北34条地点,
 6 : K 435, 7 : K 113北34条地点)



第2図 K113遺跡北35条地点付近地形図(2) (1:2,500)

第1章 発掘調査に至る経過

今回発掘調査を実施した北35条西6・7丁目付近には、北海道学芸大学札幌分校（現北海道教育大学札幌校）の調査により、数カ所の遺跡の存在が示されていた（岩崎・宇田川他1963, 郷土の科学41・42）。しかし、その正確な位置を確定することが困難であったため札幌市教育委員会で作成した埋蔵文化財包蔵地台帳（付分布図）では、文献上ではその存在が示されているが、現在は所在地点を確定できない遺跡、K113遺跡として北35条西5丁目付近に一応その存在を表示していた。

その後、昭和50年に高畠宜一氏が明治年間中頃に作成した遺跡分布図が発見され、現在の札幌市中心部の北海道庁、北大植物園、北海道知事公室、琴似地区から北区麻生町に至る今はなき小河川、いわゆる旧琴似川流域に約800軒近くの竪穴住居跡が存在したことが判明した（羽賀1975、「札幌市琴似川流域にあった竪穴住居跡群」北海道考古学第11輯）。

この分布図の発見後、旧琴似川流域の各種開発行為にあたって事前協議を行い発掘調査を実施した結果、麻生地区K446遺跡（上野1979, 札幌市文化財調査報告書「以下札文報」XX），北陽小学校K460遺跡（上野1980, 札文報XXV），K36遺跡（上野・羽賀1987, 札文報XXXIII），北陽中学校K441遺跡北34条地点（上野1989, 札文報XXXVII），高速自動車道K441遺跡北33条地点（羽賀1989, 札文報XXXVI），旧北大第二農場K435遺跡（上野・仙庭1993, 札文報XLII）および北大構内などで擦文時代の集落が相次いで発見され、高畠分布図の正確さが証明された。

本地区は、前述のごとく正確な遺跡の位置が特定できない地区であったが、平成5年7月北34条西5丁目の民間高層分譲住宅の建設にあたる試掘調査により擦文時代の竪穴住居跡が確認され、本地区でも埋蔵文化財が発見される確率が高くなっていた。

平成6年3月、札幌市が本地区に所有している土地を売却することとなり、埋蔵文化財の所在に関し文化財課に照会があった。文化財課としては、現在のところ周知の埋蔵文化財は存在しないが前述のようにこの付近での埋蔵文化財の発見が相次いでおり、新しい包蔵地の発見の可能性が高いため試掘調査を実施し包蔵地の有無を確認するよう協力を求めた。

試掘調査は、諸般の事情から3月中に実施することとし3月23日から30日の間に除雪を行いながら実施した。試掘調査の結果、2カ所のテストトレンチから竪穴住居跡のかまどと思われる骨片を含む焼土と土器が発見され、3900m²については本発掘調査が必要であると判断された。

発掘調査は、文化財課の業務の調整を行った結果、6月から9月までの間に実施することとし平成6年5月16日文化財保護法に基づく発掘通知書を文化庁あて提出した。

第2章 遺跡の位置と環境（第1, 2図, 付図1, 図版1）

本遺跡の周辺には前章でも述べており、数多くの擦文時代の遺跡が点在する。これらはすべて旧琴似川水系に位置する。札幌市教育委員会が発掘調査をした遺跡のみを取り上げてもK446遺跡（第1図1），K460遺跡（第1図2），K36遺跡（第1図3），K441遺跡北33条地点（第1図4），K441遺跡北34条地点（第1図5），K435遺跡（第1図6），K113遺跡北34条地点（第1図7, 上野1995, 札文報49）などがある。

これらの遺跡の時代は、K113遺跡北34条地点で発見された統縄文時代の北大式の時期が最も古く、

その他はすべて擦文時代に属する。

本遺跡も旧琴似川流域の遺跡の一つである。発掘区の北東側には、ゴミが埋めたてられており（付図1 斜線スクリーン）昭和も中頃までは、湿地を形成していた跡が見られる。今回の発掘では明らかになしえなかつたが、この湿地は試掘調査の所見では砂の堆積が著しく見られ旧琴似川の一部となるものと考えられる。

遺跡の微視的地形は、この河川と考えられる低地部に沿う状態で自然堤防状の高まりが見られる。現地形は、畑作およびその後の自動車教習所のコース作成などにより一部削平が行われたようで、この自然堤防状の部分では黒色土は全く見ることが出来ず、これから離れるに従って標高が低くなり黒土と褐色砂質土の漸移層と黒色土が確認されるようになる。

住居跡、焼土などの遺構は河川と考えられる低地に沿う自然堤防状の高まりのおおよそ50mの幅の範囲内に営まれている。このあり方は、旧琴似川流域の他の多くの遺跡の遺構のあり方が旧河川から20~60mの幅のなかに営まれていることと大きく矛盾するものではない。

第3章 発掘調査の方法（第2図、付図1、図版2）

発掘調査対象地が不整三角形を呈しているため、発掘対象地に対し比較的長い辺を形成する新琴似二番線敷地の境界線を基線とした。

発掘は、グリッド方式で行うこととし、一辺10×10mのグリッドを設定した。各グリッドの呼称はX軸、Y軸の組み合せを行いX軸は01から13、Y軸は01から08列までである。（第2図、付図1）

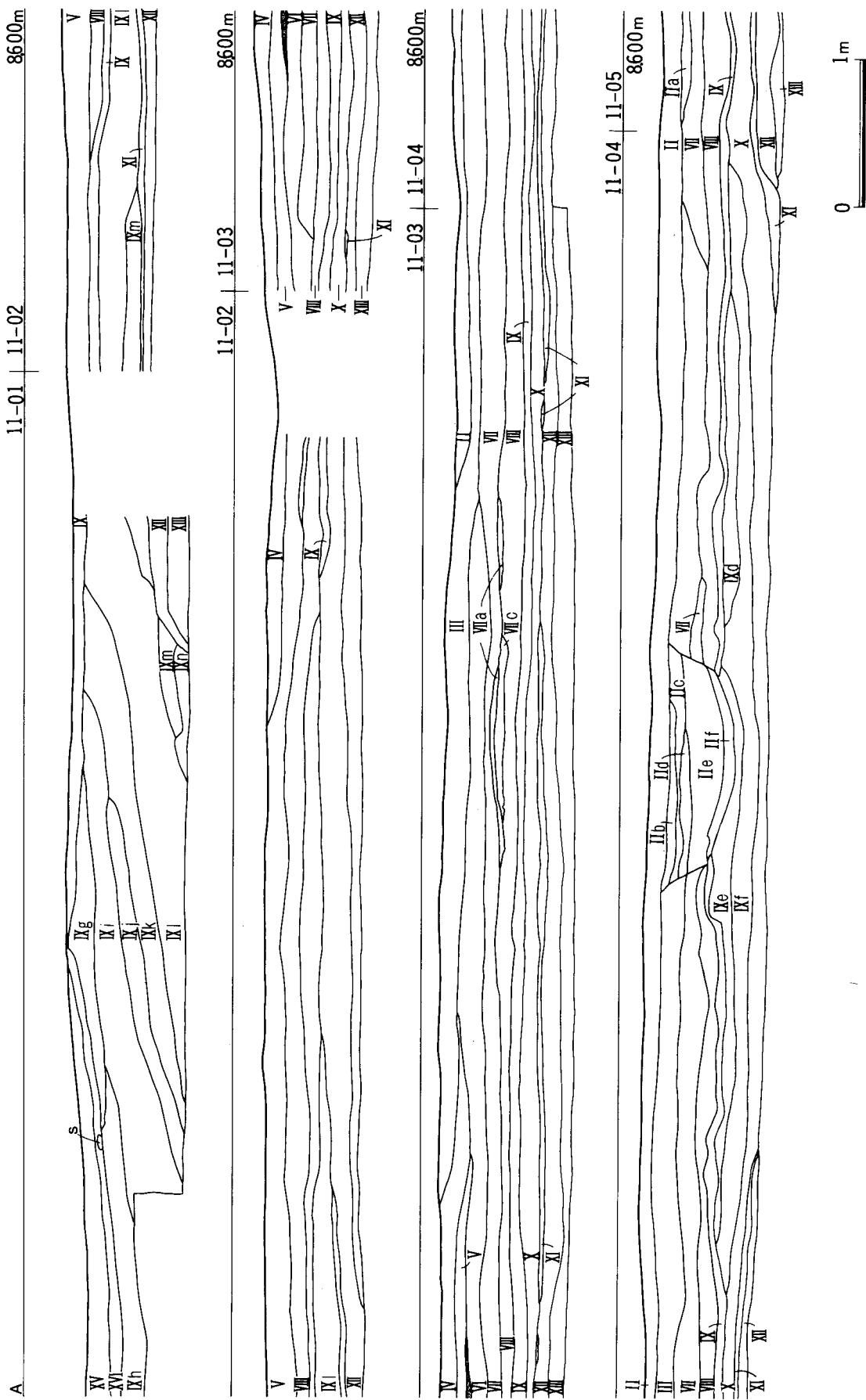
本遺跡は、自動車運転教習所として使用されており教習コースのアスファルト舗装がそのまま残されているため、舗装や盛土を重機で除去することから始めた。発掘予定地の南東11-01区から13-05区の南側に旧河川と思われる低地が広がり、12-04, 12-05を中心とする地区にも大きな搅乱が存在することは、試掘調査で確認されていたが建物の基礎は地中部のコンクリートが残存しており、これを除去するとかなり大きな搅乱となった。

この他の部分では、特別に大きく深い搅乱は確認できなかったが、HP-2付近やその他で浅い小さな搅乱が随所にあり、住居跡や焼土が搅乱を受けその全容を確認しえないものが幾つか存在した。

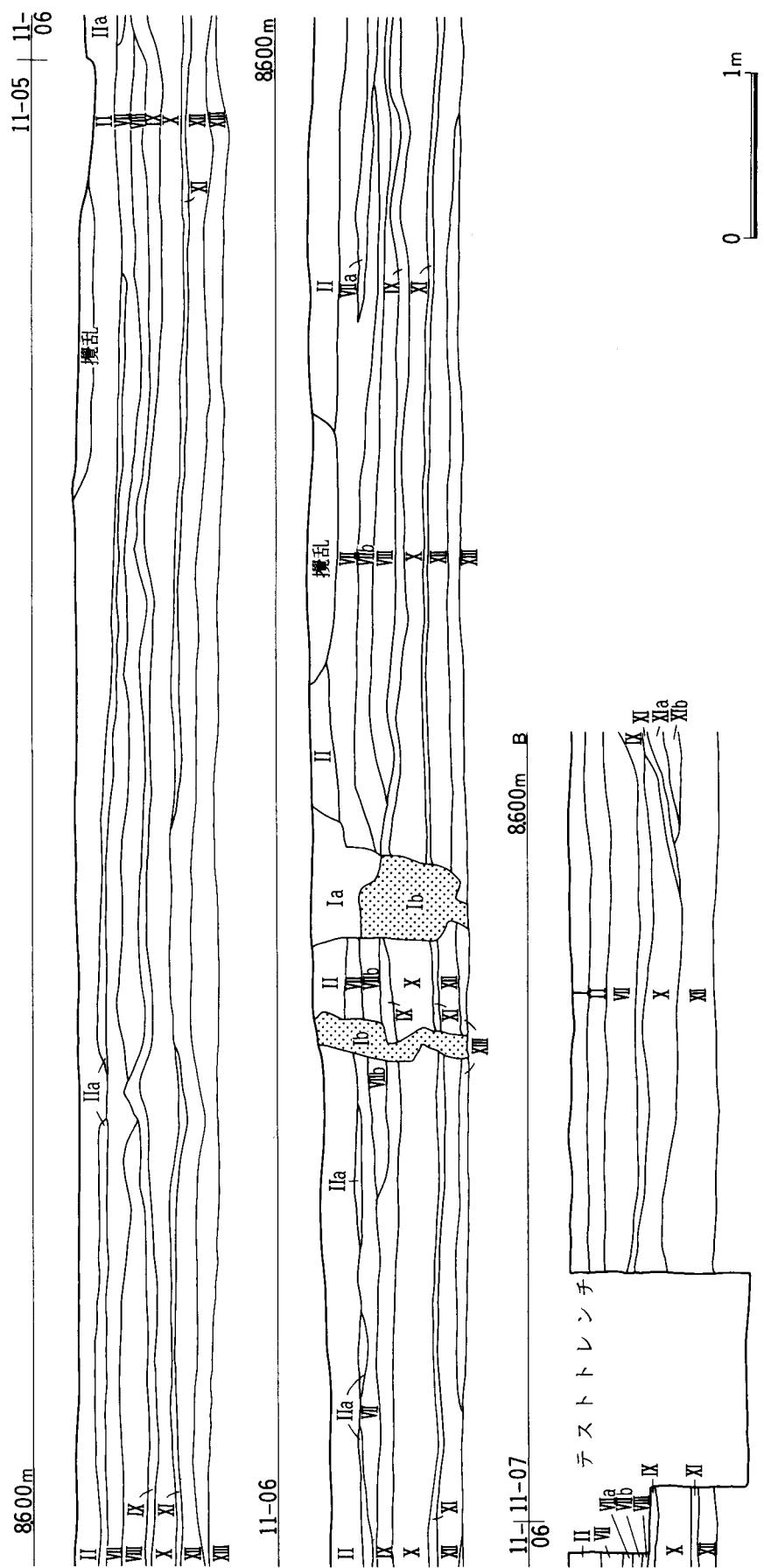
第4章 遺跡の層序（第3~6図、図版3、4）

本遺跡は、南側に略々東西に河川と思われる低地部が見られ、この底部に沿う状態で自然堤防状の高まりがあったものと思われる。畑作耕作や自動車運転教習所の整地により、現在ではこの自然堤防はそれ程明らかではない。しかしセクション図で見ると低地部近くでは盛土、アスファルトなどを除去した段階で遺跡全体の層序のⅢ、Ⅳ層が露出し北側に従ってⅡ層、Ⅰ層が出現し低地部に沿う状態で自然堤防状の高まりが存在したことが十分予想することができる。

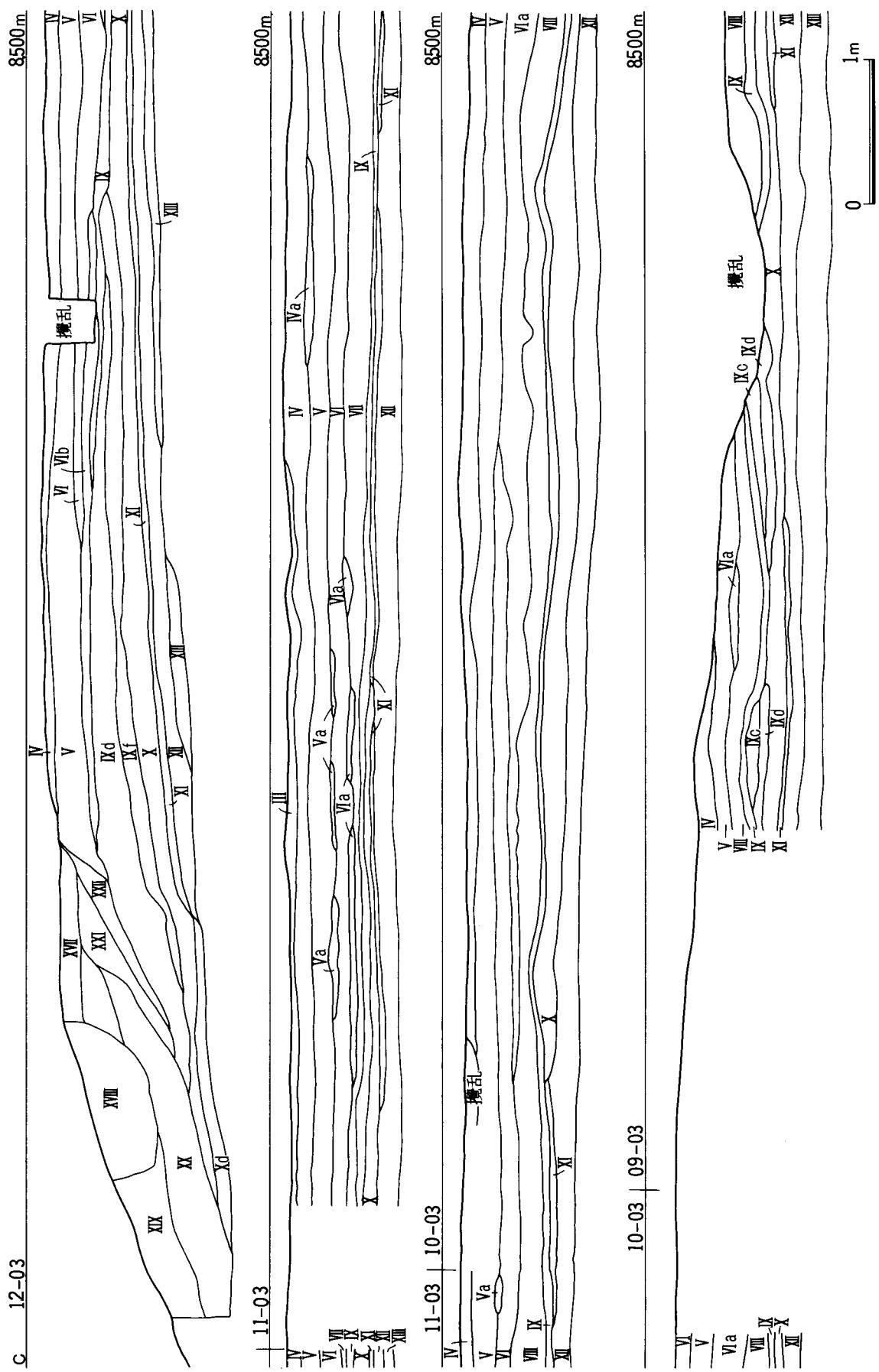
以下に土層の観察結果を簡単に記す。土層説明のなかでアルファベットの枝番が付される層がある。例へばⅡa、Ⅱb層などと説明する場合、a、bの枝番が付された層が色調、土質などが相互に類似するという意味を持つものではなく、土層注記上任意につけられたものである。また、土層観察にあ



第3図 K113遺跡北35条地点セクション図(1) (A-Bセクション(1))



第4図 K113遺跡北35条地点セクション図(2) (A-Bセクション(2))



第5図 K113遺跡北35条地点セクション図(3) (C-Dセクション(1))



第6図 K113遭跡北35条地点セクション図(4) (C-Dセクション(2))

たって標準土色帳（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用したものと、経験的カンによるものとがあり調査に一貫性を欠いている部分がある。

I 層：灰オリーブ（5 Y 4/2）黒色土と褐色土の漸移層。本来は、この上層の黒色土層が存在したと思われるが、発掘区の大部分では削平により失われている。

I a 層：黒色土。地割れに落ち込んだ土。

I b 層：黄褐色砂（2.5 Y 7/4）。VII b 層より粒子が細かい。地震の液状化により噴出した砂である。

A-B セクション（第4図中段）では、上幅約80cmの大きな地割れとその右脇に幅約20cmの小さな地割れが2本見られる。この地割れは、南側の低地に沿う状態で見られ C-D セクションの X c, X d 層に対応し、第2号竪穴住居跡の床面にもその跡が見られる。しかし、西に行くに従い細くなっている。09-04、第2号竪穴住居跡の埋土などでは、この地割れに落ち込んだ焼土や土器が多数発見され、噴砂が落ちついた後でこの部分が陥没した様子をうかがうことができる。

II 層：浅黄色シルト（2.5 Y 7/4）。

II a 層：にぶい黄色砂（2.5 Y 6/4）。粒子が粗い。

II b 層：黄褐色砂（2.5 Y 5/4）。粒子が細かい。

II c 層：オリーブ褐色砂（2.5 Y 4/6）。粒子が粗い。

II d 層：黄褐色砂（2.5 Y 5/3）。粒子が粗い。

II e 層：黄褐色砂（2.5 Y 2/3）。粒子が粗い。

II f 層：明褐色砂（7.5 YR 5/8）。鉄分の沈着が著しい。

II b 層から II f 層は、III層までが形成された後に一度浸食を受けた後、再び堆積した層である。

III 層：黄褐色シルト（2.5 Y 5/4）。

IV 層：黄褐色砂（2.5 Y 5/4）。粒子が細かい。本遺跡の多くの遺構は、この層から発見される。

IV a 層：にぶい黄褐色砂（2.5 Y 6/4）。

V 層：にぶい黄色シルト（2.5 Y 6/4）。草木の根に鉄分の沈着した痕が少ない。

V a 層：にぶい黄褐色砂（2.5 Y 6/4）。

VI 層：明黄色シルト（2.5 Y 6/6）。草木の根に鉄分の沈着した痕が多い。この層の上面にも焼土が見られる。古い文化層が存在した可能性があるが、平面的には明確に確認できなかった。

VII a 層：にぶい黄色砂（2.5 Y 6/4）。

VII b 層：褐色シルト（7.5 YR 4/4）。鉄分の沈着した層。

VII 層：明褐色シルト（2.5 Y 7/6）。やや砂質が強い。

VII a 層：にぶい黄褐色砂（2.5 Y 6/4）。粒子が極めて粗い。

VII b 層：黄褐色砂（2.5 Y 5/4）。

VII c 層：黄褐色シルト（2.5 Y 5/4）。

VIII 層：灰黄色シルト（2.5 Y 6/2）。草木の根に鉄分の沈着した痕が見られる。

IX 層：明褐色シルト（7.5 YR 5/8）。鉄分の沈着が著しい。

IX a 層：にぶい黄褐色シルト（10 YR 5/4）。砂が混在。

IX b 層：オリーブ褐色シルト（2.5 Y 4/6）。

IX c 層：黄褐色砂（2.5 Y 5/6）。

IX d 層：灰白色シルト（5 Y 1/2）。

IX e 層：灰黄色砂 (2.5Y6/2)。粒子が細かい。

IX f 層：オリーブ黄色シルト (5Y6/4)。砂が混在。

IX g 層：明褐色シルト (2.5Y6/6)。草木の根に沈着した鉄分が多い。

IX h 層：黄褐色シルト (2.5Y5/4)。草木の根に沈着した鉄分が多い。

IX i 層：灰オリーブシルト (5YR6/2)。草木の根に沈着した鉄分が多い。

IX j 層：黄褐色砂 (10YR5/8)。粒子が粗い。草木の根に沈着した鉄分が多い。

IX k 層：灰色シルト (5YR6/1)。黄色砂が斑状に混じる。草木の根に沈着した鉄分が多い。

IX l 層：黄褐色シルト (2.5Y5/6)。細粒砂の混合草木の根に沈着した鉄分が多い。

IX m 層：灰色シルト (5Y6/1)。ところどころに鉄分が沈着する。

IX n 層：灰色シルト (5Y6/1)。IX m 層より鉄分が少ない。

X II 層, X III 層は 11-01 区で急激に落ち込み低地ないし河川を形成していたと思われる。IX g 層から IX n 層は、その低地ないし河川へ落ち込む肩口に堆積した層である。

X 層：灰褐色シルト (2.5Y6/2)。草木の根に沈着した鉄分が多い。

X a 層：オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)。

X b 層：褐色砂 (10YR4/6)。粒子が粗い。

X c 層：褐色シルト (10YR4/4)。砂が混合。

X b 層, X c 層は地震による液状化現象により噴き上げた砂である。噴砂の本体はセクション図の左手にあるが測量用トランシットを設置する原点に近く未発掘である。C-D セクション I b 層に対応する層である。

X d 層：暗オリーブ砂 (5Y4/3)。粒子が極めて細かい。

X II 層：灰オリーブシルト (2.5Y5/3)。炭化物が混じる。粘性が強い。

X III 層：暗オリーブ砂 (10YR5/6)。

X IV 層：褐色砂 (10YR4/4)。粒子が細かい。

X V 層：灰褐色シルト (2.5Y7/2)。

X VI 層：黄灰色シルト (2.5Y5/1)。

X V 層, X VI 層は IX g 層から IX n 層の堆積した後の傾斜面に堆積している。ゆるい傾斜を示し沢ないし河川へと連なるものと思われる。

X VII 層：褐色シルト (10YR5/8)。

X VIII 層：黄褐色シルト (2.5Y5/1)。炭化物を含む。

X IX 層：黄褐色シルト (2.5Y5/1)。

X X 層：赤褐色砂 (5YR4/6)。粒子がやや粗い。

X X I 層：黄褐色シルト (2.5Y5/4)。炭化物をわずかに含む。

X X II 層：オリーブ褐色シルト (2.5Y4/6)。炭化物を含む。

X VII 層から X X II 層は、IV 層から X 層までが堆積した後に一度浸食を受け、沢ないし河川が形成された後に堆積した層である。12-03 区側に急激に落ち込む。

第5章 遺構および遺物

本遺跡の発掘調査では4軒の竪穴住居跡と20カ所の焼土と炭化物が発見された。竪穴住居跡は発掘区南側の河川と思われる低地から西側に広がる地域に存在する。焼土は、竪穴住居跡の近くおよび北側に存在する。焼土10, 18はL状を呈している。

第1節 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (第7~9図, 第1, 5, 14表, 図版5~9)

06-01, 06-02区を中心とし, 05-01, 05-02区に一部分がかかっている。大きさは長辺5.97m×5.85mでほぼ方形である。深さは確認面から約40cmである。本発掘区から北西に残存しているかつての耕作土の黒色土を除去した段階で、黒色土の埋土が明らかとなりそのプランを確認することができた。他の3軒の竪穴住居跡は、黒色土の埋土が全く見られず本号のみが特異なあり方を示している。埋土の層序は

- 1層：黒色土 (10YR 2/1)。腐植土。火山灰らしい粒子が混じる。
- 2層：黒褐色土 (10YR 3/2)。黒色土中に褐色の斑点が入る。
- 3層：黒褐色土 (10YR 3/3)。黒色土中に褐色の斑点が入る。
- 4層：褐色シルト (7.5YR 4/4)。
- 5層：褐色シルト (10YR 4/6)。
- 6層：黄褐色シルト (10YR 5/6)。
- 7層：黄褐色粘土 (10YR 5/4)。

床面からは、柱穴4カ所が発見された。柱穴内の埋土は色調が濃くしかも極めてやわらかかったため、床面を検出した段階で確認ができた。

柱穴1 (第8図柱穴1)は、大きさ32×30cm, 深さ56cm, 柱穴2 (第8図柱穴2)は大きさ33×29cm, 深さ72cm, 柱穴3 (第8図柱穴3)は、大きさ35×32cm, 深さ61cm, 柱穴4 (第8図柱穴4)は、大きさ25×24cm, 深さ64cmである。

柱穴の埋土は次のとおりである。

1層：黒褐色粘土 (10YR 3/2)。炭化物が混じる。柱穴3は明瞭でない。2層：暗褐色粘土 (10YR 3/4)。炭化物が少ない。3層：灰褐色粘土 (10YR 5/2)。柱を立てた後で埋めた土。4層：柱根が腐植し出来た空洞。5層：残存柱根。

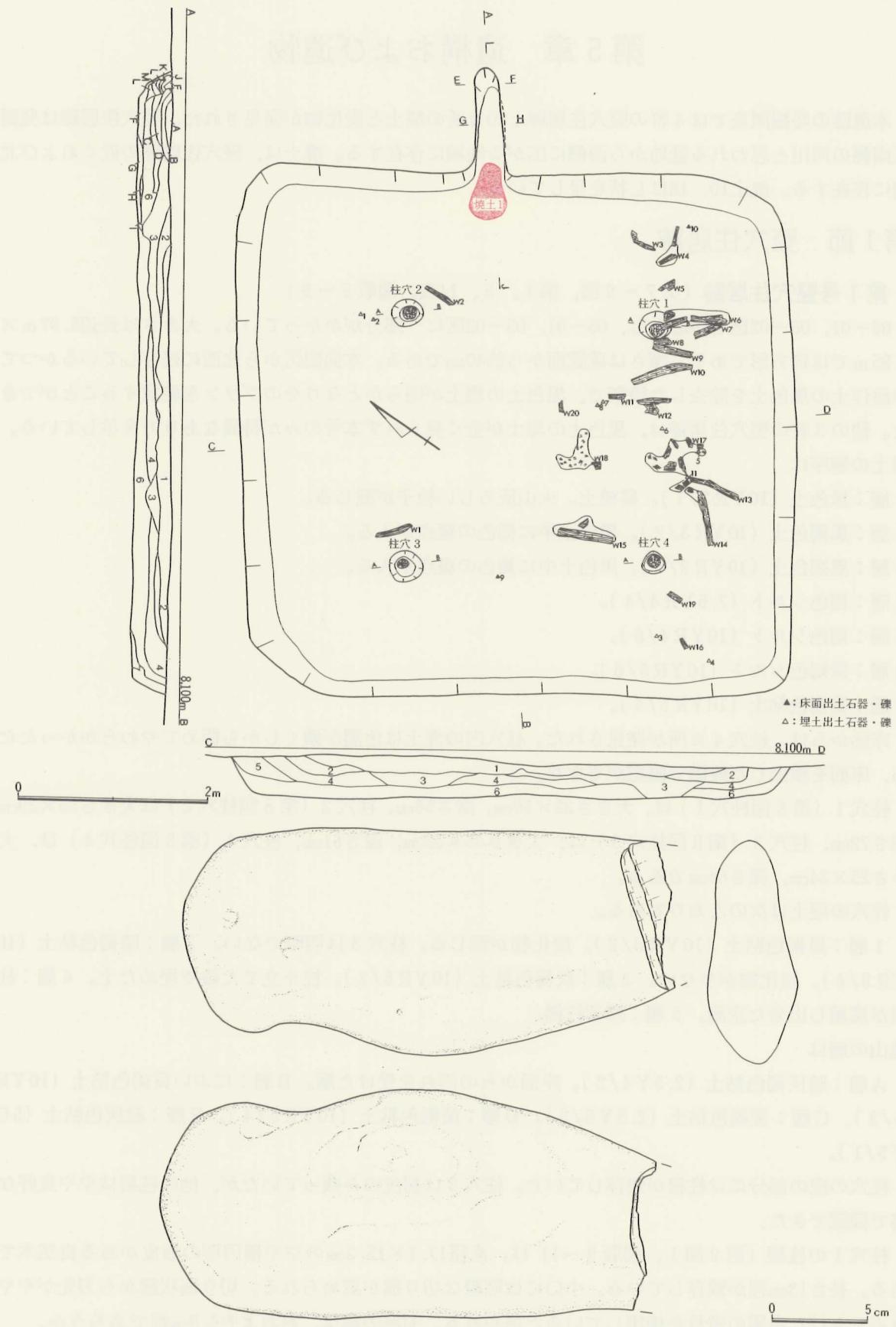
地山の層は

A層：暗灰褐色粘土 (2.5Y 4/2)。床面からの汚れを受けた層。B層：にぶい黄褐色粘土 (10YR 5/3)。C層：黄褐色粘土 (2.5Y 5/3)。D層：黄褐色粘土 (10YR 5/4)。E層：緑灰色粘土 (5G Y 5/1)。

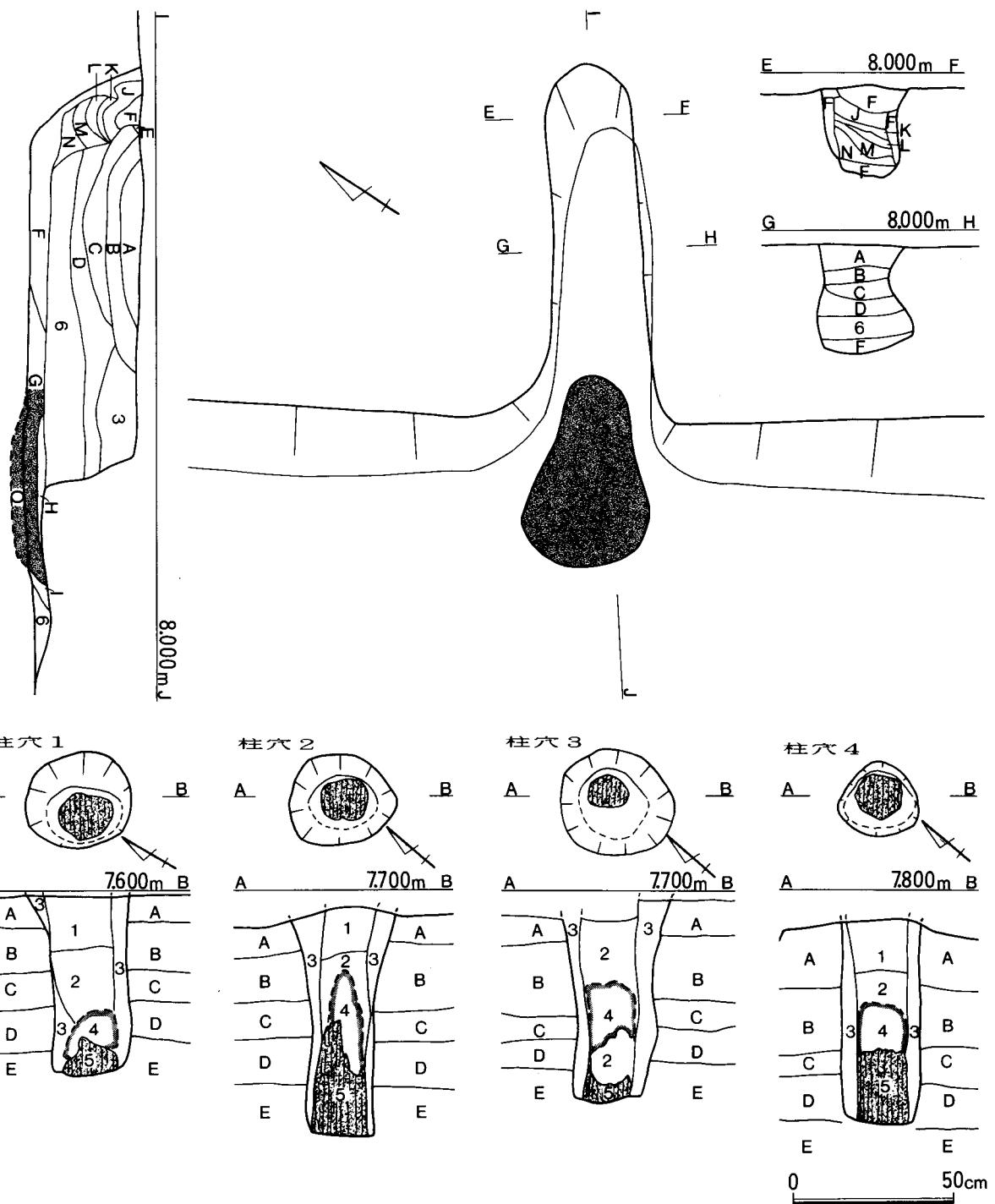
柱穴の底の部分には柱根が残存していた。柱穴3は樹皮のみ残っていたが、他の柱根はやや良好な姿で確認できた。

柱穴1の柱根 (第9図1, 図版9-1)は、直径17.7×15.3cmのやや楕円形の樹皮がある自然木である。長さ13cm程が残存している。小口には明瞭な切り痕が認められる。切り痕状態から刃先がやや丸みをおびた金属の道具を使用していると思われる。刃部の幅は、およそ6.8cm程であろうか。

柱穴2の柱根 (第9図2, 図版9-2)は、最も残存状態が良好である。大きさ15.7×14.5cmであり、

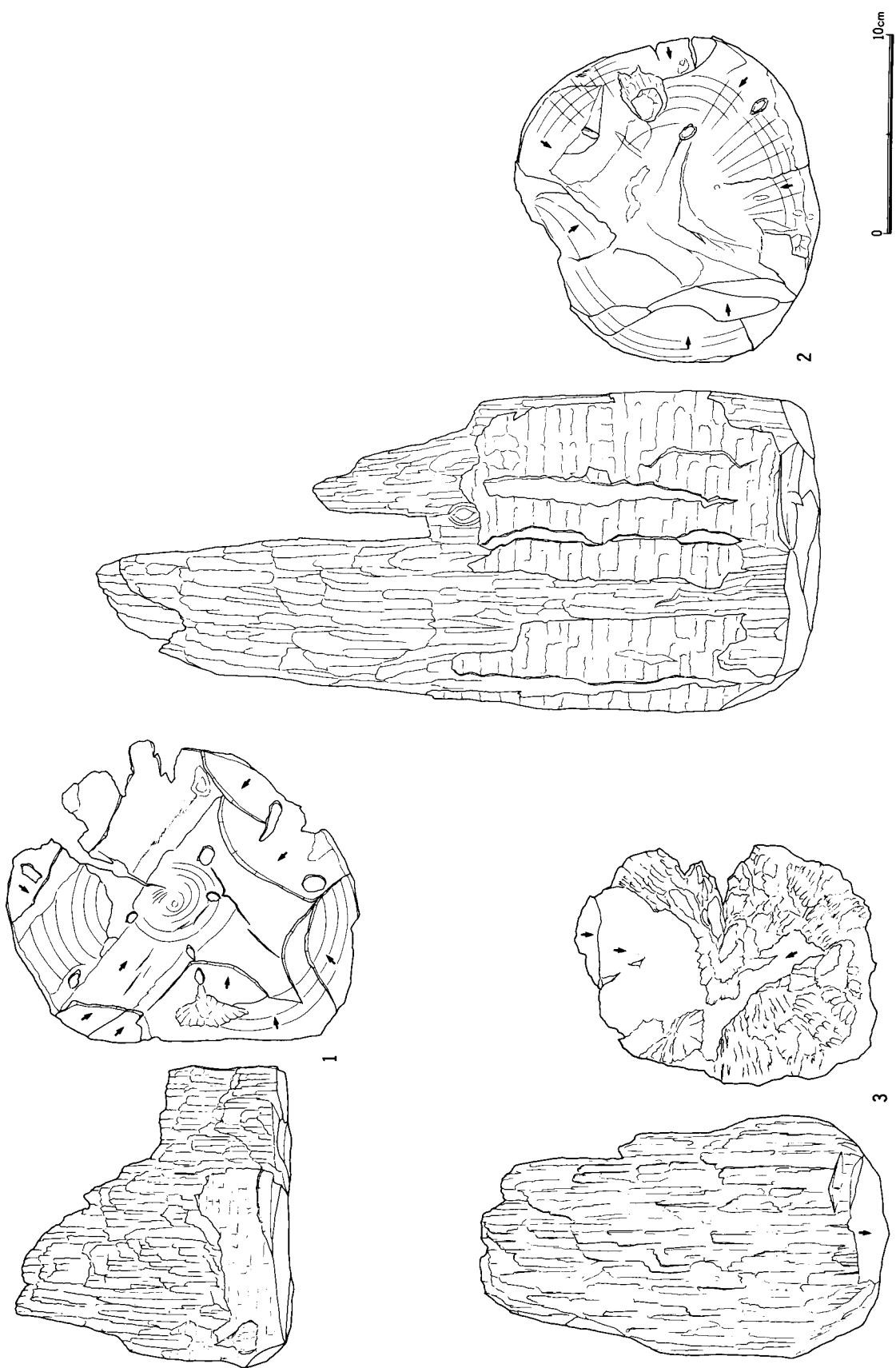


第7図 K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡および出土石器実測図



第8図 K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡かまとおよび柱穴実測図

第9図 K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴出土柱根実測図



長さの現存は約35cmである。樹皮の残る自然木である。小口は金属性斧の切り口が明瞭である。切り口から見ると柱根1よりやや刃先に角のある工具を使用しているようである。

柱穴3の柱根は腐植が著しく樹皮と木片の一部が残存するのみである。

柱穴4の柱根（第9図3、図版9-3）は、樹皮が完全に腐植している。残存太さは15.4×12.2cmであり、長さは21cm程である。出土の段階では、スポンジ状を呈していた。小口も腐植が著しく切り痕は明瞭でない。

これらの樹種については、後章を参照されたい。

床面の南東側からは、炭化木材が発見されかまどの延長線上の壁近くに焼土が存在する。

北東壁には、かまどが存在する。煙道の長さはおよそ2.5m程であり、火床、煙道底面、煙突部はよく加熱を受けている。

A層：褐色粘質土（10YR 4/6）。

B層：黒褐色粘質土（10YR 3/2）。A層より粘性が強い。

C層：赤褐色粘質土（5 YR 3/3）。鉄分の沈着が著しい。

D層：赤褐色粘質土（5 YR 4/6）。C層より粘性が強く鉄分の沈着も著しい。基本層序のIX層。

E層：黒褐色（5 YR 3/1）。加熱され変質した層。

F層：黒色（5 YR 7/1）。加熱され変質した煙道の層。

G層：赤褐色焼土（2.5YR 4/8）。骨粉を含む。

H層：褐色（10YR 4/4）。骨片が多く混じる。

I層：灰黄褐色（10YR 4/2）。炭化物が混じる。

J層：褐色粘質土（7.5YR 4/6）。焼土、炭粒を含む。

K層：黒褐色（5 YR 3/1）。加熱され変質し炭粒を含む。

L層：褐色粘質土（10YR 4/6）。

M層：褐色粘質土（7.5YR 4/4）。

N層：黄褐色粘質土（2.5YR 5/4）。

O層：火床の焼土（2.5YR 4/8）。

キビ1粒（第14表）が検出された。出土遺物は床面から大形の長楕円形で偏平の石（第7図）が発見されたのみである。

第2号竪穴住居跡（第10~13図、第1、2、5、11、13、14表、図版10~13）

試掘調査により焼土と土器の存在が確認された。07-02、08-02区に存在する。その大部分が攪乱を受けており平面形を正確に捉えることが不可能であった。床面の炭化材、炭粒、焼土などから推定をすると長辺7.5m、短辺6.7mぐらいであったと思われる。埋土が比較的よく残っているA-Bセクションでは、次のとおりである。なお、本号の層名同定には標準土色帳を使用していない。

1 層：褐色砂。粒子が粗い。

2 層：褐色砂質土。黄色の斑点が入る。

2 a層：褐色砂質土。2層より黄色斑点が多く入る。

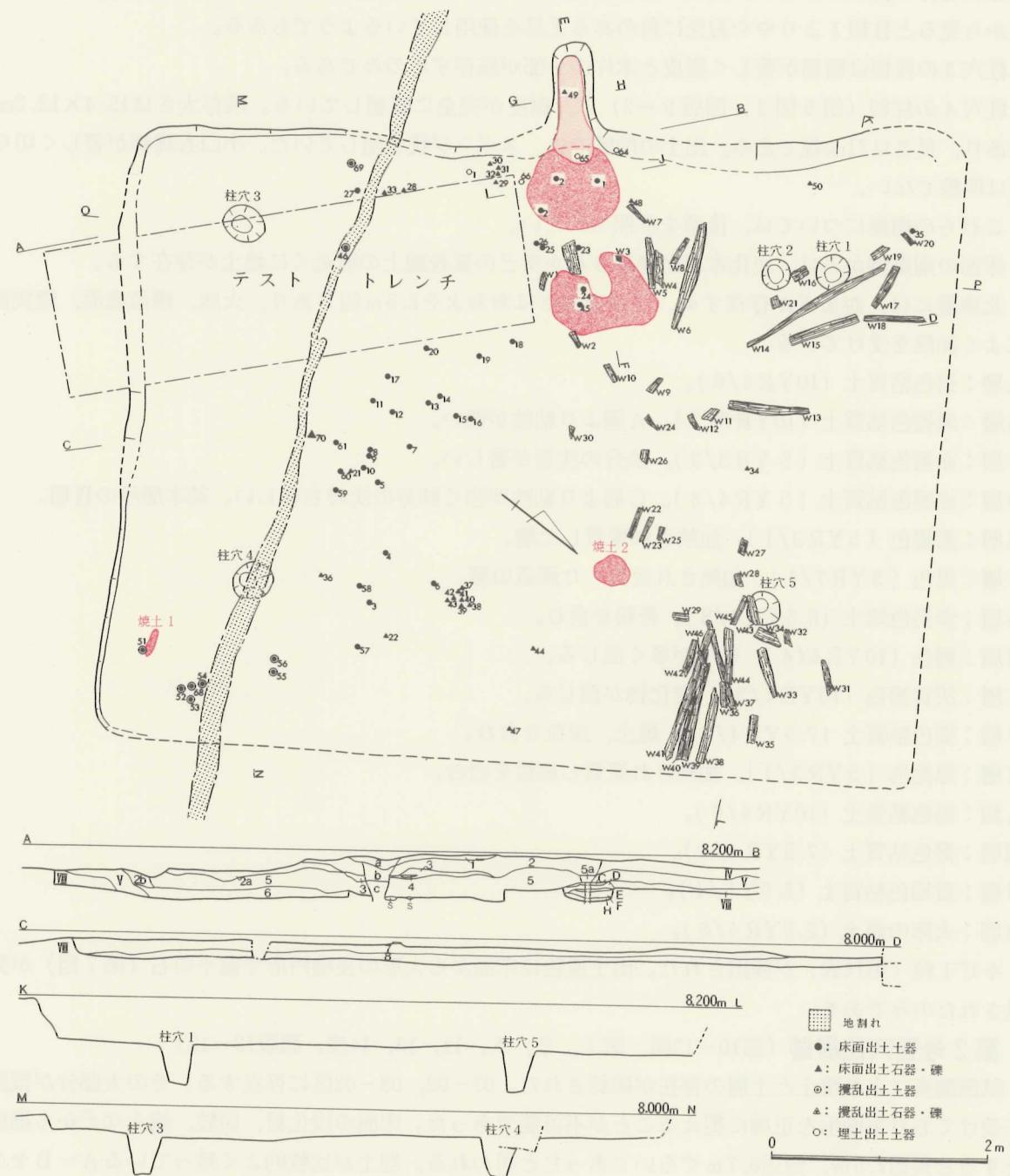
2 b層：褐色砂質土。2、2 a層より黄色斑点が多い。

3 層：褐色砂。炭化物混入。

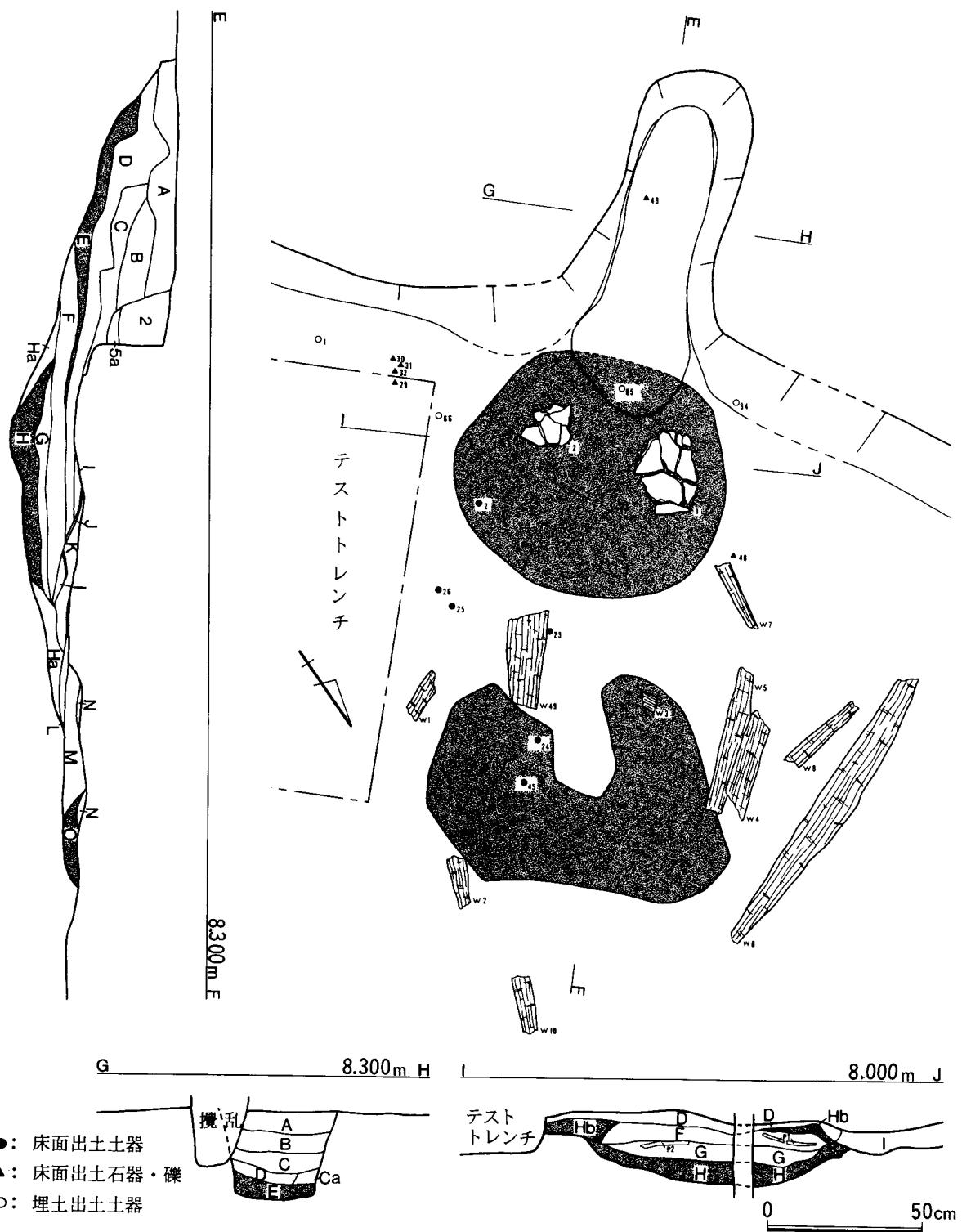
4 層：炭層。

5 層：褐色砂質土。環状の黄色斑点が多く入る。

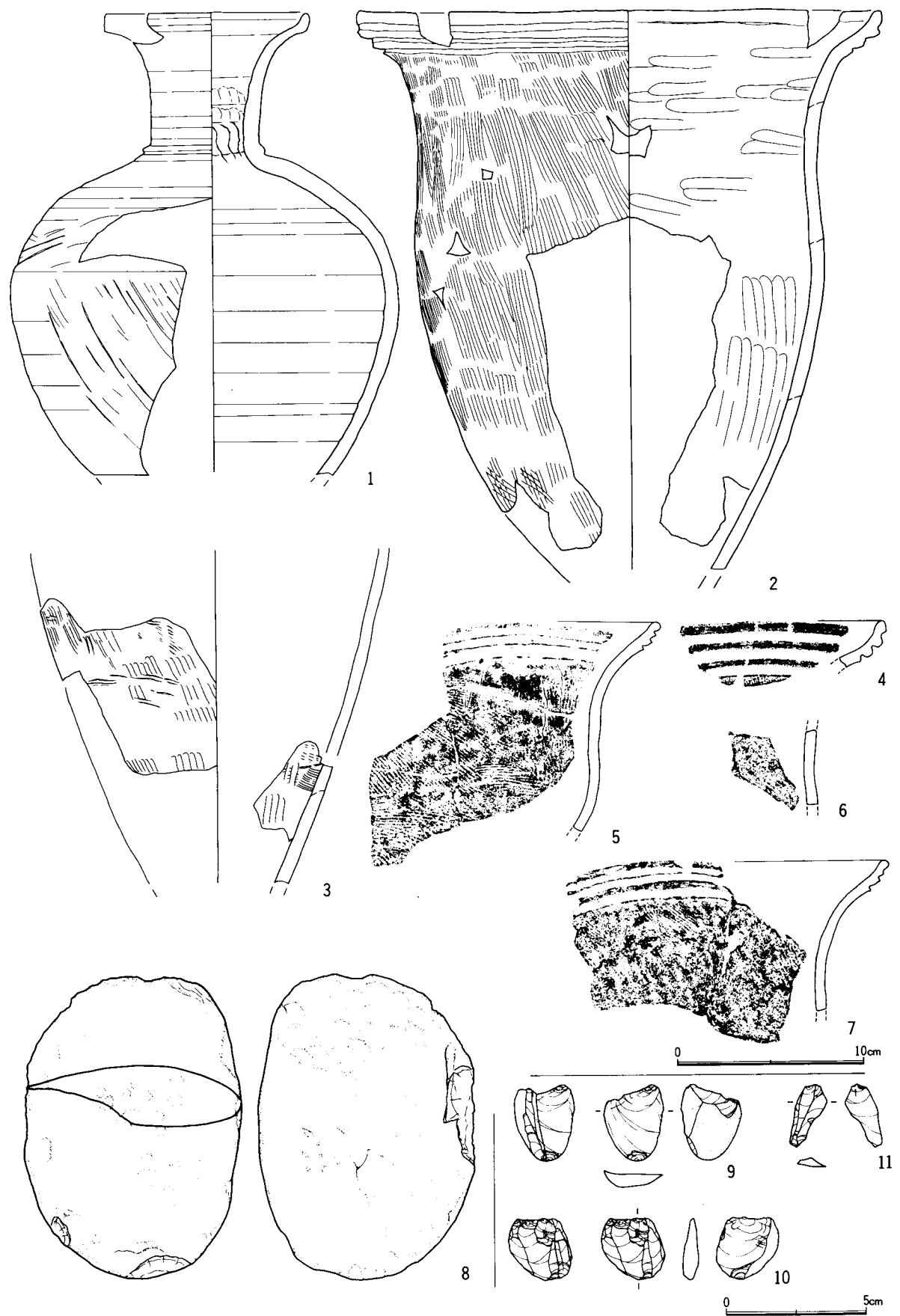
5 a層：褐色砂。



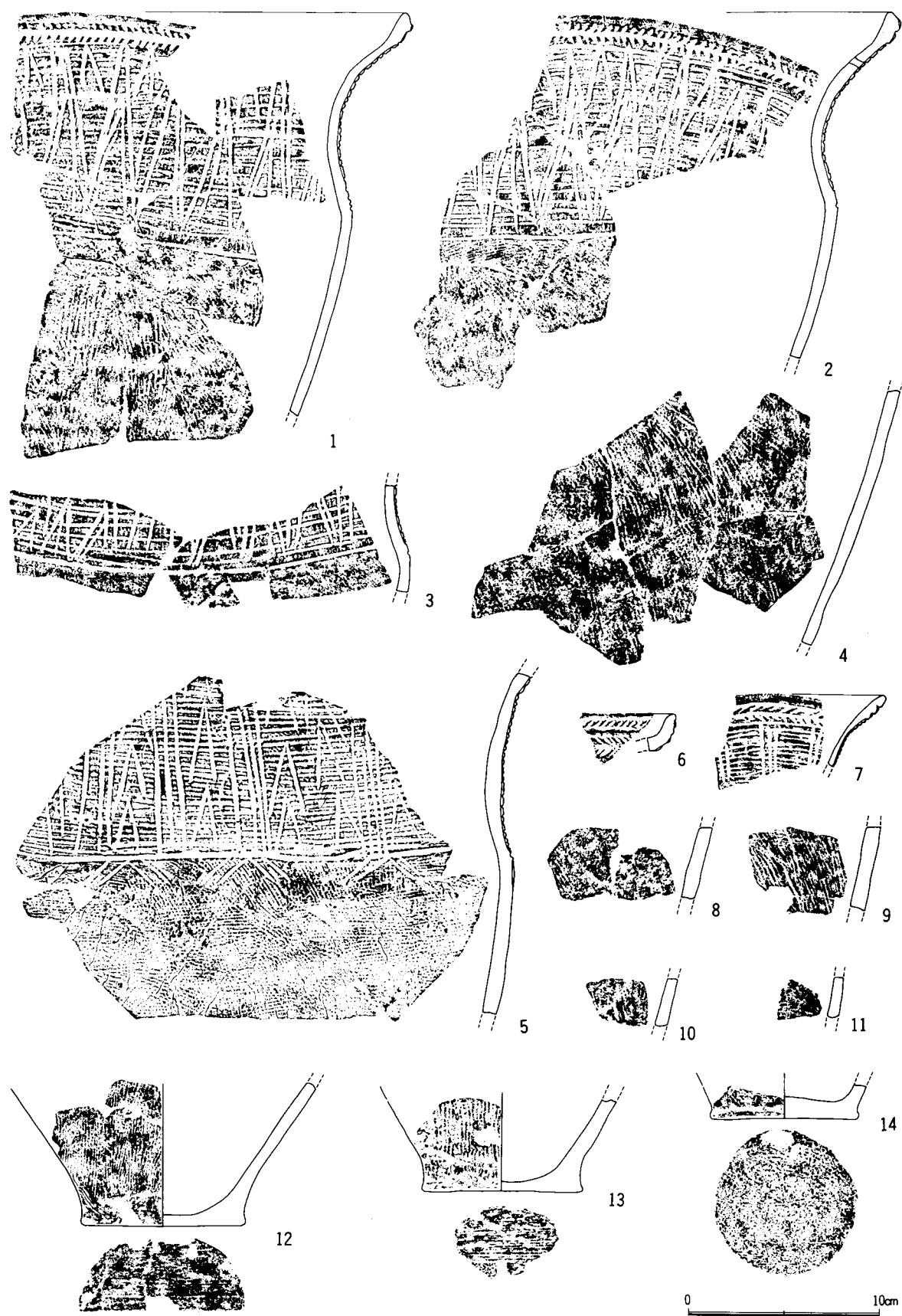
第10図 K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡実測図



第11図 K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡かまど実測図



第12図 K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(1)



第13図 K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

- 6 層：暗褐色砂質土。ところどころに白色砂が帶状に入る。
 - 7 層：褐色砂質土。住居の床面。かまど付近では土器、木炭、焼土を含む。
 - 8 層：褐色砂質土。7層よりやや暗い。床面の汚れを受けている。
- IV, V, VI層は遺跡の基本層（第4, 5図）と同じ。
- a 層：褐色砂。ところどころに黒色土のブロックが混じる。
 - b 層：褐色砂質土。黄色の斑点が入る。
 - c 層：褐色砂質土。黄色の斑点が入るとともに、ところどころに焼土がまじるこの焼土は埋土3, 4層のものと思われる。

AからB層は、遺跡のA-Bセクション11-06区に見られた地震の地割れから続いてくるものである。本住居跡付近では、上幅でも約30cm程とせまくなっている。本住居跡の床面、埋土ともにこの地割れの影響を受けており、柱穴4は分断されている。また、埋土および床面に存在したと考えられる土器がこの地割れのなかに落ち込んでいるものもある。

床面からは柱穴5本が発見された。柱穴1は大きさ33×31cm、深さ40cm、柱穴2は大きさ28×26cm深さ10cm、柱穴3は大きさ40×33cm、深さ36cm、柱穴4は、大きさ38×35cm、深さ35cm、柱穴5は大きさ33×31cm、深さ35cmである。

床面の北西から北側には炭化材が集中して存在し、かまどの延長線上には小さな焼土2が見られた。西側のコーナーの埋土中から焼土1が発見された。床面の南側からは、土器がややまとまった状態で出土し、また、住居跡の南東側の搅乱からも出土しこれらは床面出土土器と接合する。かまどの左側からは黒耀石が出土している。

かまどは南西壁に存在する。かまどのセクションは次のとおりである。

- 2 層：住居埋土と同じ。
 - 5 a 層：住居埋土と同じ。
- A 層：褐色砂。住居廃棄後におおわれた層。一部搅乱を受けている。
 - B 層：搅乱を受けていないA層。
 - C 層：褐色砂。A層より黄色が強い。
 - C a 層：褐色砂。C層より色調が薄い。
 - D 層：褐色砂。焼土がブロック混入。
 - E 層：焼土。褐色砂混入。
 - F 層：炭化物、焼土。
 - G 層：灰層。骨粉を多く混入。
 - H 層：焼土。よく加熱されている。
 - H a 層：黒色。低温で加熱されている。
 - H b 層：焼土。かまど袖が崩れたと思われる焼土。
 - I 層：褐色砂。
 - J 層：炭層。
 - K 層：褐色砂。
 - L 層：炭層。
 - M 層：炭層。
 - N 層：褐色砂。焼土ブロック混入。
 - O 層：焼土。

本号のかまどは、セクションの状態から作りかえられていると思われる。最初にH層の焼土が火床として使用されたようで、その上層にF, G層の炭化物や骨粉を含む灰層が形成されている。次いで煙道部のセクションE層がよく加熱されており、強く熱を受ける煙道として使用されたと思われる。ただし、これと関係する火床の存在は不明である。その後、I, K層などの薄い自然層をはさみ、上層にJ, L, M層などの炭層と焼土O層が存在し、これらが最も新しい時期の火床であると推定ができる。ただ、焼土とかまど煙道との関係はその間のセクションを欠くため明らかにされていない。かまどの火床とするには、煙道より離れすぎているため炉として使用された可能性も考えられる。これらの焼土中からは、ウゲイ、ニシン（第11表）の焼骨が発見された。

遺物は、かまど焼土中から大型の破片（第13図1～5）および深い敲打痕のある偏平な石（第12図8, 図版12-8）が発見された。また、かまど火床左側から黒耀石石核および剝片（第12図9～11, 図版12-9～15）が出土した。

出土遺物（第12, 13図, 第2表, 図版12, 13, 付図2）

第2号竪穴住居跡からは壺類の出土はなく、ほとんどが甕類であったが、須恵器の長頸壺が1点出土している。遺物の出土状況は、南西側壁に構築されたかまど、南側壁、そして東側壁にかけて、竪穴の南側を中心に広く分布しており、東側に比較的礫の出土が目立っている。接合状況を見ると（付図2）竪穴内でほとんどが接合されているが08-04区、09-03区の出土遺物とも接合するなど、遺構外遺物との接合もみられる。ただし、遺構外遺物はプライマリーとして認識することが難しいため、接合線の意味合いについては若干の問題があろう。なお、09-03区出土遺物はF18の上層からの出土であることが調査時に確認されている。また、本遺跡における接合線は全て土器によるものである。

第12図1は須恵器の長頸壺である。直線的にのびる頸部であるが、口縁部で大きく外反し、口端部がほぼ垂直に屈曲する。体部中央より上部に最大径（約21cm）があり、底部に近づくにつれて緩やかに窄まっていく。轆轤水挽きより頸部と体部とを別々に成形し、内面から粘土帯を貼り付けることで接合したもので、その際の粘土の堅さが違ったためかひび割れが生じている。またその上部には指頭によるくぼみも確認できる。さらに体部の最大径にあたる部分には横方向、それ以下には斜め方向にケズリがあり、それによって体部外面下半の轆轤痕は消されている。色調は外面が暗青灰色（Hue 10 BG 3/1）、内面が青灰色（Hue 10 BG 5/1）であるが、胎土観察によれば断面中に薄く挟まれた状態で紫黒色（Hue 5 P 2/1）の部分が確認された。

第12図2, 4は甕である。2は頸部がほぼ垂直に伸び、口縁部に近づくにつれ大きく外反するが、口端部で立ち気味になる。また胴部から底部にかけてはやや張り出し気味であり、底部付近で急に窄まっている。内外面の観察によれば1.5cm幅の輪積み成形である。調整は外面が縦方向の比較的長いストロークのハケメであり、内面は口縁付近がヨコナデ、以上半部は横方向、下半部は縦方向のヘラミガキである。さらに内面には丹念に黒色処理が施され、外面には一部煤が付着している。頸部以下に文様はなく、口縁部に横走沈線が三条巡る。沈線は先端が丸い工具を斜め下から突き上げるような形で深く引いており、結果的に口縁部を段状構造にも捉えることができる。なお4は未接合の口縁部片である。

第12図3は底部に向かってほぼ直線的に窄まる胴部片である。内外面の観察によれば、2cmほどの粘土紐による輪積み痕が確認された。調整は内外面ともハケメ調整後に縦方向のヘラミガキを行っているが、ハケメは外面が斜めもしくは縦方向であり内面は横方向である。また内面の黒色処理は丹念に施されており、外面には一部煤が付着している。

第12図5～7は未接合の同一個体片である。器計は第12図2に似るが、一回り小さく口端部の変化

もそれほどではない。また胴頂部以下の破片は検出されていない。内外面の観察によれば幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形である。外面はヘラミガキで調整され頸部が縦方向、胴頂部は横方向である。内面は横方向のヘラミガキであり、さらに褐色に近い状態の黒色処理が施される。また、被熱によるものと思われる剥離痕も見受けられた。頸部以下に文様はなく口縁部に先端が丸い工具によって施文された横走沈線が三条巡る。沈線は第12図2同様に斜め下から突き上げるようにして施文されている。また5と7の破片には補修孔（径3mm）があり、割れ面には炭化物が付着していた。

第13図1～4は同一個体片であり器形は甕である。底部以外はほぼ接合されてはいるが、個体として組み上がらなかった。頸部の湾曲が著しく口端部がほぼ垂直に立ち上がり、胴部は底部に向かって直線的に窄まっていく器形である。また、約2cmの粘土紐による輪積み成形であることが確認された。調整は外面がほぼ全面縦方向のハケメであるが、胴頂部に若干横方向のハケメ調整が施される。一方内面は口縁部がヨコナデであり、以下横ハケメであるが、さらに上半部横方向、下半部縦方向のヘラミガキを加えている。また内面には褐色状態に近い黒色処理が施されているが、被熱もしくは磨滅によるものかほとんどが失われている。他に内外面には一部炭化物が付着している。文様は、口縁部に横走沈線を施文後、隆帯を作出しその上から矢羽根状に刺突文が横環される。なおその向きは、2の拓影図にあるように、「<」のものと「>」のものが並存している。ちなみに「>」の方が後から施文されている。また頸部には多状に横走沈線を施文後、鋸歯文を頸部全面に展開し、さらに鋸歯文の頂部の合間を埋めるように文様帶上半部に山形文が施文される。

第13図5は、頸部の湾曲が緩く胴部以下が直線的な器形である。内外面の観察によれば約3cmの粘土紐による輪積み成形である。調整は、外面が上半部縦方向、下半部横方向のハケメ、内面は横方向のヘラミガキであり褐色状態に近い黒色処理が施される。文様は頸部に多状の横走沈線を施文後、三条もしくは四条の縦沈線で区画を作り、間に三段の山形文を一列もしくは二列描き込んでおり、胴頂部には二条沈線の山形文が巡っている。

第13図6、7は、口縁部片である。6は口端部が垂直に立ち上がり、先端は尖り気味である。外面はヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキで丹念な黒色処理が施される。文様は横走沈線施文後、その間に斜刻文を互い違いに三段押しつけている。7は口縁部が外反するだけで、口端部での変化はない。器厚が0.3cmと薄く、内径の度合いなどから小型甕と思われる。調整は前述の口縁部片と同じであるが内面の色調は灰黄褐色（Hue 10 YR 4/2）である。文様は口縁部に横走沈線施文後、矢羽根状に刺突文を展開させており頸部には多条の横走沈線施文後、三条の縦沈線を引き下ろしている。

第13図8～11は胴部片である。調整は概ね外面が縦方向のハケメ、内面が縦方向のミガキであるが、9は内面が横方向のヘラミガキであり、11は内外面とも横方向のヘラミガキである。全例、内面に褐色状態に近い黒色処理が施されている。8、9は磨滅している。

第13図12～14は底部片である。全例、微少ながらも底部の張り出しがみられる。外面は縦方向のハケメ、内面は縦方向のミガキであるが、14の外面だけが縦ミガキである。底面は12、13が笪の圧痕であり、14には円形に走る擦痕が確認された。内面の黒色処理は丹念に行われているが、14は被熱によるものと思われる剥離によって内面のほとんどが失われている。

（秋山洋司）

第3号竪穴住居跡（第14～16図、第1、3、11、13、14表、図版14、15）

11-03、12-03区に存在する。試掘調査の折りにかまどの焼土が発見されていた。テストトレーナーと竪穴住居跡の位置を考えるとテストトレーナーの断面に竪穴住居跡の壁の立ちあがりが確認できるはずであったが、試掘調査時や本発掘調査の折りのテストトレーナー壁面と搅乱の溝の精査でも、その痕跡は全く発見することができなかった。そのため11-03区を全体的に掘り下げて行ったところ、まと

また炭化材が確認されるに至った。また、テストトレーンチ断面で確認された焼土を精査の結果かまどの状態を呈したことから竪穴住居跡の存在が考えられるに至った。かまどと炭化材、焼土などを手がかりとして精査をした結果北側の壁の存在が、かろうじて確認された。南側から南東側は斜面で河川に続き低地となるため、壁や床面は確認ができなかった。

本号の埋土は床面の一部しか確認されていない。

1層：赤褐色焼土。

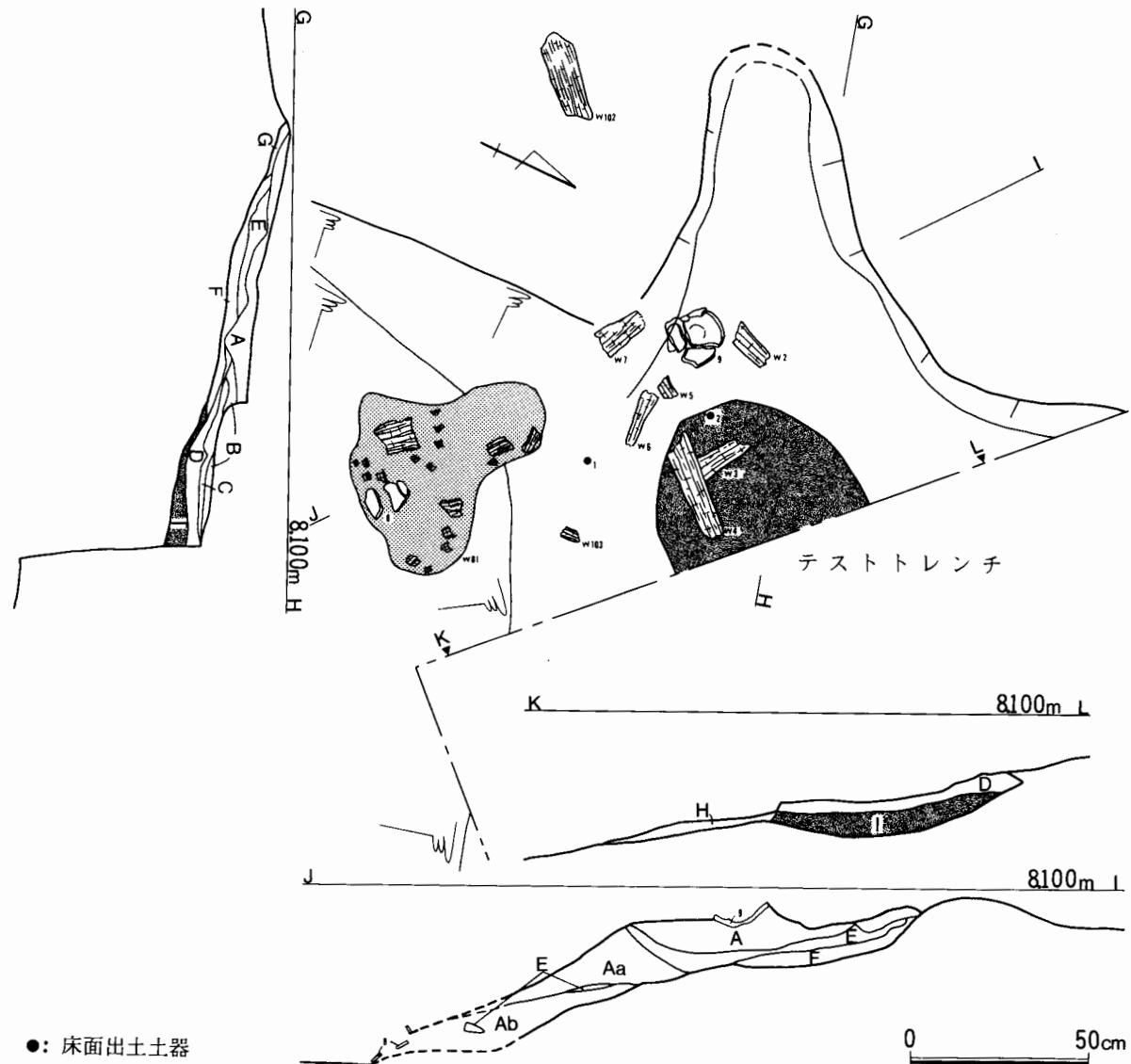
2層：赤褐色シルト。炭化物を多く含む。

3層：褐色シルト。炭化物を含む床面と考えられる。

4層：灰褐色粘質シルト。わずかに炭化物を含む。



第14図 K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡実測図

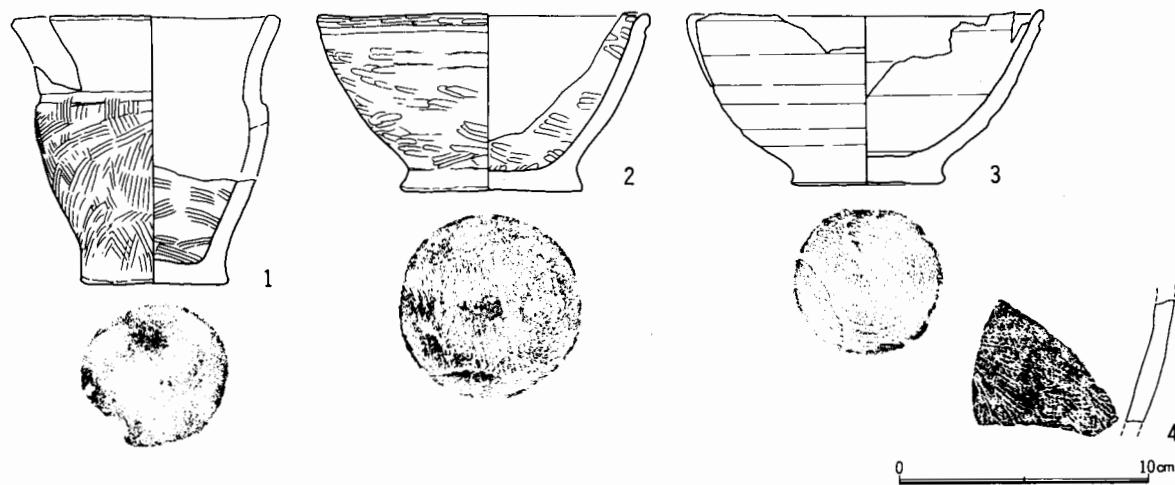


第15図 K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡かまど実測図

以下は、竪穴住居跡の外側の層である。遺跡の基本層序の層に関連する層と考えられる。

- a層：灰褐色砂。
- b層：褐色砂。わずかに鉄分を含む。
- c層：茶褐色砂。鉄分の沈着した粒子のある砂。
- d層：暗灰褐色砂。わずかに粘性があり粒子が粗い。
- e層：黄褐色シルト。鉄部が沈着し白色の斑点が入る。
- f層：青灰色シルト。わずかに鉄分が沈着する。
- g層：褐色シルト。鉄分が沈着する。

床面からは焼土、炭層、炭化材がかなりまとまって発見された。床面を精査したが柱穴は検出されなかった。かまどは西側壁に存在する。



第16図 K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡出土遺物

- A 層：茶褐色砂。炭粒、焼土粒をふくみ鉄分の沈着した層。
- A a層 A b層：基本的にはA層と同一であるが、それぞれの間にE層が介在するため分層した。
- B 層：灰褐色砂。わずかな炭化物を含む。
- C 層：暗褐色砂。焼土が混じる。
- D 層：灰層。わずかな焼土粒、炭粒と多量の骨片を含む。
- E 層：灰褐色砂。わずかな炭化物と褐色砂を含む。
- F 層：炭層。褐色砂を斑状に含む。かまどの煙道の炭化層か。
- G 層：F層とほぼ同じであるが色調がやや濃い。
- H 層：灰褐色砂。炭化物、骨片を含む。D層の広げられたものか。
- I 層：火床の焼土。

かまどの南側は河川の低地であり急激に低くなる。かまどからは、完形の壊一点（第15図9、第16図3）が発見された。また、かまど南側の斜面に転落した炭層からは小型甕（第15図8、第16図1）が出土している。灰層中からは、ウグイの骨が多く発見された（第11表）。栽培種子は発見されなかった（第14表）。

出土遺物は、かまど周辺の土器が主であり床面からは礫が数点発見されたのみである。

出土遺物（第16図、第3表、図版15B、付図2）

第3号竪穴住居跡からは出土点数は少ないものの小型の甕が一点、壊が二点復元されているがいわゆる甕については胴部片が一点出土しただけである。遺物の出土状況は竪穴西側に構築されたかまど周辺、竪穴の北側壁を中心に点在しているが北側壁の遺物はほとんどが礫であり逆にかまど周辺の遺物は土器であった。この傾向は竪穴外にも反映しており、11-03区の発掘区出土遺物はかまどに近い位置で出土した遺物は土器主体であり北側壁に近いものは礫主体である。接合状況はかまど周辺で遺物が接合しているほか08-03区の遺物と接合している個体（第16図1）もあるが、これもプライマリーとしての認識が難しいため接合線については疑問が残されている。

第16図1、4は甕である。1は器高10.9cmの小甕である。幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形であり、口縁部の開きが弱く、頸部に段を持ち、全体に比して底部が大きい器形である。外面は頸部までヨコナデ胴部以下はほぼ縦方向のハケメによって調整される。一方内面は横方向のハケメが全面に

行われているが、さらに丹念な黒色処理が施されている。また底面には整形によってほとんど消された状態ではあったが箒の圧痕が確認された。この小甕には文様はみられないが、段を作出した際についたと思われる纖弱な沈線状のくぼみが处处に見受けられる。

4は甕の胴部片である。外面は横から斜め方向のハケメで内面は横方向のミガキによって調整される。また内面の黒色処理は褐色状態である。

第16図2, 3は壺である。2は底部が断面台形状に底面に張り出しており、そこからやや張り出し気味に、緩やかに湾曲しながら立ち上がっている。器高(7.1cm)に比して底部が大きめである。また体部と底部の接合痕が観察され体部中央よりやや上部には、幅約1cmほどの輪積痕も確認された。調整は外面が横方向のハケメ後その上から横方向のヘラミガキが入り、内面は横方向のヘラミガキで灰色に近い状態の黒色処理が施されている。また底面には箒の圧痕が残り口縁部には整形した際にできたとみられる沈線状の浅いくぼみが観察されている。

3は壺である。轆轤水挽きによって成形され外面には轆轤痕が、また底面には回転糸切りによる切り離し痕がある。器形は2に似るが底部はそれほど大きくはない。内面は丁寧にみがかれ起伏ひとつない仕上がりであり、さらに丹念な黒色処理が施されている。また被熱によるものと思われる剥離痕が内外面にみられ一部灰色に変色している。

(秋山洋司)

第4号竪穴住居跡(第17~21図、第1, 4, 5, 11, 14表、図版16~21)

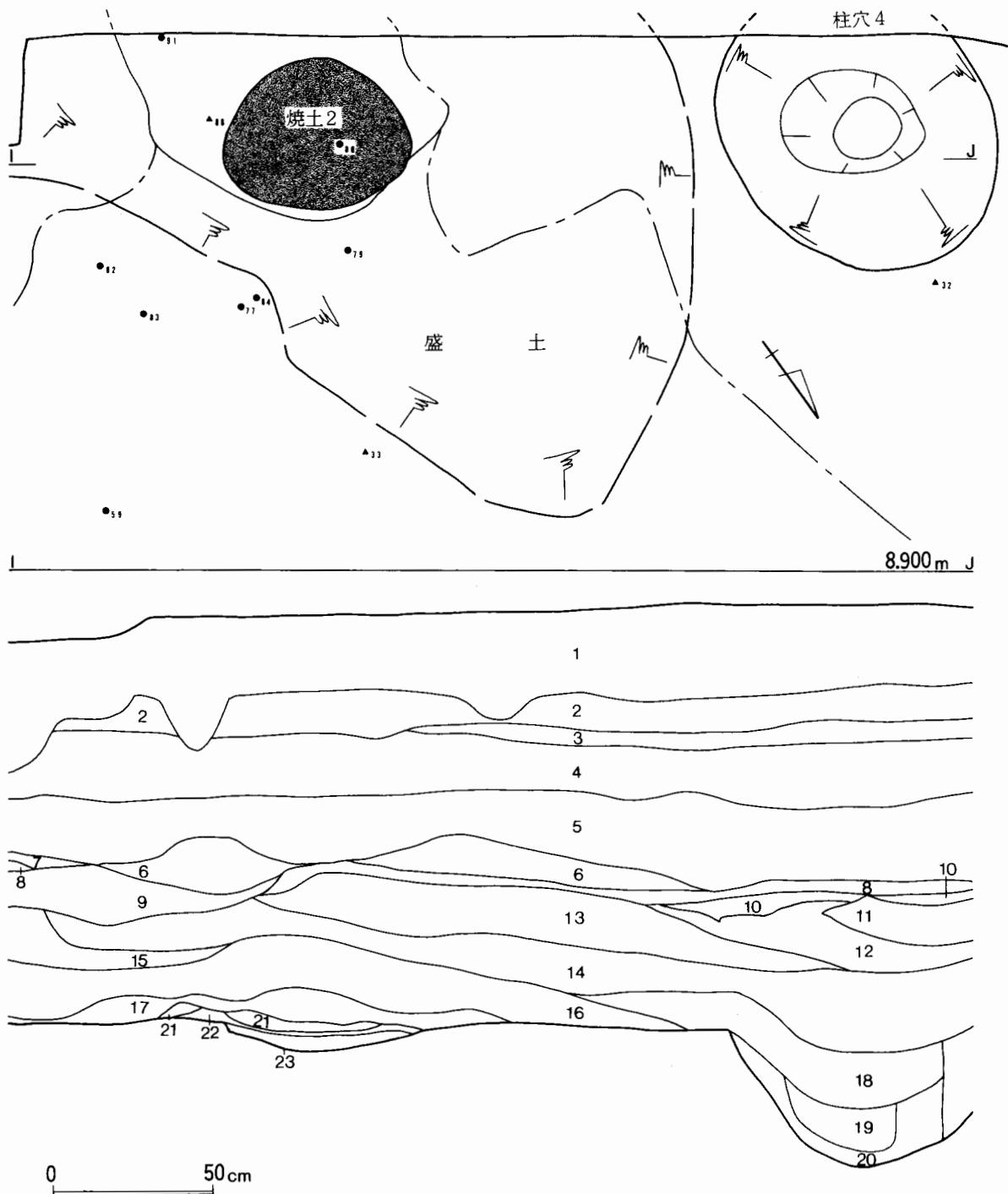
09-01, 10-01区の所在する。砂質の埋土が明瞭に確認され、住居跡の存在が明らかとなった。南側の一部は発掘区外であり完掘ができなかった。A-B, C-Dセクションで確認できる埋土は次のとおりである。

- 1 層：茶褐色シルト。鉄分の沈着が著しい。
- 1 a 層：1層より粘性が強い。
- 2 層：灰褐色粘質土。
- 3 層：茶褐色砂。粒子が粗い。
- 3 a 層：褐色シルト質土。やや粘性が強い。
- 4 層：茶褐色砂。3層より粒子がこまかい。
- 5 層：茶褐色砂。4層より粒子がこまかい。
- 5 a 層：褐色粘質土。
- 5 b 層：褐色粘質土。5 a 層より粘性が強い。
- 5 c 層：褐色粘質土。5 b 層より粘性が強い。
- 6 層：茶褐色砂。上部が灰褐色で漸移的に変化し下部は茶褐色となる。粒子がこまかい。
- 7 層：茶褐色砂。6層より茶色が濃い。
- 8 層：茶褐色砂。灰色と茶色の極く薄い層が幾層か交互に層となる。
- 8 a 層：8層より黒色をおびた砂質土。
- 9 層：灰褐色砂。
- 10 層：青色シルト。壁の崩落土で炭粒を含む。(I-Jセクション15層)
- 11 層：褐色砂。埋土中で最も粒子が粗い。(I-Jセクション7層)
- 12 層：黄色砂。11層より粒子がこまかい。(I-Jセクション8層)
- 13 層：オリーブ褐色砂と褐色砂の薄い互層。(I-Jセクション9層)
- 14 層：茶褐色砂。極めて薄い層の互層。

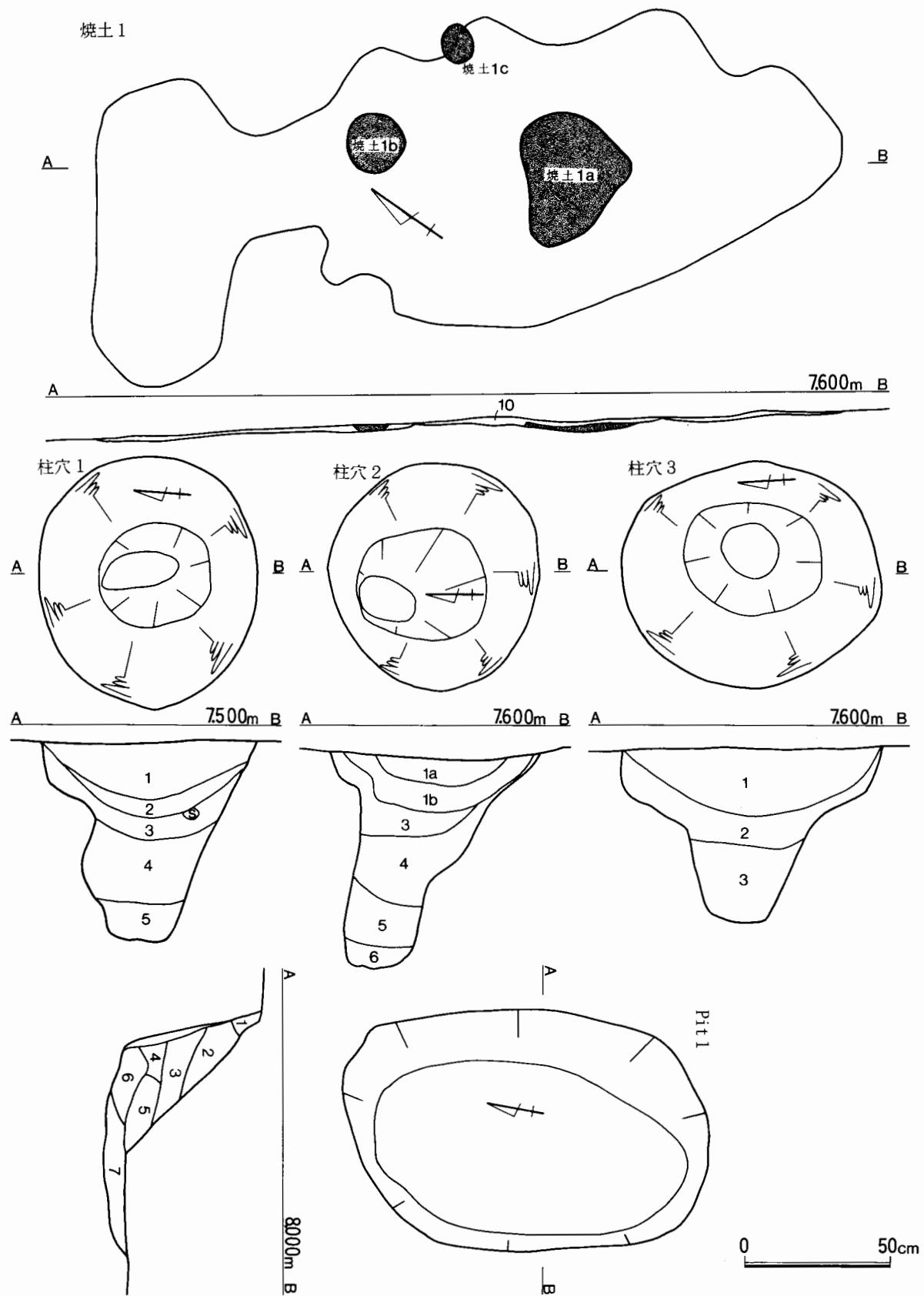
11層から14層はC-DセクションのDポイント側から急傾斜で流入している。本号が1層から10層



第17図 K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡実測図



第18図 K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡セクション・焼土・柱穴実測図



第19図 K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡焼土・柱穴・ピット1実測図

までが埋没し、Dポイント側がやや窪みとなっている段階で南側からの急激な土砂の流入により埋没した状況が考えられる。

発掘の途中で平面図I-Jのポイントで断面を観察したので、以下にその記録を述べておく。

1層：搅乱。

2層：オリーブ褐色シルト (2.5Y4/6)。

3層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/6)。粒子がこまかい。

4層：黄褐色シルト (2.5Y5/4)。

5層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/4)。

6層：オリーブ砂 (5Y5/4)。

7層：褐色砂 (10YR4/4)。粒子がこまかい。C-Dセクション11層。

8層：黄色砂 (7.5YR4/4)。黄色と灰色砂の薄い互層となる。C-Dセクション12層。

9層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3)。灰オリーブと褐色砂の薄い互層。C-Dセクション13層。

10層：黄褐色砂 (2.5Y5/3)。

11層：褐色砂 (10YR4/6)。やや粒子が粗い。

12層：10層と11層の互層。

13層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/6)。灰オリーブ砂との互層になる。粒子がこまかい。

14層：褐色砂 (10YR4/6)。灰オリーブ砂との薄い互層。粒子がこまかい。

15層：オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3)。壁の崩落土。

16層：オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4)。木炭粒、焼土粒を含む。

17層：暗オリーブ褐色シルト (2.5GY3/1)。

18層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/4)。オリーブ褐色砂中に赤褐色砂が筋状に入る。

19層：暗オリーブ褐色砂 (2.5GY3/1)。

20層：暗緑灰色シルト (10GY3/1)。粘性が強い。

21層：17層に焼土、炭化物が混在した層。

22層：骨粉まじりの炭層。

23層：焼土。

1から6層は、本号の埋没した後に堆積した層であり遺跡内の他の層と対比しなければならぬが、この地区は、他の地区に見られない南側から洪水などの自然の営力により流入した土砂が存在し、6層も他と若干異なるために対比が困難である。

16層は、柱穴4から柱を抜き取る際に掘り上げた土であろう。18から20層は、柱穴4の埋土である。21から23層は、本号のかまどと関連する層であろう。23層はかまどの火床とも考えられる。

床面からは、ピット6個と焼土2カ所が確認された。ピットのうち4個は明らかに柱穴であり、Pit1としたものは、その底面から糊状の骨粉が多量に確認でき、貯蔵に用いられたと思われる。Pit2は小形であり用途不明である。

各柱穴の計測値、埋土の土質等は次のとおりである。

柱穴1(第19図柱穴1)大きさは87×76cm、深さ68cmである。埋土は1層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/6)。2層：灰色粘質土 (7.5GY3/1)。3層：暗オリーブ灰色シルト (2.5GY3/1) 粘性が強い。4層：暗緑色灰色シルト (10GY3/1)。5層：暗緑色配灰色シルト (10GY3/1)。

柱穴2(第19図柱穴2)、大きさは75×70cm、深さ74cmである。埋土は1a層：黄褐色砂 (10YR5/8)とオリーブ褐色砂 (2.5Y6/4)の互層。1b層：オリーブ褐色砂 (2.5Y4/6)、3層：暗オリーブ

ブ灰色シルト (2.5GY3/1), 4層: 暗緑色灰色シルト (10GY3/1)。やや粘性が強い。5層: 暗緑色灰色シルト (10GY3/1)。6層: 緑黒色砂 (10GY2/1)。やや粘性が強い。

柱穴3 (第19図柱穴3)。大きさは90×78cm, 深さ60cmである。埋土は1層: オリーブ褐色砂 (2.5Y4/6)。2層: 灰色粘質土 (7.5GY3/1)。3層: 暗オリーブ灰色シルト (2.5GY3/1)。

柱穴4 (第18図柱穴4) は大きさは97×80cm, 深さ44cmである。埋土はI-Jセクションを参照。

本住居跡の柱穴の特徴は、床面を検出した段階で柱穴の埋土の砂が明瞭に確認されたことである。柱穴の発掘後の断面形は、上方の半分程から急激に広くなり漏斗状を呈することである。この点とI-Jセクション16層のあり方などから見て、本号は住居使用後に主柱を抜き取り移動したのではないかと推察される。柱穴1, 2から主柱の根固めに使用したと思われる削り痕のある木片が発見されながら柱根が発見されない点もこの推察を裏づけることになる。

各柱穴は、いずれもが外側に傾斜し掘られているため柱を立てた場合、住居の中心に向かって傾斜すると思われる。

Pit 1 (第19図 Pit 1) は、大きさは125×85cmである。床面からの深さは7cmである。

埋土は、1層: 褐色シルト (10YR4/6)。鉄分が多い。2層: 黄褐色シルト (10YR5/6)。1層より鉄分が少ない。3層: 褐色シルト (7.5YR4/6) 1, 2層より粘性が強い。4層: オリーブ褐色粘土 (2.5YR4/3)。6層: 褐色砂 (10YR4/4)。7層: 褐色砂 (10YR4/4)。炭粒、骨片を多量に含む。

本ピットの7層からは、多量の糊状の骨粉が発見された。貯蔵用に構築されたピットであろうか。

床面の中央部からは、焼土および焼土粒を含む炭層の広がりが発見された (第19図焼土)。焼土1aは、よく焼けており炉として使用されたと思われる。焼土1b, 1cは一度動かされた状態であり、焼土1aからかき広げられたものであろう。

床面の南側に焼土2 (第17図) がある。I-Jセクション21から23層で見るよう周囲には骨粉、炭化物まじりの炭、灰層が広く見られる。位置的に本号のかまどとも考えられる。

焼土2の上面には、炭化物などを含む盛土が見られた。一部発掘区外であるため、この由来を確認できなかったが柱穴4の柱を抜き取る時の盛り上げ土かとも考えている。以上のピット、焼土から発掘される骨片は原形を保つものが少なく種数の特定が不可能であった。遺物はすべて床面から出土している。焼土中から魚類の骨 (第11表)、アワ・キビ・ソバなどの炭化種子 (第14表) が発見された。

出土遺物 (第21図、第4表、図版21、付図2)

第4号竪穴住居跡からは甕、小甕、壺が出土しており器種の上ではどの竪穴住居跡よりもバラエティに富んでいる。遺物は床面全体に広がっており、東側壁方向から比較的穢の出土が多くみられた。接合状況は竪穴内で接合する遺物が多いが、10-02区などの発掘区出土遺物とも接合関係にある遺物がみられる。またこの遺物はF1の下層から出土しておりF1とは時期的に前後関係にある。

第21図1~13は甕である。1と2は未接合であるが同一個体である。頸部が湾曲し口縁部が外反するタイプであり、以下胴頂部が強く張り出し底部へほぼ直線的に窄まる器形である。また底部には張り出し、もしくは括れが認められ一方口縁部断面形は先細りの半円形である。外面調整は口縁部をヨコナデし、以下全面縦方向のハケメである。内面は外面同様、口縁部をヨコナデするが頸部にはヘラミガキ胴部はハケメでありいずれも横方向である。内面には丹念に黒色処理が施されているが、さらに外面底部付近にも黒色化した部分が認められている。ただしこれについては使用によって残された煤と理解できるものである。また胴部以下には特に顯著であるが、輪積痕 (幅約1.5cm) が観察された。文様は先端の丸い工具による多状横走沈線が、頸部の湾曲にのみ施文される。全体に比して文様帶は

狭い。

3, 4, 5は同一固体と思われる小型の甕であり3, 4は口縁部片5は頸部片である。また6の上半部である可能性もある。口縁部片は内外面ともヨコナデであり、頸部片は外面がヨコナデ内面は横方向のヘラミガキである。また内部は灰色状態に近い黒色処理が施される。口縁部は断面角形であり、その角に工具の角を斜めに押しつけた斜めの刺突列が施文される。さらに二条の縦沈線を引き下ろした両側に二段の山形文を施文しており、頸部との境界には一条の横沈線が巡り、その上部に縦の刺突列が横環する。頸部には8mm程の間隔をあけて施文された横走沈線が現状で三条確認されており、その間に縦の刺突列が一段ずつ横環され最後に二条の縦沈線を引き下ろしている。

6は上半部を欠損した小型甕である。底部に指でつまみ出した突起が4カ所みられ、ほぼ直線的にきつい角度で立ち上がるが胴頂部付近で垂直になる。突起は均等に底部の4カ所から十字状につまみ出されているのではなく意識的につまみ出さない部分を設けており、底面から観察すれば丁度五角形の一角を失った状態になっている。そのことから図の状態を正面と認識した。ちなみに突起の周辺には指圧痕と思われる窪みが数カ所確認できる。内外面の観察により幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形であることが確認されているが、全体の器形は明らかではない。調整は内外面とも縦方向のミガキであるが、つまみ出した部分は指先でのナデ整形だけで処理されている。また内面には灰色状態に近い黒色処理が施されている。文様は胴頂部に横沈線を一条巡らした後、正面と推定される位置に二条の縦沈線を引き下ろし、その両側に二段の山形文が一列ずつ施文される。また横沈線の下部には斜めの刺突列がみられ破片がないため明らかではないが横環するものと思われる。

7, 8, 9は同一個体と思われる口縁部片である。頸部が湾曲し口縁部が外反するタイプで1と似るが口縁部断面形は角形である。内外面ともヨコナデであり内面には丹念な黒色処理が施される。文様は幅広の浅い多重横走沈線が頸部の湾曲部にのみ施文されており、沈線内には筋状の隆起が残っている。

10は口縁部片である。内外面ともヨコナデ調整であり内面は丹念に黒色処理を施している。口縁部は角形と推測されるが外面、内面からの刺突によりM形に変形している。頸部には先端が細く丸い工具による横走沈線が展開する。

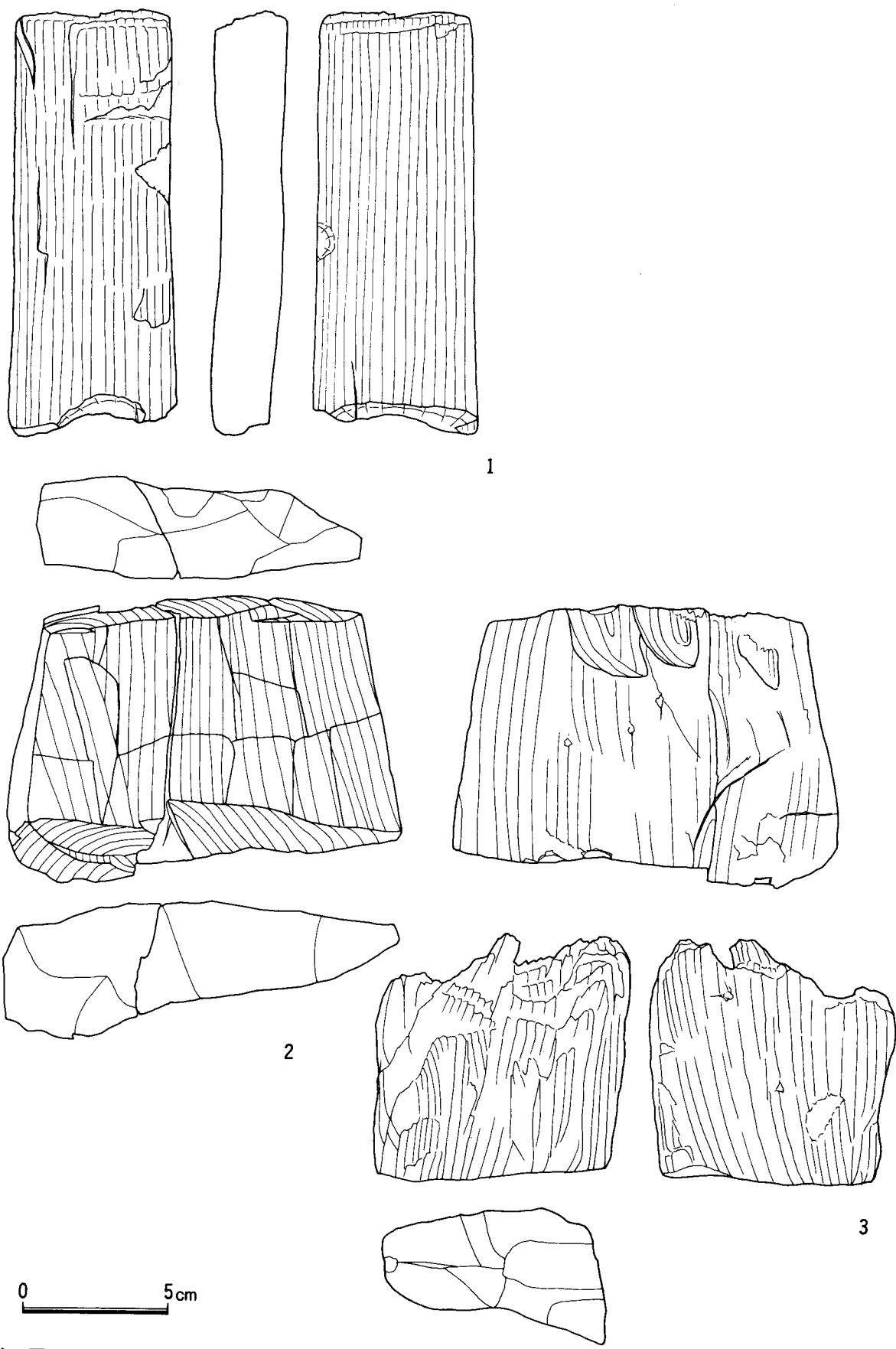
11は胴部片、12, 13は底部片である。胴部片は外面ヨコナデ内面は横方向のヘラミガキであり、丹念な黒色処理が施される。底部片は磨滅が著しく判断は難しいが、外面は縦方向のハケメであり内面はヨコナデ調整と思われる。また全例とも内面に丹念な黒色処理が施されている。

14~19は壊である。14は底部が欠損し体部も全体の5分の2ほどの復元であるが轆轤水挽きにより成形された壊である。内面は轆轤痕の凹凸をミガキ消しており、さらに丹念な黒色処理が施されている。また外面は被熱によって煤けている。

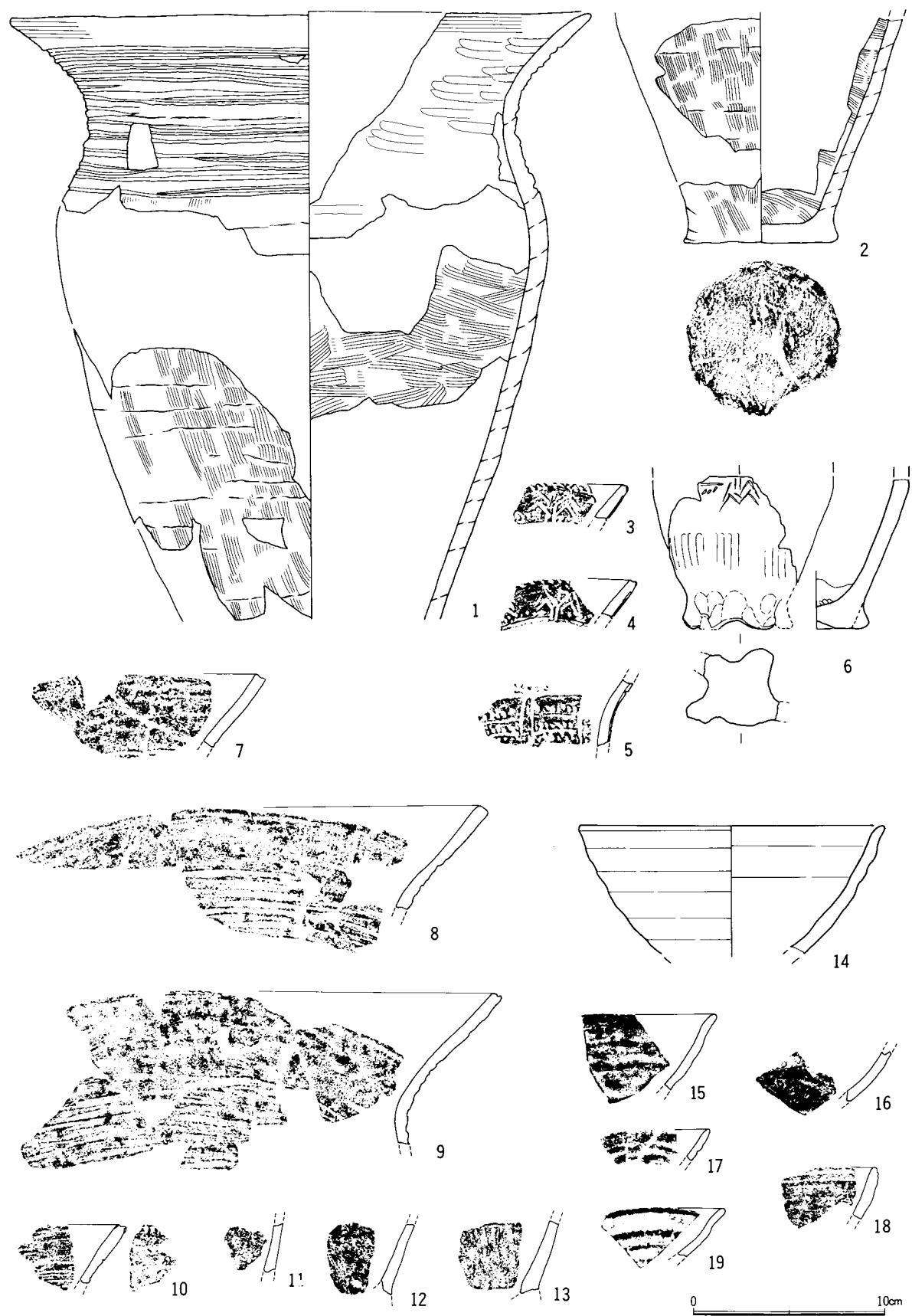
15, 16は同一個体と思われ15は口縁片16は体部片である。轆轤水挽きによる成形で、その後内面をみがき丹念な黒色処理が施される。また風化が著しく全体が灰黄色に変色している。調整や割れ面観察、胎土の砂粒の含有状態などから前述の14と同一個体と思われる。

17, 18は口縁部片である。うち17は表面が磨滅しているが内外面ともヨコナデ調整と推定され、先端の丸い工具による横走沈線が二条引きこまれる。18は外面が横方向のヘラナデ整形であり内面はミガキ調整である。また内面には丹念な黒色処理が施されている。しかし外面のナデ整形によって生じた口縁部のハケメ状の細い筋を消し去っておらず外見上は粗い整形である。

19は色調が浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4）の赤焼き土器の口縁部片である。轆轤水挽きにより成形されるが、指頭による起伏は残されていない。器厚は2.0mm強であり、また破片の径から比較的小型



第20図 K 113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴出土木製品実測図



第21図 K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡出土遺物

の坏と思われる。器形は口縁部手前で「く」の字状に変化しその後大きく外反する。 (秋山洋司)

木製品（削り痕のある木片）（第20図、図版20）

第20図1、2は、柱穴1から出土した。1は長さ14.5cm、幅5.4cm、厚さ2.3cmであり、長辺の一端に削り痕が見られる。2は、長さ9.3cm、幅13.4cm、最大厚4.2cmで、片面および両端に加工痕が見られる。

第20図3は、柱穴2から出土した。長さ9cm、幅8cm、最大厚約5cmであり、1端と片側に加工痕が見られる。

1～3の加工痕は、いづれも金属器によると思われ非常にシャープである。1はニレ属、3、4はハンノキ属である。詳細は9章を参照されたい。

第1表 K113遺跡北35条地点 堅穴住居跡一覧表

挿図番号	遺構番号	発掘区名	検出層位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	主軸	かまどの位置	柱穴数	遺物	備考
7, 8, 9	H P-1	05-01 06-01 06-02	II	5.85	5.49	(0.40)	方形	N 55° E	北東	4	柱根4 キビ1粒	焼土
10, 11, 12 13	H P-2	07-02 08-02	IV	(7.52)	(5.93)	(0.28)	(方形)	N 237° E	南西	5	擦文式土器 須恵器破片 黒曜石片 ウゲイ、ニシン サケ	焼土2ヶ所
14, 15, 16	H P-3	11-03	IV	(5.35)	(4.60)	(0.13)		N 254° E	南西		擦文式土器 ウゲイ、コイ、サケ	焼土4ヶ所
17, 18, 19 20, 21	H P-4	09-01 10-01	VI?	8.26	7.33	0.57	方形	N 182° E	南?	4	擦文式土器 須恵器杯 柱穴中から加工痕ある木片3点 サケ アワ2粒、キビ5粒 ソバ1粒、アサ2粒	焼土4ヶ所

第2表 K113遺跡北35条地点第2号堅穴住居跡出土土器属性表

番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	規格(cm)			容 量 (L)	器面調整		文 樣	
					器 高 (長)	口 径 (幅)	底 径 (厚)		外 面	内 面	口 緣 部	胴部文様帶
12-1	P012		長頸壺	口縁部～体部	(25.0)	(11.0)	—	—	ロクロ水挽 横ケズリ 斜ケズリ	ロクロ水挽		
12-2	P014 A		壺	口縁部～胴部	(30.2)	28.2	—	—	縦ハケメ 沈線	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線	
12-3	P017 A		壺	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ 縦ミガキ	横ハケメ 縦ミガキ 黒色処理		
12-4	P014 A	T 7	壺	口縁部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ナデ	横走沈線3条	
12-5	P015 B	T 9	壺	口縁部～胴部文様帶	—	—	—	—	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条	
12-6	P015 C	T 10	壺	胴部文様帶	—	—	—	—	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理		
12-7	P015 A	T 8	壺	口縁部～胴部文様帶	—	—	—	—	斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線3条	
13-1	P013 A	T 1	壺	口縁部～胴部	—	—	—	—	横ナデ 縦ハケメ 横ハケメ 縦ハケメ	横ハケメ 横ハケメ～縦ミガキ 黒色処理	横走沈線 —矢羽根状刺突	横走沈線 —鋸歯文 —間に山形文
13-2	P013 B	T 2	壺	口縁部～胴部	—	—	—	—	横ナデ 縦ハケメ 横ハケメ 縦ハケメ	横ハケメ横ミガキ 横ハケメ～縦ミガキ 黒色処理	横走沈線 —矢羽根状刺突	横走沈線 —鋸歯文 —間に山形文
13-3	P013 C	T 3	壺	胴部文様帶～胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ハケメ —横ミガキ? 黒色処理		横走沈線 —鋸歯文 —間に山形文
13-4	P013 D	T 4	壺	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		
13-5	P016 A	T 11	壺	胴部文様帶～胴部	—	—	—	—	縦ハケメ 横ハケメ	横ミガキ		横走沈線 —縦沈線3条 —間に山形文
13-6		T 24	壺	口縁部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線 —矢羽根状刺突	
13-7		T 21	小壺	口縁部～胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	横走沈線 —矢羽根状刺突	横走沈線 —縦沈線3条
13-8		T 19	壺	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ナデ～横ミガキ 横ナデ～縦ミガキ 黒色処理		
13-9		T 20	壺	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		
13-10		T 25	壺	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ナデ～縦ミガキ 黒色処理		
13-11		T 23	壺	胴部	—	—	—	—	横ミガキ	横ミガキ 黒色処理		
13-12	P014 B	T 6	壺	胴部～底部	—	—	(8.6)	—	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		
13-13	P021	T 12	壺	底部	—	—	(8.5)	—	縦ハケメ	縦ミガキ 黒色処理		
13-14		T 22	壺	底部	—	—	(7.8)	—	縦ミガキ	縦ミガキ 黒色処理		

胴下部 形状	底部 色調		最大 接合 距離(m)	方向	分類	区名	層位	遺物番号	図版 番号	備考
	外面	内面								
	10B G 3/1 暗青色	10B G 5/1 青灰	16.1	E-W	N I	09-03	攪乱	1	12-1	須恵器 5P2/1紫黒
						H P-2		59		
							床	6		
	10Y R 7/3 にぶい黄橙	10Y R 1.7/1 黒	8.6	E-W	K VI	H P-2	床	3, 5, 7, 8 9, 13, 14, 15 16, 20, 46	12-2	
								57, 60, 61		
						08-03	攪乱	3		
							カマドF	1		
	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 2/1 黒	21.1	E-W		H P-2	床	35	12-3	
							攪乱	51, 63, 67		
						08-04	攪乱	3		
	10Y R 3/1 黒褐	10Y R 1.7/1	0.9	NW-S E	K VI	H P-2	床	8, 9, 16	12-4	
	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 4/2 灰黄褐			K VI	H P-2	攪乱	69	12-5	被熱あり 剥離あり 補修孔あり
	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 4]2 灰黄褐			K VI	H P-2	カマドG	2	12-6	被熱あり 剥離あり
	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 4/2 灰黄褐			K VI	H P-2	床	23	12-7	被熱あり 剥離あり 補修孔あり
								66		
							床	27		
							カマドF	1		
	10Y R 8/3 浅黄橙	10Y R 8/4 浅黄橙	2.0	NW-S E	K VI	H P-2	カマドG	2	13-1	被熱あり 剥離あり 磨滅
							H 9試掘			
	10Y R 8/3 浅黄橙	10Y R 8/4 浅黄橙	0.9	NW-S E	K VI	H P-2	カマドF	1	13-2	被熱あり 剥離あり 磨滅
							H 9試掘			
	10Y R 8/3 浅黄橙	10Y R 8/4 浅黄橙	1.7	NW-S E	K VI	H P-2	床	18, 25, 26	13-3	被熱あり 剥離あり 磨滅
								3		
	10Y R 8/3 浅黄橙	10Y R 8/4 浅黄橙			K VI	H P-2	カマドG	2	13-4	被熱あり 剥離あり 磨滅
							H 9試掘			
山形文	7.5Y R 6/8 橙	7.5Y R 5/1 褐灰			K V	H P-2	カマドF	1	13-5	
	7.5Y R 6/4 にぶい橙	7.5Y R 2/1 黒			K V	H P-2	床	19	13-6	
	10Y R 7/3 にぶい黄橙	10Y R 4.2 灰黄褐			K V	H P-2		64	13-7	
	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 5/2 灰黄褐				H P-2	攪乱	55, 56	13-8	磨滅
	7.5Y R 7/4 にぶい橙	7.5Y R 4/1 褐灰				H P-2		65	13-9	
	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 5/2 灰黄褐				H P-2	攪乱	52, 68	13-10	磨滅
	7.5Y R 7/3 にぶい橙	7.5Y R 6/4 にぶい橙				H P-2	床	45	13-11	
箇痕	7.5Y R 6/6 明黄褐	10Y R 1.7/1 黒	0.4	NW-S E	K VI	H P-2	床	3, 7	13-12	
								57		
箇痕	7.5Y R 6/6 橙	7.5Y R 2/1 黒	2.2	E-W		H P-2	床	4	13-13	炭化物付着
							攪乱	53, 54		
擦痕	10Y R 7/4 にぶい黄橙	10Y R 4/1 褐灰				H P-2	床	24	13-14	被熱あり 剥離あり

第3表 K113遺跡北35条地点第3号堅穴住居跡出土土器属性表

番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	規格(cm)			容 量 (L)	器面調整		文 標	
					器 高 (長)	口 径 (幅)	底 径 (厚)		外 面	内 面	口 緑 部	胴部文様帶
16-1	P001		小甕	口緑部～底部	10.9	10.7	5.9	0.380	横ナデ 縦ハケメ	横ハケメ 黒色処理		
16-2	P003		壺	口緑部～底部	7.1	12.8	7.8	0.415	横ハケメ 横ミガキ	横ミガキ 黒色処理		
16-3	P002		壺	口緑部～底部	6.0	14.0	6.0	0.490	ロクロ水挽	ロクロ水挽 一ミガキ 黒色処理		
16-4		T26	甕	胴部	—	—	—	—	横ハケメ 斜ハケメ	横ミガキ 黒色処理		

第4表 K113遺跡北35条地点第4号堅穴住居跡出土土器属性表

番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	規 格 (cm)			容 量 (L)	器面調整		文 標	
					器 高 (長)	口 径 (幅)	底 径 (厚)		外 面	内 面	口 緑 部	胴部文様帶
21-1	P004 A		甕	口緑部～胴部	35.0	30.0	—	—	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ 横ミガキ 横ハケメ 黒色処理		横走沈線
21-2	P004 B		甕	胴部～底部	—	—	8.0	—	縦ハケメ	横ハケメ 黒色処理		
21-3		T36	小甕	口緑部	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ	横沈線 一口唇部・頸部境界に刺突 一縦沈線2条両側に山形文	
21-4		T37	小甕	口緑部	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ	横沈線 一口唇部・頸部境界に刺突 一縦沈線2条両側に山形文	
21-5		T16	小甕	胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ		多条横走沈線 一間に刺突横環 一縦沈線2条
21-6	P005		小甕	胴下指～底部	(8.0)	(9.3)	(5.5)	0.220	縦ミガキ	縦ミガキ 黒色処理		
21-7	P018 C	T15	甕	口緑部 ～胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		幅広浅めの 多重横走沈線
21-8	P018 B	T14	甕	口緑部 ～胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		幅広浅めの 多重横走沈線
21-9	P018 A	T13	甕	口緑部 ～胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		幅広浅めの 多重横走沈線
21-10		T30	甕	口緑部 ～胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理	内外から刺突	多条横走沈線
21-11		T34	甕	胴部	—	—	—	—	横ナデ?	横ミガキ 黒色処理		
21-12		T31	甕	底部	—	—	—	—	縦ハケメ?	横ナデ 黒色処理		
21-13		T32	甕	底部	—	—	—	—	縦ハケメ?	横ナデ 黒色処理		
21-14	P006		壺	口緑部～体部	5.4	16.0	10.2	—	ロクロ水挽	ロクロ水挽 一ミガキ 黒色処理		
21-15		T27	壺	口緑部～体部	—	—	—	—	ロクロ水挽	ロクロ水挽 一ミガキ 黒色処理		
21-16		T29	壺	体部	—	—	—	—	ロクロ水挽	ロクロ水挽 一ミガキ 黒色処理		
21-17		T28	壺	口緑部	—	—	—	—	横ナデ?	横ナデ?	横走沈線	
21-18		T33	壺	口緑部	—	—	—	—	横ナデ	ミガキ 黒色処理		ヘラナデ痕
21-19		T35	壺	口緑部～体部	—	—	—	—	ロクロ水挽 一横ナデ	ロクロ水挽 黒色処理		

胴下部 形状	底部		色調		最大接合距離(m)	方向	分類	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
	外面	内面										
	筆痕後整形	10Y R 6/6 明褐	10Y R 3/1 黒褐	29.7	NW-S E	K I	H P-3 08-03	カマド	8 2		15 B-1	
	筆痕	10Y R 6/4 にぶい黄橙	10Y R 4/1 褐灰			T II	H P-3	床	2		15 B-2	
	回転糸切	10Y R 8/4 浅黄橙	10Y R 1.7/1 黒	1.0	NW-S E	T III	H P-3	カマド	8,9		15 B-4	
		7.5Y R 6/8 橙	7.5Y R 5/1 褐灰				H P-3	床	1		15 B-3	

胴下部 形状	底部		色調		最大接合距離(m)	方向	分類	区名	層位	遺物番号	図版番号	備考
	外面	内面										
		10Y R 6/4 にぶい黄橙	10Y R 2/1 黒			K II	H P-4 10-02	床 V	45,47,50,54 12		21-1	
	筆痕	10Y R 3/1 黒褐	10Y R 4/1 褐灰			K II	10-02	IV V	1,8,9 12		21-2	
		10Y R 6/4 にぶい黄橙	10Y R 5/2 灰黄褐			K III	H P-4 焼土2				21-7	
		10Y R 6/4 にぶい黄橙	10Y R 5/2 灰黄褐			K III	H P-4	床	78		21-6	
		10Y R 6/3 にぶい黄橙	10Y R 7/2 にぶい黄橙			K III	H P-4 H P-4 焼土2	床	43		21-8	
沈線・斜刺沈線 -継沈線2条 -山形文2段	4ヶ所をつ まみ出す	10Y R 6/4 にぶい黄橙	10Y R 4/1 褐灰			K III	H P-4	床	38,52,53		21-3	指圧痕
		10Y R 7/2 にぶい黄橙	10Y R 1.7/1			K II	H P-4	床	40,53,64,67		21-4	
		10Y R 7/2 にぶい黄橙	10Y R 1.7/1 黒			K II	H P-4	床	57,58,64,72, 80,81,84,90		21-9	
		10Y R 7/2 にぶい黄橙	10Y R 1.7/1 黒			K II	H P-4	床	57,74,75,79		21-10	
		10Y R 7/2 にぶい黄橙	10Y R 1.7/1 黒			K II	H P-4	床	44		21-11	
		7.5Y R 5/2 灰褐	7.5Y R 1.7/1 黒				H P-4 焼土2		91		21-12	磨滅
		10Y R 6/2 灰黄褐	10Y R 5/1 褐灰				H P-4	床	48		21-13	磨滅
		10Y R 6/1 褐灰	10Y R 3/2 黒褐				H P-4	床	49		21-14	磨滅
		7.5Y R 4/2 灰褐	7.5Y R 2/1 黒			T III	H P-4	床	38,42,45,46, 60,66,82,85, 87,90		21-5	
		2.5Y 7]2 灰黄	2.5Y 2/1 黒			T III	H P-4	床	61		21-17	
		2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 2/1 黒			T III	H P-4	床	63		21-18	
		10Y R 8/3 浅黄橙	10Y R 8/3 浅黄橙				H P-4	床			21-15	磨滅
		10Y R 7/3 にぶい黄橙	10Y R 1.7/1 黒			T II	H P-4 pit1		92		21-16	
		10Y R 8/4 浅黄橙	10Y R 8/4 浅黄橙			T IVa	H P-4	床	37		21-19	赤焼

第5表 K113北35条地点堅穴住居跡出土石器・礫計測値一覧表

出土区	層位	遺物番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
HP-1	IV	1	83.0	45.0	27.7	92.0	一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着 一部煤付着
	IV	2	68.0	29.0	23.7	63.7	
	IV	3	(73.0)	48.0	24.2	(163.6)	
	IV	4	57.0	34.0	33.5	71.8	
	IV	5	60.0	42.0	24.7	68.3	
	IV	6	71.0	45.0	30.8	136.9	
	IV	7	72.0	39.0	30.7	100.8	
	IV	8	77.0	43.0	33.7	146.2	
	床面	9	67.0	33.0	22.5	66.6	
	床面	10	(261.0)	120.0	48.2	(2200.0)	
	IV	11	77.0	34.0	20.8	60.4	
HP-2	床面	21	87.0	53.0	32.4	182.0	一部煤付着
	床面	22	68.0	47.0	22.4	88.8	一部煤付着
	床面	28	80.0	48.0	28.4	181.2	一部煤付着
	床面	29	64.0	30.0	28.7	82.9	一部煤付着
	床面	30	24.0	20.0	7.0	3.0	31, 32接合 第13図
	床面	31-1	26.0	11.0	7.8	2.5	30, 32接合 第13図
	床面	31-2	25.0	10.0	2.2	0.4	30, 32接合 第13図
	床面	31-3	15.0	6.0	1.4	0.1	30, 32接合 第13図
	床面	32	22.0	21.0	7.7	3.9	30, 32接合 第13図
	床面	33	(165.0)	(115.0)	(37.4)	(850.0)	使用痕・一部欠損
	床面	34	95.0	58.0	44.6	345.0	一部煤付着
	床面	36	74.0	34.0	23.0	97.8	一部煤付着
	床面	37	69.0	33.0	21.1	56.5	一部煤付着
	床面	38	63.0	43.0	20.4	81.2	
	床面	39	66.0	34.0	22.0	79.5	
	床面	40	63.0	45.0	21.8	94.5	一部煤付着
	床面	41	65.0	35.0	19.6	69.1	
	床面	42	(51.0)	50.0	28.5	(100.0)	一部煤付着
	床面	43	66.0	41.0	25.4	94.5	一部煤付着
	床面	44	68.0	42.0	26.4	110.6	一部煤付着
	床面	47	80.0	45.0	36.0	167.5	一部煤付着
	かまど	48	92.0	47.0	27.1	149.1	一部煤付着
	かまど	49	112.0	52.0	32.0	(235.0)	一部欠損
	50						不明
	攪乱	70	64.0	55.0	20.8	103.8	一部煤付着
HP-3	床面	3	65.0	46.0	19.7	75.8	一部欠損 扁平
	床面	4	77.0	41.0	32.8	(128.8)	
	床面	5	78.0	41.0	29.0	133.0	
	床面	6	59.0	46.0	35.0	130.5	
	床面	7	74.0	51.0	17.2	93.1	
HP-4	柱穴1	1	80.0	48.0	33.1	150.6	一部のみ残存 大部分欠損
	床面	4	86.0	48.0	34.4	193.8	
	床面	5	77.0	52.0	33.8	173.5	
	床面	6	102.0	55.0	43.0	260.0	
	床面	7	81.0	42.0	27.0	123.1	
	床面	8	82.0	60.0	34.1	217.3	
	床面	9	88.0	48.0	43.4	280.0	
	床面	10	91.0	50.0	44.8	224.6	
	床面	11	93.0	47.0	38.0	230.8	
	床面	12	86.0	52.0	29.5	191.1	
	床面	13	83.0	53.0	26.6	162.4	
	床面	14	84.0	46.0	35.3	170.6	
	床面	15	93.0	40.0	34.0	188.4	
	床面	16	(41.0)	(36.0)	(26.5)	(23.0)	
	床面	17	101.0	55.0	29.1	161.8	
	床面	18	(49.0)	(45.0)	(27.7)	(68.5)	
	床面	19	93.0	53.0	40.0	270.0	
	床面	21	94.0	46.0	35.0	210.6	
	床面	22	80.0	53.0	30.8	138.6	
	床面	23	76.0	48.0	32.9	167.9	
	床面	24	81.0	67.0	34.6	208.9	
	床面	25	78.0	43.0	42.6	165.8	
	床面	26	95.0	45.0	41.4	198.3	
	床面	27	70.0	56.0	39.5	187.5	
	床面	28	82.0	48.0	33.7	126.1	
	床面	29	92.0	52.0	33.5	202.5	

出土区	層位	遺物番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
H P - 4	床面	30	(72.0)	49.0	36.8	(140.6)	
H P - 4	床面	31	83.0	49.0	42.4	250.0	
H P - 4	床面	32	74.0	52.0	30.0	156.0	
H P - 4	床面	33	77.0	51.0	30.8	109.0	
H P - 4	床面	34	85.0	41.0	40.8	206.3	
H P - 4	床面	35-1	89.0	55.0	33.0	205.9	
H P - 4	床面	35-2	(41.0)	(18.0)	(11.6)	(8.0)	一部のみ残存
H P - 4	床面	36	81.0	48.0	19.0	100.5	
H P - 4	床面	62	(21.0)	(20.0)	(10.6)	(5.1)	小残片
H P - 4	床面	68	82.0	33.0	32.0	108.8	
H P - 4	床面	71	91.0	46.0	41.9	270.0	
H P - 4	床面	88	87.0	48.0	42.6	305.0	
H P - 4	床面	89	(26.0)	(18.0)	(16.2)	(6.4)	*小石残片
H P - 4	床面	93	91.0	43.0	26.6	134.7	
H P - 4	床面	94	86.0	55.0	41.7	194.6	
H P - 4	床面	95	86.0	53.0	29.0	193.0	
H P - 4	壁中	96-1	91.0	48.0	30.5	162.2	
H P - 4	壁中	96-2	(60.0)	42.0	28.8	(90.5)	半分欠損

*地山中に存在する自然礫と思われるもの

第6表 K113遺跡北35条地点 焼土・炭化物一覧表

遺構番号	挿番	図号	発掘区名	検出層位	長軸×短軸(cm)	焼土・炭層厚(cm)	平面形	遺物	備考
F - 1	22	10-02	IV	95×(58)	3.0	不整			一部攪乱
F - 2	22	09-01	IV	865×185	3.0	不整	キビ6粒, タデ38粒 ニワトコ15粒, クルミ0.48g		一部攪乱
F - 3	22	10-03 11-03	IV	776×227	2.0	不整	タデ3粒, ニワトコ7粒 クルミ0.24g		一部攪乱
F - 5	23	11-03	IV	303×124	1.0	不整			
F - 6	23	11-03	IV	128×80	2.0	不整			
F - 7	23	08-02	IV	77×62	5.0	不整円	タデ3粒		
F - 9	23	11-04	IV	153×152	1.0	不整円			
F - 10	23	10-03 10-04	IV	500×138	2.0	不整			
F - 11	23	11-04	IV	102×(48)	5.0	不整	タデ1粒		一部攪乱
F - 13	24	11-04	IV	252×(96)	1.0	楕円?	タデ1粒		一部攪乱
F - 14	24	10-04	IV	197×104	1.0	不整			一部攪乱
F - 15	24	10-04	IV	229×91	1.0	不整	タデ1粒		
F - 17	24	09-05	IV	195×(86)	2.0	不整	ニワトコ1粒		一部攪乱
F - 18	付図2	08-04 09-03 09-04	IV IV IV	1252×385	上層 6.0 下層 5.0	不整	キビ1粒, ニワトコ3粒 ミズキ1粒, ブドウ1肩 クルミ1.22g		焼土が2層
F - 20	23	08-01	IV	62×53	3.0	不整			
F - 21	25	07-03	IV	211×107	3.0	不整			炭化材
F - 22	25	07-03	IV	117×59	1.0	不整			
F - 23	25	08-04 08-05	IV	802×162	2.0	不整			
C - 1	26	10-01 10-02	IV	265×260	1.0	不整			
C - 2	26	10-06	IV	181×174	1.0	不整			一部攪乱
W - 1	付図2	10-01 10-02	IV	1007×55	1.0	棒状			自然木の炭化したもの

第2節 焼土・炭化物・炭化材（付図2, 第22～26図, 図版22）

本遺跡からは、18カ所の焼土と2カ所の炭化物の広がり、自然木が炭化したと思われる炭化材1カ所が発見された。いずれも遺跡の標準層序のⅣ層あるいは、その時期に相当するレベルから発見されている。

18カ所の焼土のうちF7がやや他の焼土と異なる状態を呈する。F7は、焼土そのものが厚く肉眼で観察できる量のサケ属の骨片が含まれていた。第2号竪穴住居跡のかまど煙道付近に存在することから、2号住居跡使用時に形成されたと考えてよいであろう。かまど煙道近くに骨片等を含む焼土の存在はK39遺跡北11条地点、本地点と隣接のK113遺跡北34条地点などでも発見され、この当時かなり一般な状態をしめしているものと思われる。

F5, F6, F13は第3号住居跡の北西から北、F2, C1は第4号住居跡の北側で発見されている。これらの焼土、炭化物と竪穴住居跡の関連を明らかにする資料は何ら発見されていない。F9, F11, F14, F10, F18, F23はL字状を呈する状態で存在し、F15, F17はその内側に存在する。

これらは、一つの焼土群として捉えることができるかもしれない。F21, F22は焼土と炭化材が見られ、しかも隣接することから同一と考えられようか。

F2, F3, F10, F23はいずれも細長い焼土で、F18は全長12m以上となる。F23は焼土のみが確認されたが他のものは焼土の周囲に炭化物の広がりが確認できた。F18は自然層をはさむ上2層の焼土が見られた。

F21, F22は炭化材と焼土がみられる例であり、立木の自然発火等による自然形成の可能性も考えられる。

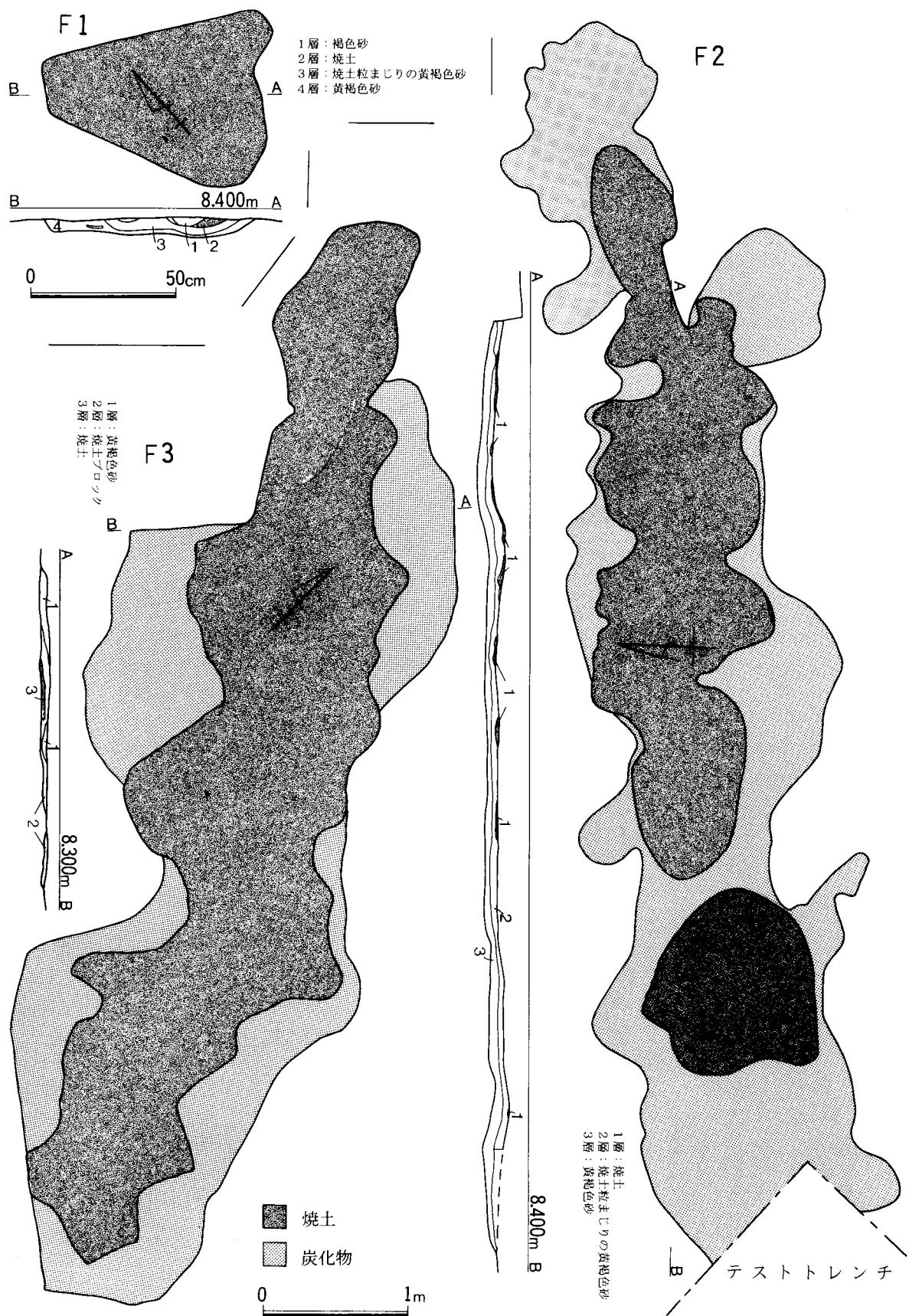
W1は、長さ10m以上であり自然木の炭化したものと考えられる。

これらの焼土等の性格を明らかに確定しうる資料は、何ら発見されていない。炭化種子の分析は、第14表に示すとくF2でキビ6粒、F18でキビ属1粒が検出されたほかタデ属、ニワトコ属とともにF2, F3, F18ではミズキ属、ブドウ属、クルミ属も発見されている。

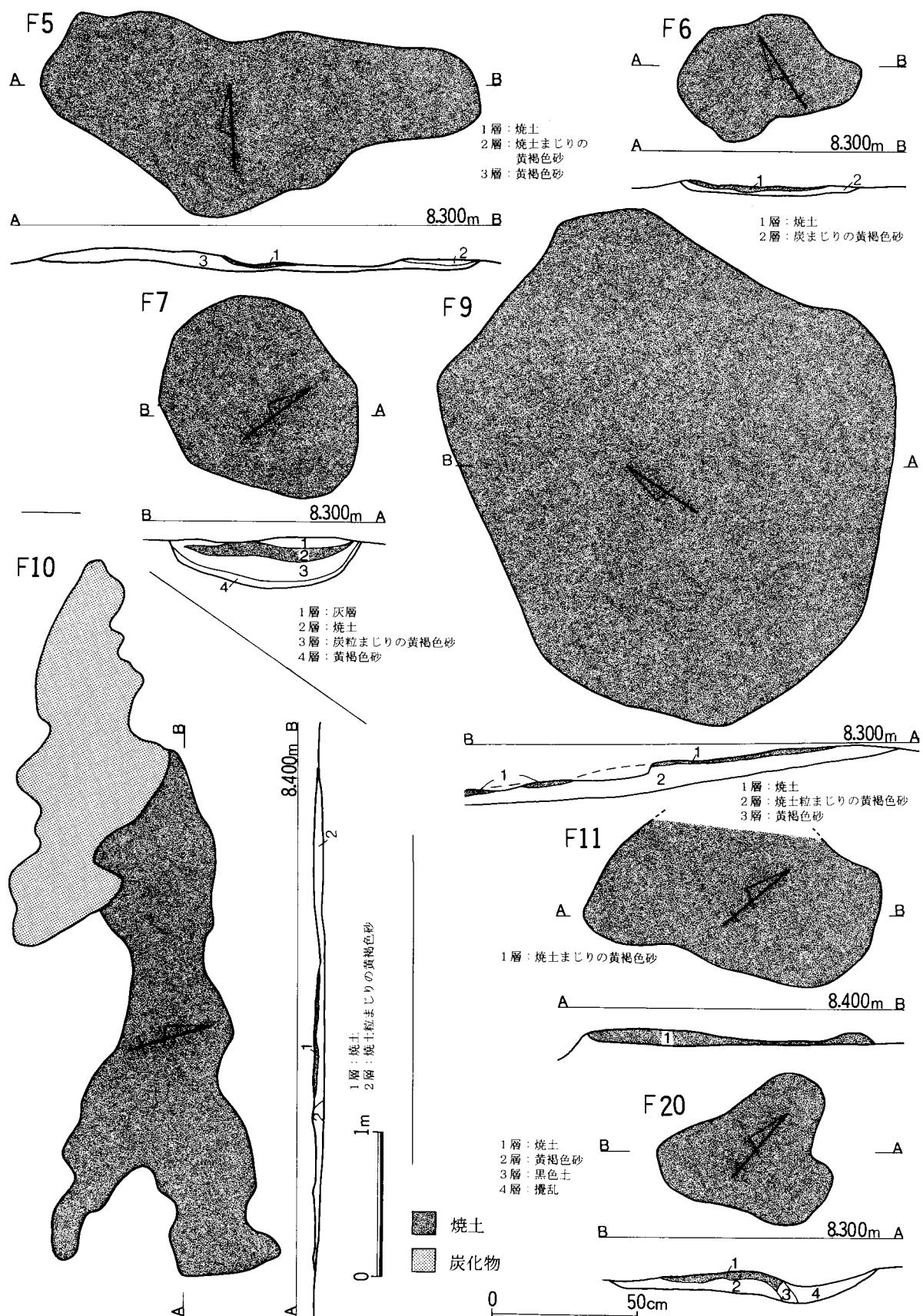
動物遺存体の分析では、F7からサケ属の骨が検出された他はF2, F9, F11, F12, F13, F18、から魚類、鳥類、哺乳類の骨が極微量発見されたが、同定は不可能であった（第11, 13表）。

これらの構築時期を積極的に証明する資料はほとんど存在しないが、F18をとおる地割れに落ち込んだ土器（第12図1, 第21図1）などは、その発見の状況から焼土と同一時期またはその直後の時期の土器と考えてよいと思われる。また、F1の下層から発見された土器が第4号竪穴住居跡出土土器と接合することから、F1は第4号竪穴住居跡より新しい時期であるとみて間違いないであろう。

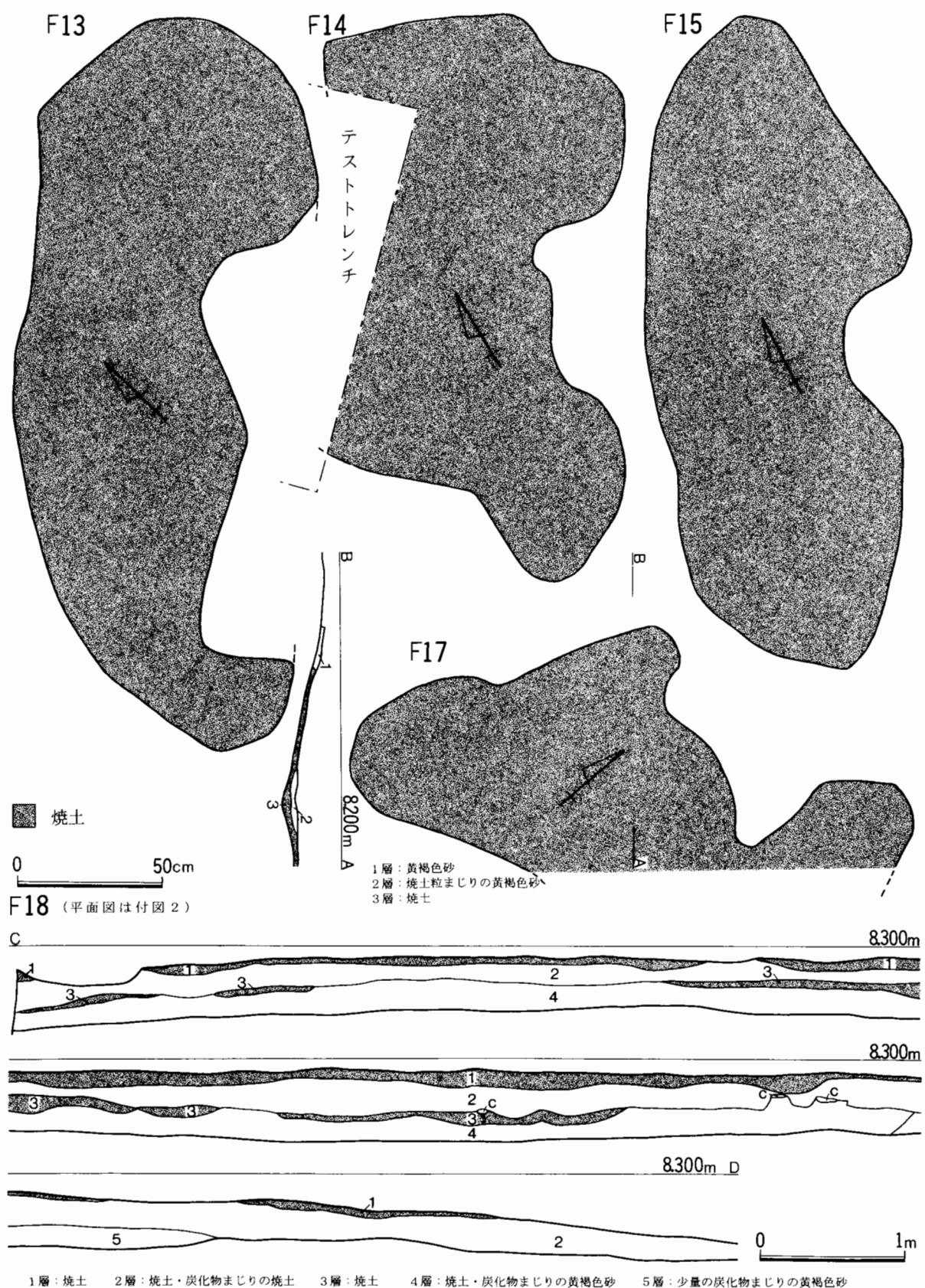
以上の事実から本焼土群の大部分は、擦文時代の集落に付随する屋外作業に用いられたものであるとの推定が可能であるが栽培種子の発見が極めて少ないため、農耕作業に使用された空間であるとする積極的な証拠は何も得られていない。



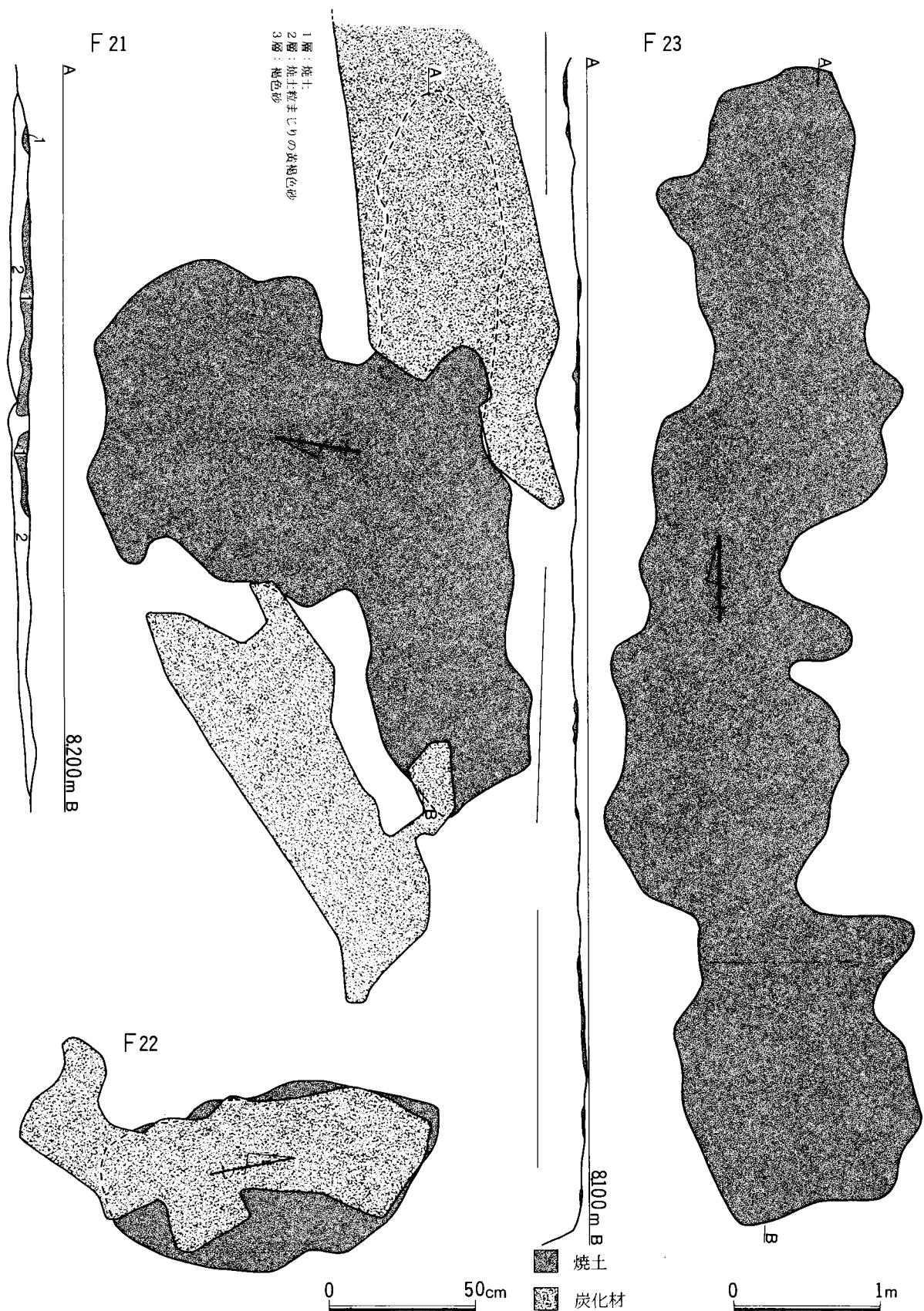
第22図 K113遺跡北35条地点焼土実測図(1)



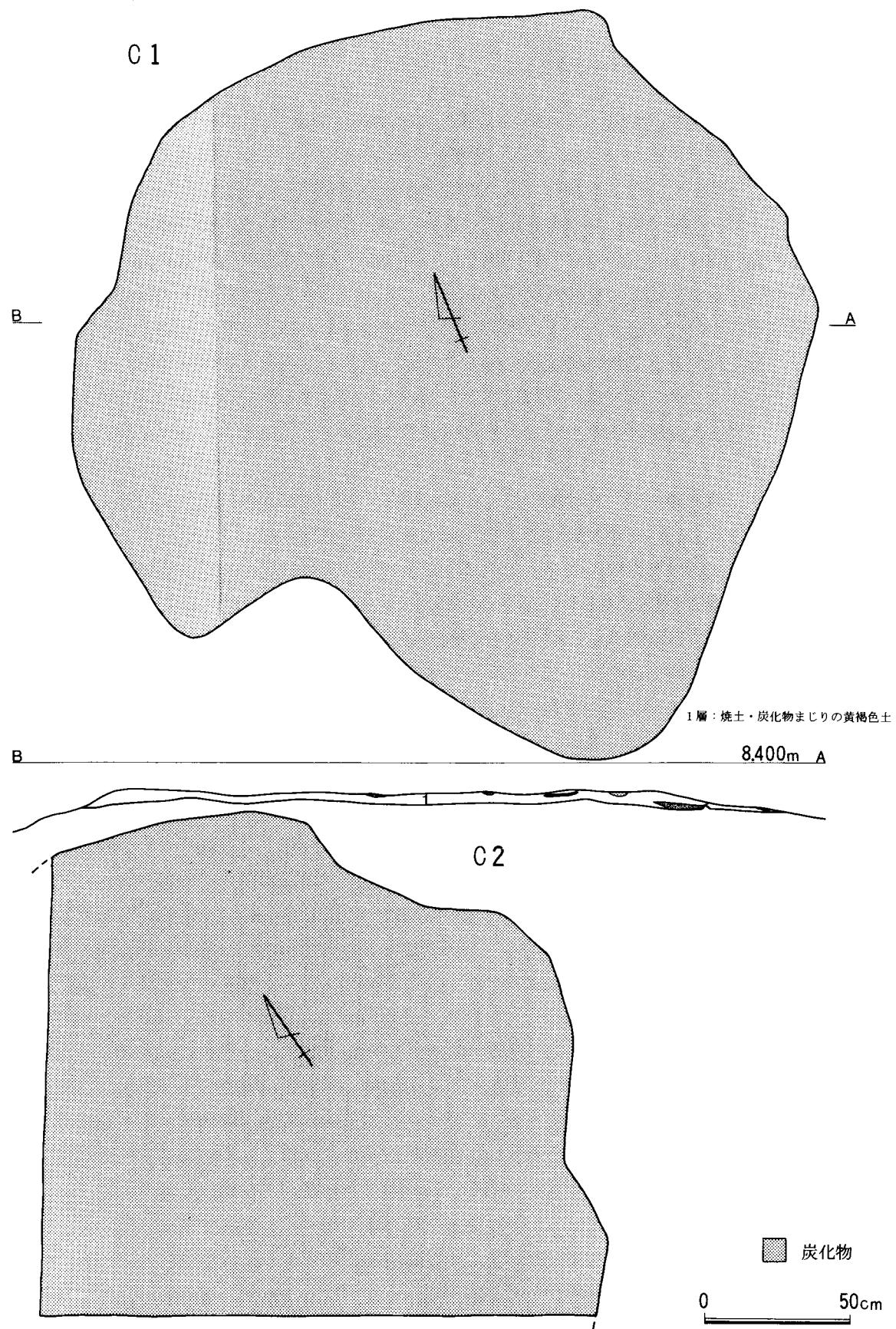
第23図 K113遺跡北35条地点焼土実測図(2)



第24図 K113遺跡北35条地点焼土実測図(3)



第25図 K113遺跡北35条地点焼土実測図(4)



第26図 K113遺跡北35条地点炭化物実測図(1)

第6章 発掘区出土土器（第27, 28図, 第7表, 図版23, 24, 付図2）

本遺跡において記録した遺物点（遺構遺物システムによって記録した遺物点数）の総数は、409点である。その内訳は竪穴出土が206点であり、発掘区は203点であった。また遺物の種別をみていくと、土器、石器、礫に分類でき、その内訳は（同上の条件で）土器205点、石器、礫204点となっている。

発掘区からは、甕、小型の甕、壺などが出土しているが、竪穴住居出土土器と時期や、調整など属性の上で無関係になるような土器はほとんど出土していない。つまり、発掘区から出土してはいるものの、本遺跡の竪穴出土土器とは密接な関係にあるといえよう。また発掘区出土遺物の分布状況を見ると、主に竪穴周辺や焼土周辺から出土しており、後世の攪乱などにより判断は難しいところではあるが、前述した竪穴と発掘区の遺物の関係を踏まえると、遺構とともに比較的短時間に埋没したと理解することができよう。接合状況は、発掘区出土土器のみで接合する個体が何点かみられるが、動きの上では前述した竪穴と発掘区出土土器との接合範囲の中に留まっている。ちなみに竪穴どうしの接合関係はみられない。

第27図-1～4、第28図-1～20は甕である。第27図-1は、頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外反する。胴部から底部にかけてはやや張り出し気味で、底部へはほとんど変化なく、直線的に窄まっていく。また口縁部断面は先端が尖るタイプであり、底面には円形に走る擦痕が確認された。また底部と胴部には継ぎ目痕がみられ、内外面の観察により幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形であることが確認された。外面調整はハケメで行われるが、上半部は横方向であり、胴頂部から以下斜め方向に変わっていく。内面は全体にヘラミガキであり、上半部は横方向、下半部は縦方向である。また内面に施された黒色処理は褐色状態である。頸部以下に文様はなく、口縁部に横走沈線が三条巡る。第2号竪穴住居跡出土の甕（第12図-2, 5, 6, 7）とほぼ同様の文様展開であるが、沈線内には筋状の隆起がみられ、施文具に違いがあるようである。口縁部に補修孔（径6mm）が確認され、外面には割れ口に沿って炭化物が付着している。

第27図-2は、底部欠損の資料である。湾曲する頸部から、外反のさほど強くない口縁部が伸びており、さらに口端部でやや立ち気味に成形されている。胴部以下は、緩やかに底部に向かって窄まっていくが、やや張り出し気味である。また内外面の観察から幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形であることが確認された。外面は全体縦方向のハケメ調整であるが、胴頂部に横から斜方向の種類の異なるハケメ痕が観察された。内面は口縁部一帯ヨコナデであり、以下全体をヘラミガキで調整しており、胴頂部までを横方向、以下縦方向にしている。また内面には丹念な黒色処理が施されているほか、外面には煤が部分的に付着している。文様は口縁部については三条の横走沈線を巡らせた後、間に左傾斜の刺突列を横環している。さらに頸部には約5mm間隔の多条横走沈線を施文後、二条の斜行沈線を鋸歯状に組み合わせた文様が充填される。またその下部に、左傾斜の刺突列が一条横環し、文様帶は完結するが、全体に比して文様帶は狭い。口縁部に補修孔（径5mm）が確認されている。

第27図-3は、小型の甕である。頸部が湾曲し、口縁が外反するが、口端部を垂直につまみ出しており、結果的に屈曲した形になっている。また胴部以下はやや張り出し気味で窄まっていく。底面には笹の葉痕が確認された。幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形である。調整は内外面とも、口縁部一帯をヨコナデし、胴頂部までを横方向、以下縦方向のヘラミガキで調整しているが、外面はヘラミガキ前に、胴頂部までを横方向、以下を縦方向のハケメで調整している。また内面の黒色処理は褐色状態であり外面も一部煤けている。文様は、口縁の屈曲部に縦向きの刺突列、また頸部には二条の横

走沈線を施文後その上下に同じく縦向きの刺突列、さらにその下部にもう一列同様に縦向き刺突列が横環しており、口縁部から数えて合計五列の刺突列が並ぶ。ただし最下部の刺突列は、文様帶と胴部との区画のためのものと思われる。また頸部の文様帶には、山形文状の粗雑な沈線が施文された箇所もみられたが、破片が欠損しているため全体像は明かではない。口縁部に補修孔（径 5 mm）が確認された。

第27図-4は、頸部が湾曲し、口縁部で外反するが、口端部がやや立ち気味に成形されいる。胴部の張り出しが強く、以下緩やかに底部に向かって窄まる。また底部はやや張り出し気味であり、底面には擦痕がみられる。幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形であり、底部の括れには継ぎ目もみられた。外面は全体ハケメ調整であるが、頸部までを縦方向、胴頂部以下は斜方向である。内面は全体ヘラミガキであり、胴頂部までを横方向、以下縦方向に行っている。また内面に施された黒色処理は褐色状態であり、一部外面も煤けている。文様は、口縁部から胴部の最大径まで展開しているが、口縁部には二条の横走沈線を巡らせた後、矢羽根状の刺突列を横環している。頸部には約5mm間隔の多条横走沈線を施文後、三条の斜行沈線を鋸歯状に組み合わせた文様を文様帶下半部に充填し、それに対をなして上半部に二条の斜行沈線をV字状に組み合わせた文様が充填され、結果的に交叉状文的である。さらに、その交叉文と交叉文の間、つまり菱形の空間に一条の沈線による交叉状文を施文する箇所もみられる。ただしこれらの沈線の条数には増減がある。またその文様帶最下部には、二条の斜行沈線を山形状に組み合わせた文様が一巡する。

第28図-1, 2は口縁部片である。いずれも外面はヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキであり、褐色状態に近い黒色処理が施される。第28図-2には段または横走沈線の最上部がみられる。

第28図-3～8は頸部片である。いずれも横走沈線主体の文様が施文されるが、5, 7は幅広浅めのものである。また横走沈線施文後3, 4は縦沈線に山形文を重ねた文様が施文され、3には左傾斜の刺突列もみられる。8は三条の斜沈線と山形文の組み合わせである。外面調整はほとんどがヨコナデであるが、8は縦方向にハケメ調整される。また7も胴部以下については縦方向のハケメである。内面はおおむねヨコナデであるが、7にはさらに横方向のハケメが施される。また6, 8は横方向のヘラミガキである。黒色処理は7, 8以外の資料には施されており、全て丹念に仕上げている。

第28図-9～16は胴部片である。9は胴頂部の破片であり、二段の左傾斜の斜刺突が施文される。他は胴部片であり、外面調整は概ね縦方向のハケメであるが、11だけが縦方向のヘラミガキである。内面はいずれも横方向であり、9, 12, 15, 16はヘラミガキ、10, 13, 14はナデ、11はハケメで調整される。黒色処理は、9, 11, 12, 15, 16の資料に施され、灰色もしくは褐色状態である。

第28図-17～20は底部である。19, 20は接合資料であり、底部には括れもしくは張り出しがあり、20は比較的強く張り出している。外面調整は17, 19が縦方向のハケメ、18, 20がヨコナデであり、内面は17, 19が横方向のハケメ、18, 20はヨコナデである。19以外には、丹念な黒色処理が施される。また19, 20の底面には、笠の葉痕が確認されており、20は若干揚げ底である。

第27図-5、第28図-21～29は坏である。第27図-5は小型の坏であり、口縁部がやや内傾するタイプで、先端が細く成形される。幅約1.5cmの粘土紐による輪積み成形であり、底部と体部の境にはナデ消しきれなかった接合痕もみられる。また底面は平底気味であり、ヘラミガキで調整される。調整は、内外面ともヘラミガキであるが、外面と内面の口縁部は横方向、内面口縁部以下は縦方向である。また内面には丹念な黒色処理が施され、外面も口縁を主体に一部煤けている。

第28図-21, 22は口縁部片である。21は口縁部がヨコナデであり、以下内外面とも縦方向のヘラミガキである。22は内外面ともヨコナデである。また二点とも丹念な黒色処理が施される。

第28図-23は底部片である。内外面ともヘラミガキ調整であり、内面には丹念な黒色処理が施される。底面はヘラミガキであり、平底気味である。器厚は5mmで薄く整形されている。

第28図-24～27は同一個体と思われる口縁部、底部片である。口縁部が内傾し、先端が斜めに成形される。底部は張り出しが著しく、底面がナデ整形であり、若干揚げ底気味である。内面はミガキであり、丹念な黒色処理が施されるが、外面も口縁を主体に一部煤けている。外面は全面ナデ調整であるが、口縁部付近にはヘラナデ痕が残る。胎土や、粗雑な調整、成形の状態などから第21図-18と同一個体と思われる。

第28図-28、29は赤焼き土器である。轆轤水挽きにより成形され、口縁部がやや外反する器形である。器厚は幅約3mmであり、非常に薄い仕上がりである。外面には自然釉による変色が一部みられ、また還元焼成による青灰色変質部もみられるが、それは表面のみにとどまっている。ちなみに、青灰色変質面の色調は、暗オリーブ灰色（Hue5GY7/1）であり、赤焼き面はにぶい黄橙色（10YR7/4）である。

出土土器の分類

発掘調査で得られた資料は、他の擦文期の遺跡同様、器種の上では甕類、壺類が主体となっていた。ここでは、これらの遺物を器種ごとに分類した後、さらにそれぞれを文様などによる諸特徴から細分し、擦文期のどの時期に位置づけられるかを捉えた上で、本遺跡での遺物のあり方について若干検討してみる。

今回の調査で得られた資料の器種には、甕、小型甕、壺、長頸壺がある。ここでは便宜的にこれらに甕、小型甕（KAME = K）、壺（TUKI = T）、長頸壺（TYOUKEITUBO → NAGAKUBITUBO = N）の略号を与え、以下細分していくこととする。

1) 甕（第12、13、16、21、27、28図、第2～4、7表、図版12、13、15B、21、23、24、付図2）

本遺跡出土の甕は、胴部文様帯（頸部）と口縁部の文様によって以下のタイプに分類できる。なおここでいう「沈線文様」とは胴部文様帯に施文される鋸歯文、交叉文、山形文など、区画として施文される沈線（主として縦沈線）に属さない全ての斜め、縦沈線を指すものとする。また口縁部の一段の刺突文とは、ここでは刺突（縦、斜）のみ、もしくは数条の沈線と組み合うが、刺突が一段で完結するものを指す。

K I類 口縁部から無文のもので、頸部に段を持つもの

K II類 胴部文様帯に横走沈線のみを施すもの

K III類 胴部文様帯に横走沈線と沈線文様を組み合わせ、口縁部に一段の刺突列が横環するもの

K IV類 胴部文様帯に横走沈線と沈線文様を組み合わせ、口縁部に複数の刺突列が横環するもの

K V類 胴部文様帯に横走沈線施文後、縦沈線による区画を設定し、沈線文様を加えるもの

K VI類 胴部文様帯が無文のもの

2) 壺（第16、21、27、28図、第3～4、7表、図版15B、21、23、24、付図2）

壺は、成形、形態によって以下のタイプに分類した。

T I類 輪積み成形で平底気味であり、底部の角が丸いもの

T II類 輪積み成形で底部に台がつくもの

T III類 轆轤成形のもので内面黒色のもの

T IV類 轆轤成形で赤焼きのもの

3) 長頸壺 (第12図, 第2表, 図版12, 付図2)

長頸壺は一点のみの出土であるため, その特徴と伴出関係とを追跡することにつとめた。

N I 類 轆轤成形で, 頸部と体部を接着し, 外面に斜めのケズリ調整が加わるもの

各分類土器について

1) 壺

K I 類 (第16図-1)

K I 類は, 口縁部から無文のもので, 頸部に段を持つものである。第3号竪穴住居跡より出土している小型の壺がそれにあたる。属性上の特徴としては口縁部断面形が角形であること, 調整が内外面ともハケメであること, 内面処理が丹念な黒色処理であることなどが挙げられる。ただしこれらの属性は, K II 類として分類した大型の壺の中にも見出しが出来, ここでいうK I 類をK II 類の中に含むこととすることもできる。またK I 類は小型の壺であり, 小型壺の属性が編年指標として扱いにくいものであることが藤本(1972)によっても述べてられており, K I 類については検討の余地が残されている。

K II 類 (第21-1, 2, 7~10図, 第28-5~7図)

K II 類は胴部文様帯に横走沈線のみを施すものである。第4号竪穴住居跡床面, 09-01区, 09-05区, 11-02区から出土している。横走沈線には, 幅の細いものと広いもの(沈線と呼ぶには検討が必要)とがみられ(線状のものと帯状のもの), 第4号竪穴住居跡ではそれらの共伴関係が確認されており, これは土器製作上の技術差として理解出来るものといえる。また調整の面からみれば, ハケメ調整が顕著のものが含まれており, 一方内面処理においても, 第28図-7を除いて丹念な黒色処理が施されている。特に内面調整に着目すると, ハケメ痕をミガキ消すことではなく, ミガキを行う場合ははじめからミガキを行っている。ハケメ調整後, ハケメ痕をミガキ消しているK IV 類以降の資料とは調整の上での差異をみることができる(ミガキのみで調整されるものもある)。

K III 類 (第21図-3~6, 第27図-3, 第28図-3, 4)

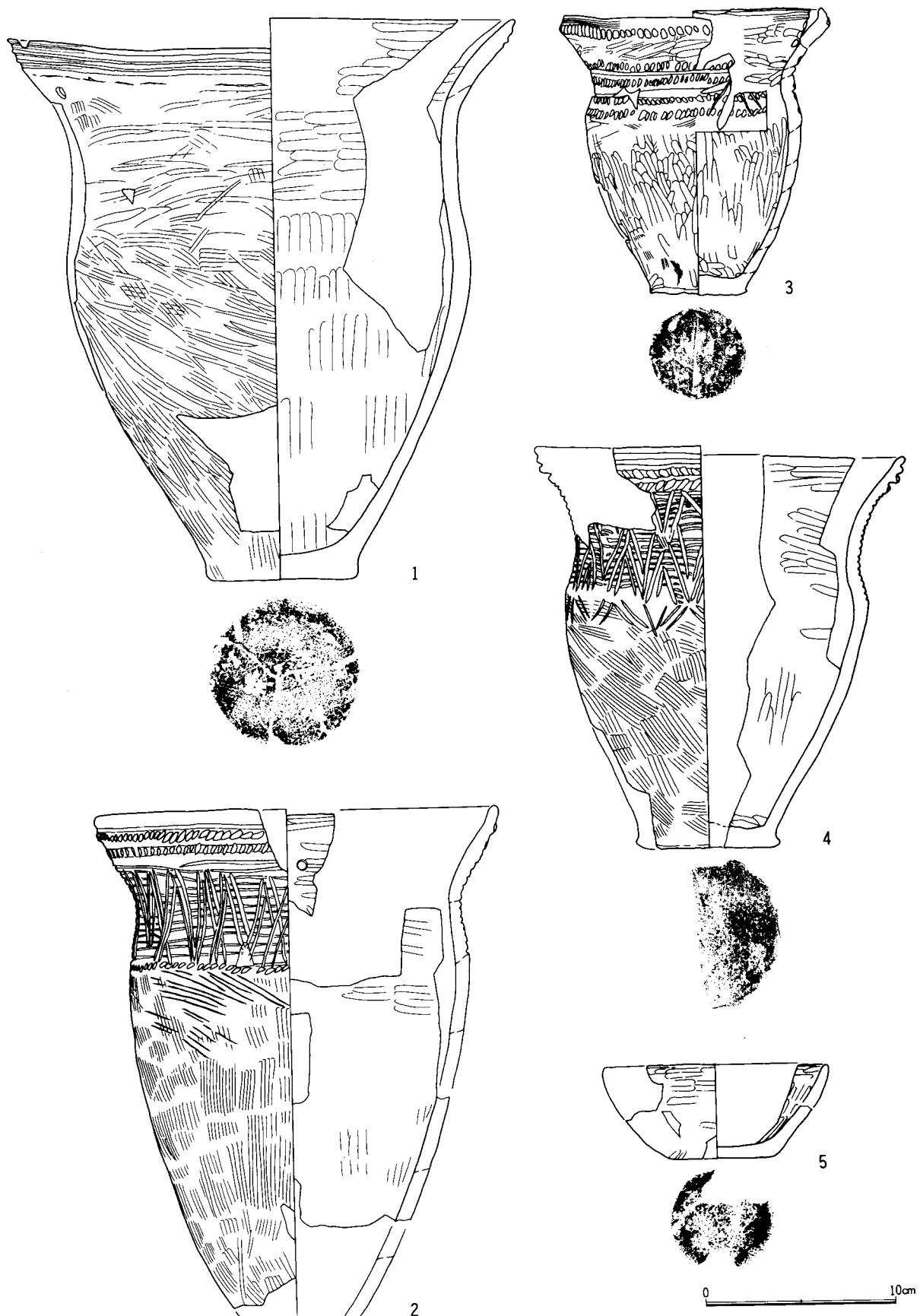
K III 類は胴部文様帯に横走沈線と沈線文様とを組み合わせ, 口縁部に一段の刺突列が横環するものである。内外面ともミガキで調整するものが多いが, 内面処理は, 丹念に黒色処理を施すものと, 褐色状態に留まるものとがみられる。胴部文様帯の横走沈線以外の文様には, 刺突列が横環するものと, 縦沈線と鋸歯文を組み合わせたものがみられており, さらに刺突列を持つタイプには縦沈線, 鋸歯状の沈線を併せ持つものもみられる。文様構成から捉えれば, 横走沈線のみの文様と斜行沈線の組み合わせ文様を多用する時期の移行期にあたるものといえる。ただしK III 類は全て小型の壺であり, K I 類同様, K III 類についても若干の検討が必要である。

K IV 類 (第13図-1~4, 第27図-2, 4)

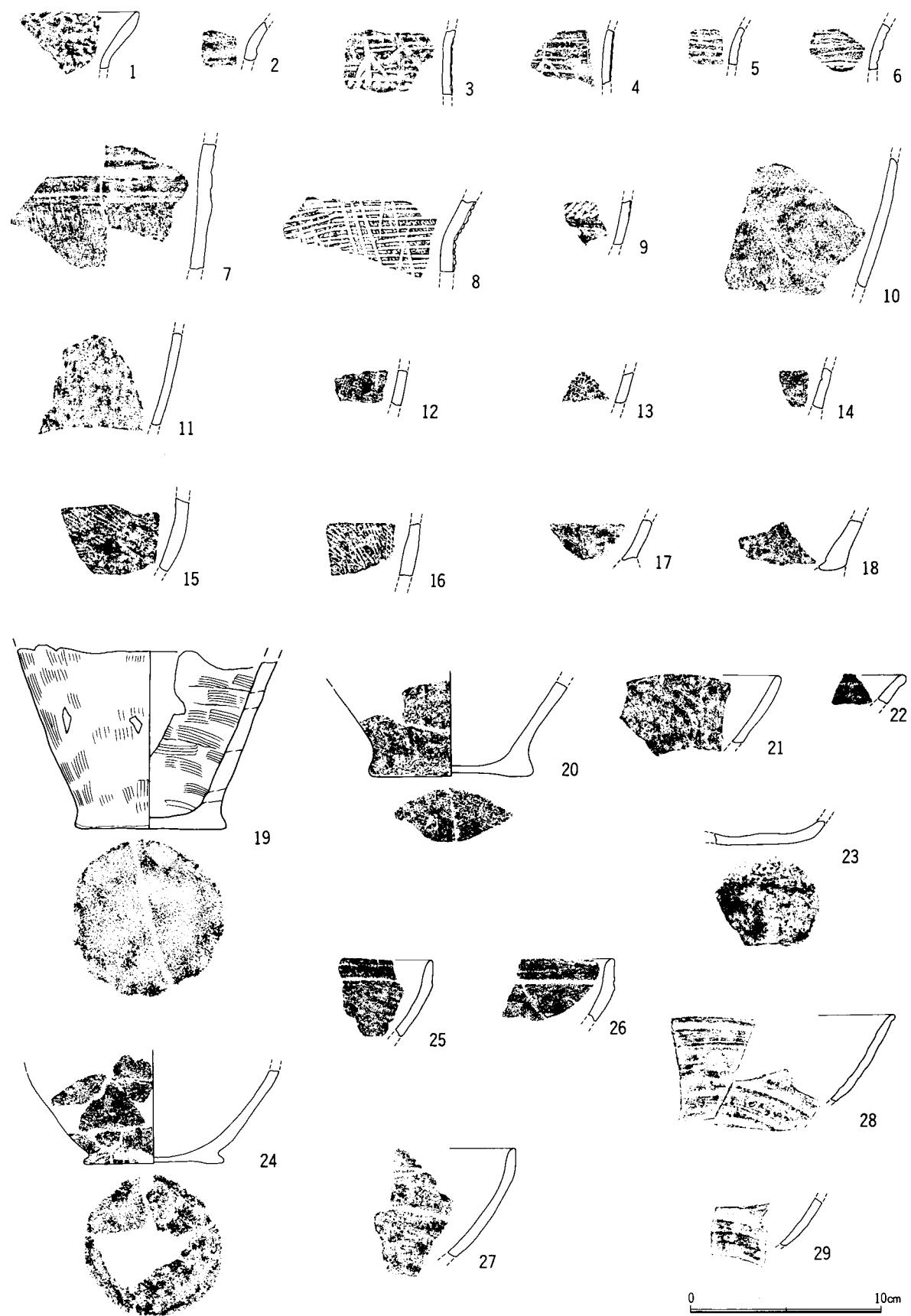
K IV 類は, 胴部文様帯に横走沈線と沈線文様とを組み合わせ, 口縁部に二段以上の刺突列が横環するものである。外面をハケメで, 内面をミガキ主体で調整するが, ミガキの前にハケメ調整を行うものも含まれている。また内面処理は, 全点褐色状態の処理に留まっている。一方横走沈線と組み合う沈線文様の多くは, 斜行沈線の組み合わせで作り出されるもので, 鋸歯文, 交叉文, V字文などがみられ, 様々である。ただし横走沈線はK II 類と同様に多条であり, その間隔も, K III 類と比べて狭くなっている。またK II 類にみられる幅広浅めの沈線はここでは存在しない。

K V 類 (第13図-5~7, 第28図-8)

K V 類は, 胴部文様帯に横走沈線施文後, 縦沈線による区画を設定し, 沈線文様を加えるもので,



第27図 K113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(1)



第28図 K113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(2)

口縁部で屈曲するものも含む。調整と内面処理の上では、K IV類と属性の上での変化はみられない。ただし胴部文様帯においては、縦沈線による文様帯の区画を行っており、それから沈線文様を施している。沈線文様についても、K IV類とは異なるものはみられず、鋸歯文などが施されている。また口縁部は、破片のみではあるが、口縁部で屈曲するものがみられており、擦文期の該期の資料においては文様帯の区画と口縁部の屈曲は対応関係にあり（宇田川1980、7-2図）、ここでは同類として扱うこととした。

K VI類（第12図-2～7、第13図-12、第27図-1、第28図-15、16）

K VI類は、胴部文様帯が無文のものである。調整に関してはK IV類、K V類と同様に、外面ハケメ、内面ミガキ、内面処理が褐色状態に留まるといった点で、変化はみられない。文様で残されているのは口縁部に引かれた三条の横走沈線のみである。そこで本遺跡出土土器の口縁部の沈線をみていくと、K IV類、K V類に沈線がみられており、それは口縁部に二段以上の刺突列を横環することと重なっているようである。条数も複数のものが多く、これらと同質のものとして理解することも可能であると思われる。また器形をみていくと、頸部の湾曲が強い傾向にあるK IV類に対して、K V類は直線的であり、K VI類も直線的な傾向にあることから、K V類とより深い関係のある土器として捉えることが出来よう。

2) 坯

T I類（第27図-5、第28図-23）

T I類は、輪積み成形で平底もしくは平底気味であり、底部の角が丸いものである。調整は内外面ともヘラミガキで共通しており、内面処理においても丹念な黒色処理を行う点で共通している。ただし底面調整は基本的にはヘラミガキ調整であるが、擦痕が残る例もみられている。口縁部まで復元されたのは小型の坯が一点だけであるが、口縁部が内傾し、底部は平底気味である。

T II類（第16-2図、第21図-18、第28図-24～27）

T II類は、輪積み成形で底部に台がつくものである。資料からみれば二個体分であり、双方とも底部が大きめで、口径が若干狭い器形である。底部は底面で張り出しており、円盤状の底部に粘土紐を輪積みするもの（第16図-2）と、底部をつまみ出すもの（第28図-24）がみられ、技術的な差異がみられる。調整においても前者は内外面ミガキで、褐色状態の内面処理を施しているが、後者は内面ミガキであるが、外面はナデのみで、さらに内面処理は丹念な黒色処理であり、これらを同類として捉えることは難しいものといえる。ただし、資料点数も少なく、これ以上の細分はここでは行わない。

T III類（第16図-3、第21図-14～16）

T III類は、轆轤成形のもので内面黒色のものである。内面は指頭の跡をミガキ消しており、その後丹念な黒色処理を施している。切り離しは回転糸切りであり、やや台付気味の底部である。他は底部を欠損しており不明であった。口縁部は直線的で変化はみられず、本遺跡では全例同様の器形である。

T IV類（第21図-19、第28図-28、29）

T IV類は、轆轤成形で赤焼きのものである。器形をみると第21図-19は、口縁が「く」の字に変化し、第28図-28、29のそれとは異なっている。また後者は、表面が青灰色化し、自然釉がみられることがから、厳密には赤焼き土器とはいえないものである。そのことから前者をT IV a類、後者をT IV b類として、細分して取り扱うこととすることもできよう。

3) 長頸壺

N I類（第12図-1）

N I類は、轆轤成形で、頸部と体部を接着し、外面に斜めのケズリ調整が加わる須恵器の長頸壺で

ある。これとほぼ同じ器形、調整を持つものが、K446遺跡（上野1979）で出土している。ただし土器の断面観察では、K446のものは赤褐色に黒色部分が挟まれており、本遺跡出土のものが青灰色に紫黒色の部分が挟まれる状態にあることから、胎土、焼成の上では異質のものといえる。

各分類土器の編年の位置について

これまで述べてきた属性をもとに編年の位置を捉えると、以下のような対応関係をみることが出来る。なお竪穴住居の欄は床面出土土器を用いている。

時期	甕	壺	長頸壺	竪穴住居
擦文前期前半	K I, II類	T I類		第3, 4号
擦文前期後半	K III類	T II, III, IV類		第3, 4号
擦文中期後半	K IV類		N I類	第2号
擦文中期後半	K V, VI類			第2号

以下細分時期と、土器群の関係を説明する。

1) 擦文前期前半 (K I類, K II類, T I類)

本遺跡では、第3号竪穴住居跡、第4号竪穴住居跡の一部の土器と発掘区の一部に、この時期の土器が認められる。札幌市内ではK435遺跡第IV群、H317遺跡第IA群、K460遺跡第II文化層、K39遺跡北11条地点第4文化層、K113遺跡北34条地点上層などと同時期と比定される時期で、宇田川編年（1980）の擦文前期前半期、佐藤編年（1972）のII1期である。編年の基準として用いられてきた甕により比較してみると、本遺跡出土の甕は、上野がK460遺跡の中で行った甕の細分（1980）においては、A2b類としてみることが出来、そのことからK446遺跡第2号竪穴住居跡床面出土の甕とも同類と捉えることも可能である。また仙庭がK435遺跡の中で行った属性分類によればIVKAa類（1993）、H317遺跡の中で行った属性分類によればIKA2b類（1995）にそれぞれ対応するものであり、その中で擦文前期のものとして理解されている。壺に関しては、T I類はH317遺跡第7号竪穴住居跡床面出土の小型壺と同類とみられ、伴出土器の中にIKA2b類に属する甕があり、同時期の所産と見なすことが出来よう。

2) 擦文前期後半 (K III類, T II類, T III類, T IV類)

この時期に当たる資料としては、第3号竪穴住居跡、第4号竪穴住居跡出土の一部の土器と発掘区出土の一部の土器がある。この時期は甕では横走沈線の密度が薄くなり、若干の沈線文様が施文される時期で、文様的には次期の均整のとれた文様とは異なる一群である。札幌市内では、K460遺跡1a層、K446遺跡第4号、第6号、第7号竪穴住居跡床面、N162遺跡第1号竪穴住居跡床面出土土器などがこの時期に相当し、宇田川編年の擦文前期後半期、佐藤編年のII2～II4期である。ただしK III類は、前述したように全て小型の甕であるため年代観を想定することが難しいが、横走沈線の密度、沈線文様の粗雑さなどからほぼこの時期と推定できよう。またT II類に分類した台付の壺であるが、札幌市内ではK446遺跡第1号竪穴住居跡床面直上、K113遺跡北34条地点第2号竪穴住居跡床面などで出土しているものが最も古いと思われ、横走沈線を持つ甕と竪穴でのセットとして出土している。ただしこれらの壺は底部から口縁までは直線的に成形されており、本遺跡出土の壺が緩やかに湾曲するのと比べると、全く異なる器形である。本遺跡出土のものと同類と思われるものはK460遺跡第4号竪穴住居跡出土の壺であり、セット関係にあるとみられる甕をみると、擦文前期後半期として理

解できる。またこれ以後、仙庭の分類によるK435遺跡第VA群（1993）、H317遺跡第IB群（1995）土器にもみられるように、非轆轤成形の坏は台付が主流となっていくようである。一方、TⅢ類に分類した轆轤成形の坏は、宮城県の坏の編年では表杉ノ入式期に相当するものであり、札幌市内ではK435遺跡第18号竪穴住居跡、同第20号、同第22号などにあるように、横走沈線期の甕と、内黒で底面に回転糸切り痕を持つ轆轤成形の坏が併出している。しかし、これらの轆轤成形の坏は底部が台付気味のものではなく、器形をみる限りでは本遺跡のものとは異質のものである。この台付気味の轆轤坏は青森県においては李平下安原遺跡第3号、第9号竪穴住居跡などでみられており、これらは三浦の編年によると（1992）古代後期第Ⅱ期に編年されている。またTⅣ類とした赤焼き土器であるが、三浦（1992）によれば9世紀の中葉頃から無調整の「赤焼き土器」がみられるようになるとあり、前述の分類の中で細分したTⅣa類についてはこの時期に属するものとして理解できそうである。TⅣa類は第4号竪穴住居跡床から出土しており、併出する土器群をみても擦文中期には至らず、9世紀中葉から末までのものとしてみることが出来よう。一方TⅣb類は表面が一部青灰色になるところもみられ、還元焼成に近い状態で焼かれているものと思われる。これが五所川原窯で焼かれたものとすれば、TⅣb類については擦文中期前半以降のものとしなければならない。札幌市内で出土した主な須恵器について、胎土分析を実施した三辻（1993）による分析結果をみても、擦文前期までは小泊、中期から後期は五所川原という傾向が現れているようである。どちらにしても発掘区出土の破片資料であり、器形などから追求することは難しいため、この問題についての解答は胎土分析により明らかにする方がより堅実であると思われる。

3) 擦文中期後半（KⅣ類、KⅤ類、KⅥ類、NⅠ類）

この時期の土器には、本遺跡では第2号竪穴住居跡の土器と発掘区出土の一部の土器が該当する。札幌市内ではK435遺跡第VA群、H317遺跡第IB群などがこの時期にあたる。擦文中期の設定は、宇田川（1980）によってなされているが、この時期を二分しているのは、佐藤（1972）による分類に根拠がある。佐藤は、この時期の細分基準のひとつに「口端部の内屈」をあげており、佐藤分類によればⅢ1～Ⅲ3期を前半、Ⅲ4～Ⅲ7期を後半として捉え、宇田川のそれもこれに準じているのである。また佐藤、宇田川両者とも口縁部の文様が「口端部の内屈」に併って発達することを述べており、中期における細分基準には口縁部の属性が重要となっている。一方、本遺跡での細分基準ともなっている胴部文様帯における縦位の沈線による文様帯の区画は、佐藤Ⅲ5期が開始時期であると両者によって論述されている。上記の表で、KⅣ類とKⅤ、Ⅵ類とに分類し擦文中期後半を二分して捉えているのはそのためである。これらの点を踏まえて甕類をみていくと、KⅣ類は口端部の内屈、文様の状態から、佐藤Ⅲ5期頃のものと思われる。一方、KⅤ類は縦沈線の区画が発達しており、頸部の形状も直線的な傾向が強くなることから、佐藤Ⅲ6期頃のものとして理解できる。また縦沈線については佐藤自身が、Ⅲ5期は二本単位であることが多いと述べており、KⅤ類が三から四本単位であることから、Ⅲ6期として問題がないように思われる。KⅥ類については、札幌市内ではK435遺跡第VA群の中に含まれており、当該時期においても無文土器の存在は認められている。ただし分類上は前記したように頸部が直線的な傾向にあることから、KⅤ類に属するものといえよう。本遺跡における該期の状況を甕の分類によって概観すると、擦文中期後半の時期で、連続する二つの細分時期にかけて存在するものとして理解することが出来る。またNⅠ類とした須恵器の長頸壺であるが、札幌市内では当該期における須恵器の長頸壺の出土例はなく、青森県の状況に目を向けると、アイヌ野遺跡第2号竪穴住居跡、三内遺跡第44号竪穴住居跡から、体部中央上半部に最大径があり、体部と頸部を接合し、胴頂部以下に斜めのケズリのみられる長頸壺が出土しており、三浦編年（1992）の古代後期

Ⅱ期（9世紀後半～10世紀中葉）にあたるものとされている。ただし筆者はこれらの資料を実見していないため、これ以上論究することは難しく、本資料が第2号竪穴住居跡において擦文中期後半の資料とセット関係で出土していることから、この時期のものとして理解するにとどめておく。

各竪穴住居跡の年代観について

本遺跡出土の土器を分類し、編年の位置を記してきたが、各竪穴住居跡から出土している土器は、一時期におさめるには難しいものである。つまり土器の上では二時期にわけて理解すべきものが、同じ竪穴の床面からセットで出土しているのである。資料点数の少ない本遺跡におけるこの傾向は、ここで扱う全ての竪穴住居跡に対してみることが出来、遺跡自体の特徴としても理解することが可能である。一方、前段でまとめたものはあくまで土器における属性上の編年であり、竪穴でのセット関係と前項目で整理したことを踏まえると、これらの竪穴の新旧関係と大まかな年代観を推定することが出来る。以下各竪穴ごとに説明するが、第1号竪穴住居跡は土器が出土していないため、ここでは取り扱わない。

1) 第2号竪穴住居跡

本竪穴からは、擦文時代中期後半の資料が出土しているが、細分すると擦文中期後半の、ある二時期にかけての属性を持つ土器が出土している。土器をみる限りでは連続した二時期にかけてのものであり、ここでは擦文中期後半において、胴部文様帯に縦沈線による区画が行われはじめる前から、定着するまでの時期とみることが出来、これを本竪穴住居跡の編年の位置として捉えておく。年代的には10世紀前半から中頃のものと推定される。

2) 第3号竪穴住居跡

本竪穴からは、擦文前期前半から後半にかけての資料が出土している。前期前半に属しているのはKⅠ類とした小型の甕であり、他の土器はTⅡ類、TⅢ類に分類した坏で、前期後半の資料とした。坏の形態は次時期の擦文中期後半のものにより近い属性を持っており、擦文前期後半の末頃に属するものといえよう。しかしKⅠ類とした小型の甕については、前述したように編年指標となる属性を持っていることは少なく（藤本1972）、セット関係の上からこの甕を擦文前期後半のものとしても見ることが出来る。KⅠ類については属性が不安定であるため、セットで理解する方がより堅実といえる。このことから本竪穴住居跡の年代は、擦文前期後半とすることが出来、年代的には9世紀の中頃から後半頃のものと推定される。

3) 第4号竪穴住居跡

本竪穴からは、擦文前期前半から後半にかけての資料が出土している。前期前半に属するものはKⅡ類とした大型の甕であり、前期後半のものには、KⅢ類、TⅡ、Ⅲ、Ⅳa類がみられる。それぞれ属性と編年の位置は前述のとおりであり、擦文前期前半から後半にかけてのものとして理解することが出来よう。年代的には9世紀の前半から中頃のものと推測される。

時間幅のあるセット関係について

出土土器を分類し、編年的に整理することで、竪穴住居跡の年代を推測してきた。他氏の分類、編年にそのままあてはめてきた感もあるが、それは資料点数も少なく、新たな基準を設定することが難しいためである。大まかには、本遺跡における竪穴住居跡は、土器の出土しなかった第1号を除くと、単独で存在した可能性が土器の編年からいえ、その内容も、須恵器の長頸壺、赤焼きの土器、回転糸切りの坏などがみられるほか、擦文土器も二時期にかけて理解できるものがセット関係にあるなど、

注目すべき点が多い。全体をまとめた上で、最も気になる部分は、この竪穴住居のセットに時間幅があることである。

この点については、他の事例をみても、本文同様、二時期のかけはし的な意味合いで解釈していることが多い。しかしここでは、単純に時間軸に並べられた二つの存在をつなぐということではなく、遺物と人との関わりから新しい解釈を試みてみる。いわば試論である。ちなみにここでいうセット関係とは、一つの竪穴内の床面、カマドから出土したもので構成される土器群のことを指しており、厳密には竪穴廃棄時に最も近い時期にあるとみられる土器群である。ここでいう竪穴廃棄時とは、遺物と人との関係が、さらには遺構と人との関係が切り離された瞬間を指している。つまりこれは、そこに生活を営んだ人々の最後の痕跡のひとつでもある。我々が問題にしなければならないのはセット関係を編年的に理解すること以上に、考古資料を通じてこうした人類の行動の足跡を発見していくことであると思われる。またここでいう時間幅については、連続的な時間幅である可能性と断続的な時間幅である可能性があることも断っておく。つまり、同じ竪穴を連続的に使用していたか、断続的に使用したかということである。以下民族学における事例をあげ、時間幅をどう捉えるかについて検討してみる。

かつて岡田は、集落の移動の問題に取り組んでおり、定着的農耕民であるペブロインディアンの集落をもとにした調査（1973）において、農耕が不可能な気候の変化、自然の災害、人口の著しい減少（闘争によるものも含まれる）、文明との接触による生活の変化、これら以外に彼らが集落を棄てることはないことを述べている。ただしそのなかでの住み替えは行われており、同じ家一部屋には50年以上は住まず、倉庫や墓地に転用されていることが理解されている。また後に岡田はトゥヌナックという半定住狩猟漁撈集落であるエスキモーの村（アラスカ州、北緯60度付近のベーリング海に面した集落址）の調査を例にあげ、論述している（1990）。移動の理由の中で一般化できるものを二点あげており、一つは家屋の耐用年数、そしてもう一つは生活による周囲の汚れといったもので、両者とも物理的な要因として捉えることが出来よう。さらにトゥヌナック村では、一つの集落を継続して使用している時間は、約40年ということも検証されている。またトゥヌナック村のエスキモー達が、1940年頃まで100年近く、夏と冬との二つの拠点をもち生活していたと述べている。

移動の際に彼らがどのようなものを残していたかについては、ペブロインディアンの事例では、移転の事情や移転先までの距離によって変化しているようであり、トゥヌナックの事例では、不用になった古いものが残されたりする程度で、ほとんどのものが持ち去られていたという。このことから、出土遺物の多少は、ほとんど偶発的なもので、一つの指標を求めるることは難しいように思われた。またここであげた事例は、集落の移動についてであり、竪穴一軒の移転ということではない。

これらのこと踏まえると、セット関係における時間幅は当然見られるわけであり、前述の北米大陸の例をみると、約40年から50年が物理的に生じる移動の時間幅としてみることも出来よう。ただし竪穴一軒の移転はその時間幅の中で行われており、セット関係にある土器群の年代幅も、少なくとも半世紀以上にはわたらない可能性を読みとることが出来る。

このことからセット関係にある土器群は、竪穴住居の建築から廃棄に至るまでの（一時期かもしれない）時間幅を表現している可能性があり、セット関係の中で土器が分類されているのは、たまたま属性分類上二分される時期に、竪穴が使用されていたと推測することも出来よう。ただし擦文時代の生活文化が、前述の生活文化（定着的農耕文化、半定住的狩猟漁撈文化）を含め、その全体像が明らかにされていない現在、この時間幅がそのまま生かされるわけではない。ただ、ここでいえることは、竪穴住居からセット関係で出土した土器群は、こうした時間幅を生み出す背景を持っているということ

とである。そしてセット関係にある土器群を一時期にとどめるべく捉えることは、この状況からすると逆に難しいものといえよう。

今後の課題として、竪穴におけるセット関係を明確にした調査を行うことの他に、個体一つについての土器の持つ属性を一般化できるような、土器分類を行うことが求められよう。藤本、仙庭らが実施している土器の属性表をもとにした分類は、この点で非常に有効である。仙庭も述べるとおり、議論の焦点を明らかにする点で優れている。こうした研究の上での基礎的な下地を形式化することが、より複雑な問題を捉えていく上で重要な点であると思われる。例えば今回の問題にしても、セット関係にある土器を、個体別に分類して理解し、あらためてセット関係に組み直すことによって、単なる編年基準とされていた土器に、新たな一面を与えることになろうかと思われる。これらは今後の課題としておきたいものである。

(秋山洋司)

引用参考文献

- 上野秀一 1979 『K446遺跡』札幌市文化財調査報告書XX 札幌市教育委員会
上野秀一 1980 『K460遺跡』札幌市文化財調査報告書XXⅡ 札幌市教育委員会
上野秀一 1995 『K113遺跡北34条地点』札幌市文化財調査報告書49 札幌市教育委員会
上野秀一、仙庭伸久編 1993 『K435遺跡』札幌市文化財調査報告書XLⅡ 札幌市教育委員会
宇田川洋 1979 「'70年代擦文文化の研究」『どるめん22』
宇田川洋 1980 「擦文文化」『北海道考古学講座』
岡田淳子 1973 「遺跡形成論—ペブルインディアンの事例を中心として—」『国立音楽大学紀要8』
岡田淳子 1990 「民族考古学の一試論—エスキモー集落址の研究—」『古代 第90号』
加藤邦雄 1995 『K39遺跡北11条地点』札幌市文化財調査報告書48 札幌市教育委員会
佐藤達夫 1972 「擦紋土器の変遷について」『常呂』
仙庭伸久編 1995 『H317遺跡』札幌市文化財調査報告書46 札幌市教育委員会
天間勝也他 1987 『李平下安原遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第111集
三浦圭介 1992 「青森県における古代の土器様相」『第18回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』
藤本 強 1972 「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』
三辻利一 1993 「札幌市内の遺跡出土須恵器、土師器の蛍光X線分析」『K435遺跡』

第7表 K113遺跡北35条地点発掘区出土土器属性表

番号	個体番号	拓本番号	種類	部位	規 格 (cm)				器面調整		文 様	
					器 高 (長)	口 径 (幅)	底 径 (厚)	容 量 (?L)	外 面	内 面	口 緑 部	脇部文様帶
27-1	P007		甕	口縁部～底部	29.8	26.8	8.1	7.100	横ハケメ 斜ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線3条	
27-2	P009 A		甕	口縁部～胴部	27.0	21.5	—	—	横ナデ 横ハケメー横ミガキ 斜ハケメー縦ミガキ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線3条 —斜刺突	横走沈線 —鋸歯文
27-3	P010		小甕	口縁部～底部	15.2	13.4	5.1	0.926	横ナデ 横ハケメー横ミガキ 斜ハケメー縦ミガキ	横ナデ 横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	縦刺突	横走沈線 —斜刺突 —山形文
27-4	P008		甕	口縁部～底部	21.4	19.5	(7.6)	2.263	縦ハケメ 斜ハケメ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理	横走沈線2条 —矢羽根状刺突	横走沈線 —V字・鋸歯文
27-5	P019		壺	口縁部～底部	5.0	11.8	5.6	0.245	横ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ 黒色処理		
28-1		T51	甕	口縁部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		
28-2		T50	甕	口縁部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		肩に段つき
28-3		T53	甕	胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		横走沈線 —縦沈線・山形文
28-4		T54	甕	胴部文様体	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		横走沈線 —縦沈線・山形文
28-5		T52	甕	胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		幅広浅めの横走沈線
28-6		T45	甕	胴部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		多条横走沈線
28-7		T44	甕	胴部文横帶～胴部	—	—	—	—	横ナデ 縦ハケメ	横ナデ —横ハケメ		幅広浅めの横走沈線
28-8	P016 B	T41	甕	胴部文様帶	—	—	—	—	縦ハケメ	横ミガキ		横走沈線 —縦沈線3条 —間に山形文
28-9		T43	甕	胴下部文様帶	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ		
28-10		T59	甕	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ナデ		
28-11		T49	甕	胴部	—	—	—	—	縦ミガキ	横ハケメ 黒色処理		
28-12		T39	甕	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		
28-13		T57	甕	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ナデ		
28-14		T58	甕	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ナデ		
28-15	P015 D	T38	甕	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		
28-16	P015 E	T42	甕	胴部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ミガキ 黒色処理		
28-17		T47	甕	底部	—	—	—	—	縦ハケメ	横ハケメ		
28-18		T55	甕	底部	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		
28-19	P011		甕	胴部～底部	—	—	7.8	—	縦ハケメ	横ハケメ		
28-20		T48	甕	胴部～底部	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		
28-21		T46	壺	口縁部～体部	—	—	—	—	横ナデー縦ミガキ	縦ミガキ 黒色処理		
28-22		T40	壺	口縁部	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ 黒色処理		
28-23		T56	壺	底部	—	—	—	—	横ミガキ	横ミガキ 黒色処理		
28-24	P020 A	T17	壺	体部～底部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理		
28-25		T62	壺	口縁部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ	ヘラナデ痕	
28-26		T63	壺	口縁部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ	ヘラナデ痕	
28-27	P020 B	T18	壺	口縁部～体部	—	—	—	—	横ナデ	横ミガキ 黒色処理	ヘラナデ痕	
28-28		T60	壺	口縁部～体部	—	—	—	—	ロクロ水挽	ロクロ水挽		
28-29		T61	壺	体部	—	—	—	—	ロクロ水挽	ロクロ水挽		

胴下部 形状	底部 形状	色調		最大接合距離(m)	方向	分類	区名	層位	遺物番号	図版 番号	備考
		外面	内面								
	擦痕	10Y R7/3 にぶい黄橙	10Y R3/1 黒褐			K VI	09-03	攪乱	2,7,10,13	23-3	補修孔あり
斜刺突		7.5Y R5/8 明褐	7.5Y R1.7/1 黒			K IV	09-03	攪乱	2,6,8, 9,11	23-1	補修孔あり
	筆痕	7.5Y R6/6 橙	7.5Y R4/2 灰褐			K III	10-03	IV	2,3	23-4	補修孔あり
山形文	擦痕	7.5Y R7/4 にぶい橙	7.5Y R4/2 灰褐			K IV	09-03	攪乱	2	23-2	
	ヘラミガキ	10Y R6/9 にぶい黄橙	10Y R1.7/1 黒			T I	09-04		2,3	23-5	
							09-01	IV	1,7,8, 9,10		
							09-02	IV	1,2,3, 4,5		
							11-03	IV	38		
		7.5Y R6/6 橙	7.5Y R5/2 灰褐				11-02	IV	5	24-1	磨滅
		7.5Y R6/6 橙	7.5Y R5/2 灰褐				11-02	IV	6	24-2	磨滅
刺突		7.5Y R5/3 にぶい褐	7.5Y R2/1 黒			K III	11-03	IV	37	24-3	磨滅
		7.5Y R5/3 にぶい褐	7.5Y R2/1 黒			K III	11-02	IV	9	24-4	磨滅
		7.5Y R5/3 にぶい褐	7.5Y R2/1 黒			K II	11-02	IV	3	24-5	磨滅
		10Y R7/4 にぶい黄橙	10Y R1.7/1 黒			K II	09-01	IV	6	24-6	
		10Y R5/1 褐灰	5Y R6/6 橙			K II	09-05	IV	1	24-7	磨滅
		7.5Y R6/8 橙	7.5Y R5/1 灰褐			K V	08-03	攪乱	1	24-8	
斜刺突列2段		10Y R7/4 にぶい黄橙	7.5Y R2/1 黒				08-04	攪乱	2	24-9	
		10Y R6/3 にぶい黄橙	10Y R7/4 にぶい黄橙				11-04	IV	2	24-10	磨滅
		10Y R7/4 にぶい黄橙	7.5Y R5/2 灰褐				11-02	IV	7	24-11	磨滅
		10Y R7/4 にぶい黄橙	10Y R6/2 灰黄褐				11-04		4	24-12	
		10Y R6/3 にぶい黄橙	10Y R7/4 にぶい黄橙				11-04	IV	3	24-13	磨滅
		10Y R6/3 にぶい黄橙	10Y R7/4 にぶい黄橙				11-04	IV	3	24-14	磨滅
		10Y R7/4 にぶい黄橙	10Y R4/2 灰褐			K VI	08-02	攪乱	2	24-15	被熱による 剝離あり
		10Y R7/4 にぶい黄橙	10Y R4/2 灰褐			K VI	08-01	攪乱	1	24-16	
		10Y R7/4 にぶい黄橙	7.5Y R4/1 褐灰				10-01	IV	7	24-17	
		7.5Y R5/3 にぶい褐	7.5Y R2/1 黒				11-03	IV	43	24-18	磨滅
筆痕		7.5Y R7/4 にぶい橙	7.5Y R6/6 橙				11-03	IV	41	24-19	
揚げ底 筆痕		10Y R5/1 褐灰	10Y R3/1 黒褐				10-03	IV	1,5	24-20	磨滅
		10Y R5/1 褐灰	10Y R1.7/1 黒				10-03	IV	4	24-21	
		10Y R5/1 褐灰	10Y R1.7/1 黒					攪乱		24-22	
ヘラミガキ		7.5Y R7/6 橙	7.5Y R1.7/1 黒			T I	11-03	IV	44	24-33	
揚げ底		10Y R7/3 にぶい黄橙	10Y R1.7/1 黒			T II	10-01	IV	6,9	24-24	磨滅
		10Y R7/3 にぶい黄橙	10Y R1.7/1 黒			T II	10-01	IV	9	24-25	磨滅
		10Y R7/3 にぶい黄橙	10Y R1.7/1 黒			T II	10-01	IV	1,5	24-26	磨滅
		10Y R7/3 にぶい黄橙	10Y R7/4 にぶい黄橙			T IV b	11-03	IV	23,45	24-27	磨滅
		5G Y7/1 暗オリーブ灰	10Y R7/4 にぶい黄橙			T IV b	11-03	表探		24-28	赤焼 自然釉
		5G Y7/1 暗オリーブ灰	10Y R7/4 にぶい黄橙			T IV b	11-03			24-29	赤焼

第8表 K113遺跡北35条地点発掘区出土石器・礫計測値一覧表

出土区	層位	遺物番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
09-01	IV	3	38.0	29.0	20.4	20.3	
09-01	IV	4	29.0	25.0	22.0	15.7	
09-03	攪乱	12	51.0	28.0	22.5	27.3	
10-01	IV	2	83.0	61.0	30.4	205.0	楕円形扁平
10-01	IV	4	24.0	22.0	17.5	15.2	
10-01	IV	10	94.0	41.0	27.0	132.7	
10-02	IV	2	(33.0)	(26.0)	(23.7)	(18.9)	*大型礫の残片
10-02	IV	3	66.0	36.0	16.1	27.4	
10-02	IV	4	46.0	34.0	26.5	37.5	
10-02	IV	5	103.0	50.8	33.6	280.0	*三角形扁平
10-02	IV	6	(57.0)	(27.0)	(12.5)	(19.4)	*一部のみ残存
10-02	IV	11	62.0	37.0	25.1	51.8	
10-03	IV	6	76.0	42.0	30.7	138.3	*半分欠損
10-03	IV	7	(41.0)	(27.0)	(16.1)	(18.9)	*大部分欠損
11-01		1	(106.0)	(68.0)	(42.5)	(335.0)	大型礫大部分欠損
11-01		2	78.0	41.0	23.4	118.8	
11-01		3	85.0	40.0	32.9	163.1	
11-01		4	69.0	40.0	32.3	113.6	
11-01		5	74.0	47.0	36.2	190.0	
11-01		6	92.0	40.0	27.6	138.1	
11-01		7	70.0	37.0	29.1	113.1	
11-01		8	91.0	41.0	25.0	122.9	
11-01		9	76.0	38.0	27.5	117.3	
11-01		10	90.0	37.0	26.7	123.2	
11-01		11	84.0	28.0	26.5	91.1	
11-01		12	68.0	40.0	26.3	91.6	
11-01		13	72.0	43.0	27.1	123.1	
11-01		14	94.0	47.0	28.1	117.7	
11-01		15	87.0	40.0	27.0	114.2	
11-01		16	76.0	38.0	37.8	143.1	
11-01		17	82.0	48.0	24.2	120.0	
11-01		18	74.0	47.0	20.0	99.2	
11-01		19	95.0	45.0	38.0	175.9	
11-01		20	80.0	42.0	23.7	105.7	
11-01		21	79.0	46.0	24.6	134.8	
11-01		22	98.0	44.0	25.0	139.8	
11-01		23	87.0	39.0	25.8	122.1	
11-01		24	76.0	44.0	25.2	130.7	
11-01		25	84.0	43.0	30.6	148.5	
11-01		26	82.0	35.0	22.3	87.0	
11-01		27	84.0	38.0	29.2	122.0	
11-01		28	86.0	36.0	22.0	110.3	
11-01		29	94.0	49.0	32.0	204.6	
11-01		30	89.0	35.0	28.4	111.9	
11-01		31	(52.0)	45.0	23.5	(75.1)	半分欠損
11-01		32	(47.0)	(26.0)	(15.3)	(17.2)	一部のみ残存
11-01		33	(50.0)	(48.0)	(23.8)	(78.3)	半分欠損
11-01		34	81.0	43.0	19.6	96.7	
11-01		35	66.0	43.0	19.7	61.2	
11-01		36	64.0	41.0	23.1	92.7	
11-01		37	(70.0)	(43.0)	(25.4)	(68.3)	大部分欠損
11-01		38	91.0	80.0	22.2	260.0	やや大型扁平
11-01		39	78.0	35.0	27.1	123.1	
11-01		40	77.0	40.0	34.0	125.9	
11-01		41	74.0	50.0	28.0	141.9	
11-01		42	72.0	42.0	23.7	77.7	
11-01		43	52.0	30.0	17.3	37.3	*
11-01		44	51.0	32.0	20.2	46.8	*
11-01		45	55.0	34.0	13.8	41.6	*
11-01		46	85.0	32.0	22.4	84.8	
11-01		47	58.0	43.0	20.4	67.5	
11-01		48	62.0	33.0	21.4	54.6	
11-01		49	(47.0)	(38.0)	(18.0)	(23.7)	大部分欠損・加熱

第8表 K113遺跡北35条地点発掘区出土石器・礫計測値一覧表

出土区	層位	遺物番号	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
11-01	炭層上	50	(80.0)	(42.0)	(24.1)	(82.7)	半分欠損
		51	(39.0)	(35.0)	(19.4)	(22.9)	一部のみ残存
		52	76.0	37.0	18.0	64.0	
		53	75.0	42.0	26.9	119.7	
		54	(77.0)	(67.0)	(36.1)	(167.3)	大型礫の残片
		55	73.0	43.0	22.6	90.7	
		56	74.0	46.0	30.0	142.3	
		57	81.0	38.0	38.4	124.2	
		58	79.0	41.0	27.4	115.3	
		59	55.0	26.0	12.0	28.9	*
		60	(67.0)	44.0	30.8	(126.6)	半分欠損
		61	60.0	39.0	22.4	78.1	
		62	(40.0)	31.0	27.4	(40.9)	*半分欠損
		63	56.0	55.0	26.1	113.3	一部欠損
		64	70.0	33.0	23.4	73.5	
11-02	IV	9	46.0	32.0	27.2	38.1	*
11-03	IV	1	(48.0)	(45.0)	(40.5)	(99.9)	一部のみ残存
11-03	IV	2	(80.0)	(58.0)	(22.8)	(131.3)	大型礫の残片
11-03	IV	3	(48.0)	37.0	28.9	(84.9)	半分欠損
11-03	IV	4	51.0	35.0	22.4	71.3	
11-03	IV	5	68.0	28.0	26.1	71.0	
11-03	IV	6	(58.0)	36.0	25.8	(84.4)	一部欠陥
11-03	IV	7	(49.0)	37.0	(24.7)	(50.2)	大部分欠損
11-03	IV	8	70.0	45.0	27.0	105.6	
11-03	IV	9	(61.0)	40.0	34.5	(111.7)	
11-03	IV	10	90.0	50.0	30.3	203.6	
11-03	IV	11	60.0	38.0	18.2	59.3	扁平
11-03	IV	12	63.0	30.0	25.5	72.5	
11-03	IV	13	(63.0)	(23.0)	(15.4)	(29.8)	大指分欠損
11-03	IV	14	(55.0)	54.0	26.7	(101.4)	半分欠損
11-03	IV	15	94.0	44.0	40.0	239.2	
11-03		16	74.0	43.0	13.7	60.4	扁平・加熱
11-03		17	86.0	44.0	31.0	159.2	
11-03		18	100.0	46.0	23.9	169.2	
11-03		19	55.0	31.0	24.2	42.5	*
11-03	IV	20	55.0	26.0	21.0	36.0	*
11-03	IV	22	64.0	35.0	19.6	52.6	*
11-03	IV	24	80.0	37.0	33.7	125.0	
11-03	IV	25	(52.0)	41.0	32.3	(62.6)	*
11-03	IV	26	53.0	30.0	18.2	42.5	*
11-03	IV	27	74.0	47.0	33.6	140.5	一部加熱
11-03	IV	28	(67.0)	42.0	25.1	(126.6)	一部欠損
11-03	IV	29	(47.0)	(46.0)	(25.7)	(47.4)	*大部分欠損
11-03	IV	30	(66.0)	(33.0)	(32.3)	(65.5)	*大部分欠損
11-03	IV	31	57.0	27.0	23.1	38.4	*
11-03	IV	32	(67.0)	(27.0)	(21.4)	(54.0)	一部のみ残存
11-03	IV	33	72.0	42.0	39.1	136.7	
11-03	IV	34	(53.0)	46.0	21.0	(63.6)	一部加熱
11-03	IV	35	(90.0)	(49.0)	(36.0)	(156.4)	大型石のみ残片
11-03	IV	36	(55.0)	(50.0)	(25.1)	(82.9)	一部のみ残存
11-03	IV	39	71.0	43.0	34.9	138.0	一部加熱
11-03		40	132.0	71.0	53.7	550.0	
11-03	IV	42	57.0	40.0	35.0	68.7	*
11-03	IV	46	65.0	33.0	10.1	37.7	*
11-03	IV	47	60.0	24.0	21.7	44.9	*
11-03	IV	48	(60.0)	47.0	27.4	(92.8)	半分欠損・一部加熱
11-03	IV	49	(38.0)	(32.0)	(25.0)	(37.6)	半分欠損
11-03	IV	50	70.0	38.0	19.8	85.3	
11-03	IV	51	74.0	41.0	32.4	136.3	一部煤付着
11-03	IV	52	78.0	38.0	23.2	73.5	
11-03	IV	53	66.0	45.0	20.5	81.6	扁平

*地山中に存在する自然礫と思われるもの

第9表 K113遺跡北35条地点出土土器接合一覧表

挿図番号	個体番号	器種	区名	層位	遺物番号	最大接合距離(m)	方向	分類	図版番号	備考
16-1	P001	小甕	HP-3	カマド	8			K I	15B-1	
				08-03	攪乱					
16-3	P002	壺	HP-3	カマド	8, 9			T III	15B-4	
16-2	P003	壺	HP-3	床	2			T II	15B-2	
21-1	P004A	甕	HP-4	床	45, 47, 50, 54			K II	21-1	
				10-02	V 12					
21-2	P004B	甕	10-02	IV	1, 8, 9			K II	21-2	
				V	12					
21-6	P005	小甕	HP-4	床	38, 52, 53			K III	21-3	指圧痕
21-14	P006	壺	HP-4	床	38, 42, 45, 46, 60, 66, 82, 85, 87, 90			T III	21-5	
27-1	P007	甕	09-03	攪乱	2, 7, 10, 13			K VI	23-3	補修孔あり
27-4	P008	甕	09-03	攪乱	2, 3, 4			K IV	23-2	
27-2	P009A	甕	09-03	攪乱	2, 6, 8, 9, 11			K IV	23-1	補修孔あり
27-3	P010	小甕	10-03	IV	2, 3			K III	23-4	補修孔あり
28-19	P011	甕	11-03	IV	41				24-19	
12-1	P012	長頸壺	09-03	攪乱	1		E-W	N I	12-1	須恵器 5P2/1紫黒
				HP-2	59					
				床	6					
13-1	P013A	甕	HP-2	床	27		NW - SE	K IV	13-1	被熱による剥離あり 磨滅
				カマドF	1					
				カマドG	2					
				H 9 試掘						
13-2	P013B	甕	HP-2	カマドF			NW - SE	K IV	13-2	被熱による剥離あり 磨滅
				H 9 試掘						
13-3	P013C	甕	HP-2	床	18, 25, 26		NW - SE	K IV	13-3	被熱による剥離あり 磨滅
					3					
13-4	P013D	甕	HP-2	カマドG	1			K IV	13-4	被熱による剥離あり 磨滅
				H 9 試掘						
12-2	P014A	甕	HP-2	床	3, 5, 7, 8, 9, 13, 14, 15, 16, 20, 46		E-W	K VI	12-2	
					57, 60, 61					
				08-03	攪乱					
13-12	P014B	甕	HP-2	床	3, 7		NW - SE	K VI	13-12	
					57					
12-4	P014C	甕	HP-2	床	8, 9, 16		0.9	NW - SE	K VI	12-4
12-7	P015A	甕	HP-2	床	23			K VI	12-7	被熱による剥離あり 磨滅
					66					
12-5	P015B	甕	HP-2	攪乱	69			K VI	12-5	被熱による剥離あり 補修孔あり
12-6	P015(C)	甕	HP-2	カマドG	2			K VI	12-6	被熱による剥離あり
13-5	P016A	甕	HP-2	カマドF	1			K V	13-5	
12-3	P017A	甕	HP-2	カマドF	1		E-W	K VI	12-3	
				床	35					
				攪乱	51, 63, 67					
				08-04	3					
21-9	P018A	甕	HP-4	床	57, 74, 75, 79			K II	21-10	
21-8	P018B	甕	HP-4	床	57, 58, 64, 72, 80, 81, 84, 90			K II	21-9	
21-7	P018C	甕	HP-4	床	40, 53, 64, 67			K II	21-4	
27-5	P019	壺	09-01	IV	1, 7, 8, 9, 10		T I	23-5		
				09-02	IV 1, 2, 3, 4, 5					
				11-03	IV 38					
28-24	P020A	壺	10-01	IV	6, 9			T II	24-24	磨滅
28-27	P020B	壺	10-01	IV	1, 5			T II	24-27	磨滅
13-13	P021	甕	HP-2	床	4		2.2	E-W	13-13	炭化物付着
21-5	T16	小甕	HP-4	床	43		K III	21-8		
				HP-4 焼土2						
13-8	T19	甕	HP-2	攪乱	55, 56				13-8	磨滅
13-10	T25	甕	HP-2	攪乱	52, 68				13-10	磨滅
28-20	T48	甕	10-03	IV	1, 5				24-20	磨滅
28-28	T60	壺	11-03	IV	23, 45			T IV b	24-28	赤焼自然釉

第7章 K113遺跡北35条地点出土動物遺存体

東北大学考古学研究室助手 富岡直人

本報告文は、札幌市K113遺跡北35条地点での1994年の調査によって検出された擦文時代に属する動物遺存体について記述するものである。

札幌市埋蔵文化財センターの加藤邦雄氏、上野秀一氏、羽賀憲二氏、仙庭伸久氏には資料の提供とともに様々なご援助を頂いた。また、分析にあたっては、種市和嘉子さん、本間直子さんの多大なる協力を得た。資料同定に際しては札幌市豊平川さけ科学館館長金田寿夫氏、研究員高山肇氏に比較標本の提供と御助言を頂いた。

さらに東北大学文学部須藤隆先生には様々な御指導を頂いた。記して感謝の意を表します。

第1節 出土状況

目視で焼骨が確認された土壤を適宜サンプリングし、フローテーション装置（0.42～1.00mm金属フルイ使用）で水洗した資料を分析対象として提供頂いた。

いずれの資料も擦文時代前期～中期に属すると考えられるかまどの火床の焼土や焼土遺構、炭化物の集中箇所、また土壤（ピット）から検出されている。

すべての資料は白色、一部は黒色に変色し、激しく収縮して変形・亀裂を生じており、高い熱が加えられたと考えられる。

第2節 出土動物遺存体の概要

第10表 K113遺跡北35条地点出土動物遺存体種名表

List of animal remains from the K113 site locality N35

硬骨魚綱	Osteichthyes
サケ科	<i>Salmonidae</i> sp. indet.
サケ属	<i>Oncorhynchus</i>
イワナ属	<i>Salvelinus</i>
ニシン亜科	<i>Clupea pallasii</i>
ニシン	<i>Clupia pallasii</i>
コイ科	<i>Cyprinidae</i>
ウゲイ科	<i>Tribolodon</i> sp. indet.
鳥 綱	Aves ordo indet.
哺乳綱	Mammalia ordo indet.

サケ科 サケ属・イワナ属（第11表、第12表、図版25）

検出された部位骨は椎骨片が最も多く、次いで犬歯状歯が多かった。担鱗骨や頭部骨は少量検出されたのみである。完形品について個数を集計する一方、破損品も含めた全資料について重量を集計した。

出土したサケ科は、現在の北海道に生息するアメマス（イワナ属）、オショロコマ（イワナ属）、サクラマス（サケ属）、カラフトマス（サケ属）、サケ（サケ属）、ギンザケ（サケ属）、マスノスケ（サケ属）、ヒメマス（サケ属）、イトウ（イトウ属）の部位骨である可能性が高い。

犬歯状歯や担鱗骨、頭部骨などは属レベルでの同定は困難であり、サケ科として一括集計した。椎骨は完全な形で検出されているものは殆どない上、イワナ属とサケ属では椎骨の特徴が類似して

第11表 K113遺跡北35条地点出土遺物遺存体（魚類）集計表

List of Pisces from the K113 site Locality N35

サンプル No.	遺構・ ブロック	層位 Layer	魚類																			
			サケ科 Salmonidae												椎骨 vertebra							
			イワナ属・サケ属・犬歯状歯 Canine-like teeth						不明(?)						状態 Condition		点数 N	重量 (g)	部位名 Part	L/R	点数 N	重量 (g)
			点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	点数 N	重量 (g)	L/R	Part						
022	H P-2	かまど	4	0.06	1	0.01	2	0.01	1	0.01	3	0.01	—	0.01	尾椎 破片 破片	M	1 — —	0.02 0.34 0.06	不明	—	—	0.38
008~ 011	H P-3	かまど	2	0.02											破片 破片	M M	— —	0.19 0.09	担鱗骨 担鱗骨 不明	M M —	2 2 —	0.02 0.01 0.69
0.3	H P-3 焼土 1	床																				
026	H P-3 焼土 4	床																				
027	H P-3 No.053	床													破片	M	—	0.09	不明	—	—	0.15
030 032	H P-4 焼土 1	床													— 0.01	破片		— 0.06	不明	—	—	0.04
028 029	H P-4 焼土 2	床	12	0.14	2	0.03	5	0.02	3	0.02	9	0.06	—	0.02	破片	M	—	0.28	不明	—	—	0.44
033	H P-4 C-1	床	3	0.03	1	0.01	1	0.01>	4	0.02	5	0.01	—	0.18	破片	M	—	0.27	不明	—	—	0.39
034	H P-4 pit1	床													破片	M	—	0.01	不明	—	—	0.01
001	F-2																		不明	—	—	0.01>
005	F-7		1	0.01			3	0.01	5	0.01	2	0.01	—	0.01	破片	M	—	0.19	担鱗骨 不明	M —	2 —	0.01 0.30
006	F-9																					
007	F-11																					

Pisces													魚類重量合計 (g)		
コイ科 Cyprinidae							ニシン科 Clupeinae			その他					
種類 Name	部位名 Part	L/R	点数 N	重量 (g)	種類 Name	部位名 Part	L/R	点数 N	重量 (g)	種類 Name	部位名 Part	L/R	点数 N	重量 (g)	
ウグイ属	歯骨	R	2	0.03	ニシン	腹椎	M	2	0.01	不明	尾椎	M	1	0.01>	4.65
ウグイ属	角骨	R	2	0.04	ニシン	翼耳骨	L	2	0.02	不明	尾椎	M	1	0.01	
ウグイ属	第1椎骨	M	1	0.01	ニシン	尾椎	M	3	0.03	不明	腹椎	M	1	0.01	
ウグイ属	基後頭骨	M	1	0.03						不明	肩甲骨	L	1	0.01	
ウグイ属	翼耳骨	L	1	0.08						不明	不明	—	—	3.08	
ウグイ属	上擬鎖骨	L	1	0.01											
ウグイ属	腹椎	M	1	0.01											
ウグイ属	方骨	R	1	0.02											
不明	腹椎	M	6	0.12											
不明	尾椎	M	2	0.05											
不明	舌頸骨	R	1	0.01											
不明	椎骨	M	—	0.15											
ウグイ属	方骨	L	4	0.04						スズキ目 不明	椎骨	M	1	0.01	5.91
ウグイ属	方骨	R	1	0.01						不明	—	—	3.44		
ウグイ属	擬鎖骨	R	2	0.10											
ウグイ属	角骨	L	4	0.06											
ウグイ属	角骨	R	2	0.05											
ウグイ属	歯骨	R	1	0.02											
ウグイ属	第1椎骨	M	3	0.02											
ウグイ属	第1椎骨	M	3	0.03											
ウグイ属	第2椎骨	M	5	0.06											
ウグイ属	第2椎骨	M	1	0.01											
ウグイ属	腹椎	M	7	0.10											
ウグイ属	尾舌骨	M	1	0.01											
ウグイ属	尾椎	M	1	0.03											
ウグイ属	下尾軸骨	M	1	0.01											
ウグイ属	主鰓蓋骨	R	1	0.01											
ウグイ属	胸鱗棘	R	1	0.03											
ウグイ属	胸鱗棘	L	1	0.03											
ウグイ属	尾部棒状骨	M	2	0.02											
不明	舌頸骨	R	2	0.02											
不明	担鱗骨	M	3	0.02											
不明	腹椎	M	9	0.07											
不明	腹椎	M	2	0.02											
不明	椎骨	M	—	0.34											
不明	椎骨	M	—	0.24											
不明	上舌骨	L	1	0.01											
不明	尾椎	M	1	0.01											
不明	尾椎	M	5	0.07											
										不明	不明	—	—	0.01>	0.01
										不明	不明	—	—	0.01>	0.01
不明	椎骨	M	—	0.01						不明	肋骨 軟条?	—	—	0.02	0.28
										不明	不明	—	—	0.01	0.12
										不明	軟条 歯?	—	—	0.01	1.05
										不明	軟条	—	—	0.02	0.94
															0.02
															0.01
										不明	軟条	—	—	0.02	0.57
										不明	不明	—	—	0.01>	0.01
										不明	不明	—	—	0.01	0.01

いることから、腹椎と尾椎を一括して集計し「イワナ属・サケ属」として一括して集計している。これらの椎骨には、体長50cm～1m近くなる大形の個体に由来するものが多く含まれている。これらは降海型サクラマス、カラフトマス、サケ、ギンザケ、マスノスケ、ヒメマスである可能性が高い。

北海道では、秋から初冬にかけて遡上するサケ科が量的に多いことから、これらのサケ科の捕獲季節の中心は秋であったと考えられる。

K 113遺跡北35条地点で検出された椎骨と歯、その他の部位骨の重量比をみると、顎骨を中心とした部位骨が多く出土している。

出土した総計69点の犬歯状歯は、現生標本と加藤（1985）、金子（1987）を参考にして前上顎歯、歯骨の吻端歯とその他に分類した。出土資料では左右の分類は困難であり、左右の総数を集計し、最小個体数を推定した（第12表）。これによると、一つの遺構につき最小個体数はほぼ一体であり、総計では5個体分が検出された。

ニシン（第11表、図版25）

北日本に広く分布する。北海道では3～6月近くに来遊し、水深15m以浅の岩盤または砂地の海藻の繁茂した場所に産卵する。魚体は1年で15cm、2年で22cm、5年で30cm、12年で36cm程になる（益田他1984）。小形の個体は、周年接岸する生態を持つものであり、年間を通して捕獲された可能性があるが、成魚は回遊する生態を持つことから春に捕獲された可能性が高い。

第2号竪穴住居跡かまどからまとまって椎骨と翼耳骨が検出されている。

ウグイ属（第11表、図版25）

本属に同定した骨格は、現在北海道で生息しているウグイ *T. hakonensis* (Günther) と、マルタウグイ *T. taczanowskii* (Steindachner) やエゾウグイ *T. ezoae* okada et Ikeda, ヤチウグイ *Phoxinus percnurus sachalinensis* が含まれている可能性がある。

ウグイ一種にも降海型と淡水型があるように、本属の生息環境は広く、河川上流から河口部、湖沼、沿岸域にまで達する。冬は浅所の中層に群集し、極寒気には物陰に潜んで越冬する。食性は雑食性である（中村1968）。産卵期はいずれも3～7月であり、河川の浅瀬に群来する「のっこみ」をみせる。この時期には多獲することが容易で、K 113遺跡北35条地点の第2号竪穴住居跡かまどや第3号竪穴住居跡かまどで検出された多量のウグイ属は、この時期に集中して捕獲・処理された可能性が高いであろう。

鳥 級（第13表、図版25）

第2号竪穴住居跡かまどや第3号竪穴住居跡かまど、F 13・18から検出されており、いずれも小形から中形鳥類の部位骨と考えられる。いずれも破片で、科・属・種の特定は困難であった。

哺乳綱（第13表、図版25）

小形から中形の哺乳類に由来すると考えられる部位骨が第2号竪穴住居跡かまどと、第3号竪穴住居跡かまどから検出されているが、種は特定できなかった。

第12表 サケ科犬歯状歯による最小個体数

MNI of salmonnidae based on Canine-like teeth

遺構・ブロック	層位 Layer	A タイプ算定	B タイプ算定
H P-2	かまど	1	1
H P-3	かまど	1	0
H P-4	焼土2	1	1
H P-4 C-1	床	1	1
F-7		1	0
合 計		5	3

第13表 K113遺跡北35条地点出土動物遺存体（鳥類・哺乳類）集計表

List of Aves and Mammals from K113 site Locality N35

サンプル No.	遺構・ ブロック	層位 Layer	鳥類 Aves				哺乳類 Mammalia					
			種名 Name	部位名 Part	L/R	部分 Portion	重量 (g)	種名 Name	部位名 Part	L/R	部分 Portion	重量 (g)
022	H P-2	かまど	不明	不明	—	不明	0.01	不明 中～小形 不明	不明 不明	—	不明 不明	0.36 0.06
010～011	H P-3	かまど	不明	不明	—	不明	0.03	不明	不明	—	不明	0.06
012	F-13		不明	不明	—	不明	0.01<					
016	F-18		不明	不明	—	不明	0.01<					

第3節 K113遺跡北35条地点における動物遺存体の出土状況

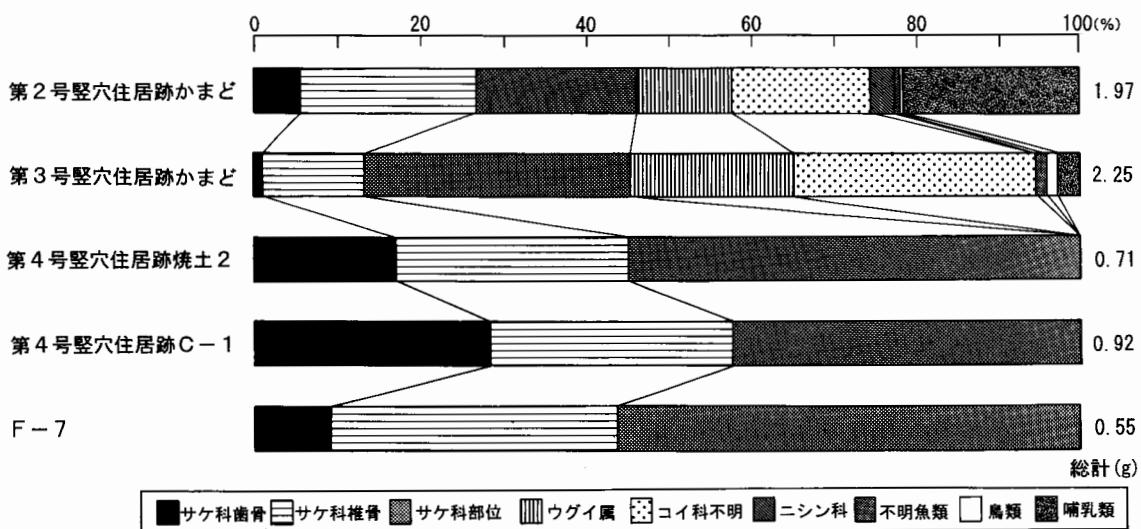
サンプル量の確保できた遺構ごとに出土資料の重量を集計して比較をおこなった。

サケ科はいずれの遺構にも含まれているが、特に第4号竪穴住居跡焼土2とC-1、さらに焼土遺構F-7で高率に検出されている。これらは、サケ科魚類の処理・廃棄・遺棄が専らおこなわれていた事を示している。

第3号竪穴住居跡かまどや第2号竪穴住居跡かまどの場合はサケ科もウグイ属も含んでおり、春から夏あるいは秋にかけて長期間利用された遺構であった事を示している。特に第3号竪穴住居跡かまどにおいてウグイ属がサケよりも明らかに卓越して出土する様相は、本遺跡でウグイ属の持つ重要性が高かったことをうかがわせる。

鳥類の出土量は極めて低い。哺乳類も第2号竪穴住居跡かまどと第3号竪穴住居跡かまどから若干出土しているが、5～20%程と決して高率ではない。H317遺跡では擦文時代のかまどでの出土量が高かったが、本遺跡でも第2号竪穴住居跡かまどからの出土量が卓越しており、竪穴住居内での哺乳類処理の機会が高かった事がうかがわれる。

以上のように動物遺存体の内容は時代、遺構によって異なっており、遺構に対して行われた人間活動の差が動物遺存体の内容に影響したことが明らかである。



第29図 K113遺跡北35条地点出土動物遺存体遺構別種組成

Per centage of animal remains based on weight

K113 site Locality 25

第4節 K113遺跡北35条地点における狩猟・漁撈活動

K113遺跡北35条地点では盛んに石狩川、豊平川とそれらの後背湿地を利用し、淡水から汽水に入り込む魚種を多獲していた。

漁期は、大形のサケ科は秋を中心とし、ウグイ属は「のっこみ」を利用したとすれば春を中心とする事から、これらを長期間有効に利用するには保存食料に加工することが必要である。

民俗例で多くの加工保存技術が知られているサケ科の保存処理方法としては、①魚肉の水分を減らしたり薰製にして腐りにくくする乾燥保存の方法、②塩漬けにする方法、③発酵食品にする方法、④冬季に冷凍して保存する方法、があげられる。本遺跡でみられた焼土をともなう土壌は①の方法のためつくられた可能性が高いであろう。

このような保存食料は収穫物が少ない季節、特に冬から初春や夏での生活を維持するために重要な役割を果たしたことが推定される。これらは、刺突漁や網漁、罠漁で多く捕獲されていた事が考えられる。

また、ニシンや小形のウグイ属のように比較的小さい魚種は、細かい網や小規模な罠を使った漁撈方法で捕獲されたことが考えられる。

K113遺跡北35条地点では鳥類・哺乳類とも出土量が少なく、狩猟活動が低調であった事がうかがわれる。

擦文時代の遺跡にはK441遺跡北33条地点（金子 1989a）やH317遺跡3層（富岡 1995）のようにエゾシカなどの哺乳類が多く出土する遺跡があるが、一方でK441遺跡北34条地点（金子 1989b）などに魚骨の出土量が卓越する遺跡も存在する。

K113遺跡北35条地点の場合は、後者の遺跡と同様に漁業—特に河川漁—を積極的に営んだ遺跡であったといえる。特にウグイ漁の卓越は本遺跡での生業を特徴づけるものである。

参考文献

加藤暁生 1985 「前田耕地遺跡出土の魚類頸歯について」『東京の遺跡』 7 : pp.84-85

- 金子浩昌 1987 「Ⅳ動植物遺存体 第1章K135遺跡の脊椎動物遺存体」「K135遺跡4丁目地点, 5丁目地点」札幌市文化財調査報告書XXX（札幌市教育委員会）
- 金子浩昌 1992 「第5章 動植物遺存体 第1節N426遺跡出土の動物遺存体」「N426遺跡」札幌市文化財調査報告書XL I（札幌市教育委員会）
- 金子浩昌 1989 a 「第4章 動植物遺存体 第1節K441遺跡北33条地点出土の脊椎動物遺体」「K441遺跡北33条地点 N12遺跡」札幌市文化財報告書XXX VI（札幌市教育委員会）
- 金子浩昌 1989 b 「第6章 動植物遺存体 第1節K441遺跡北34条地点出土の脊椎動物遺存体」「K441遺跡北34地点」札幌市文化財調査報告書XXX VII（札幌市教育委員会）
- 金子浩昌 1993 「V 動植物遺存体 第1章北海道札幌市K435遺跡検出の魚・鳥・獣類遺体」「K435遺跡」札幌市文化財調査報告書XL II（札幌市教育委員会）
- 高山 肇 1992 「イトヨの採集と飼育の方法」「札幌市豊平川さけ科学館報」3. 4合併号：pp 72-79
- 富岡直人 1995 「H317遺跡出土動植物遺存体および鹿角製尖頭器について」「H317遺跡」（札幌市教育委員会：札幌市文化財調査報告書46）：pp. 215-237
- 益田 一, 尼岡邦夫, 荒賀忠一, 上野輝彌, 吉野哲夫 1984 「日本産魚類大図鑑」（東海大学出版会）
- Norden, c. 1961 'Comparative Osteology of Representative Salmonid Fishes, with Particular Reference to the Grayling (*Thymallus arcticus*) and its Phylogeny' "Journal of Fish 18-5 : pp. 679-791
- Ryder, M. L. 1969 'Remains of fishes and other Aquatic Animals' "Science in Archaeology (second edition)" : pp. 376-394

第8章 札幌市K113遺跡北35条地点出土の炭化植物種子

吉崎 昌一・椿坂 恭代

I : 扱った遺跡

- | | |
|---------|-----------------------|
| ①遺跡の名称 | 札幌市K113遺跡北35条地点 |
| ②遺跡の所在 | 札幌市北区北35条西6・7丁目 |
| ③発掘調査機関 | 札幌市埋蔵文化財センター |
| ④調査担当者 | 札幌市埋蔵文化財センター 加藤邦雄 |
| ⑤発掘調査時期 | 平成6年6月1日～平成6年9月30日 |
| ⑥遺跡の性格 | 擦文時代の集落 |
| ⑦遺跡の年代 | 9世紀前半～10世紀中頃（土器形式による） |

II : 検出された植物種子

本項では、堅穴住居、焼土などから採取された土壌をフローテーション法で処理して得られた炭化植物種子について報告する。出土した炭化植物種子の種類、それらが得られた発掘グリッドの位置、層準などを一括して第14表に示した。検出された種子は総数で133粒、このうち栽培植物種子が20粒ほど含まれている。ほかに堅果類内果皮碎片が約2グラム、同定の難しかった種子が5粒あった。まず、栽培植物から述べよう。アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版26-1) が第4号住居の床面焼土から2粒出土した。加熱のため保存はあまり良くない。キビ *Panicum miliaceum* L. は総数で13粒出土しているが、そのうち4粒がアワの検出された第4号住居床面から検出されている。その多くは図版26-1に示したように過度の加熱のため内部のデンプン粒が膨出し変形している。

注目したいのはソバ *Fagopyrum esculentum* Moench. (図版26-3) である。わずか1粒ではあったが、アワ、キビの出土した第4号堅穴住居の床面から検出された。加熱による変形のため三稜であるのか四稜であるのか判然としないが、三稜である可能性が高い様に観察される。北海道で検出されたソバ瘦果の現物は、縄文時代も含めてこれが5例目である。

アサ *Cannabis sativa* L. は破片を含めて4粒 (図版26-4)、第4号住居床面から得られている。

雑草類としては、ナス科 SOLANACEAE の種子が、第4号住居床面から検出されている (図版26-5a, 5b)。種子の粒形と5bに示したような表面構造が観察できたので、ホオズキ属 *PHYSALIS* L. と考えられるが、明確ではない。

タデ属 *POLYGONUM* L. は71粒ともっと多かった (図版27-6)。タデ属の瘦果は種類が多く、明確に種を同定できるものが少ない。各グリッドから散漫に出土している。

カヤツリグサ科 CYPERACEAE の種子が1粒検出されているが、形態から見てホタルイ属 *SCIRPUS* L. ではないか、と思われる (図版27-7)。

マタタビ属 *ACTINIDIA* Lindl. は第3号住居床面から2粒出土 (図版27-8)。長卵形の形態を持ち、表面に特有のあばた条構造が認められる。

ニワトコ属 *SAMBUCUS* の種子はタデ属について多く31粒検出されている (図版27-9)。グリッド09-01, 10-03の両区から21粒、ほかの各グリッドからは1～2粒づつ散漫に出土した。ゆがんだ長卵形で表面に特有の凹凸が認められる。陽樹であり、液果が大量に生産されるが、人間との関わりについては、まだ、はっきりしない部分が多い。夏に赤く熟する液果は鳥が食べるが、種類によっては人間が食することもあるという。

一部破損しているがカボチャ状の形態を持つミズキ属 *CORNUS* L. 核果が1粒, 09-03, 09-04にまたがる焼土から検出されている(図版27-10)。果実は食用にはなるが美味とはいえないらしい。

クルミ属 *JUGLANS* L. 内果皮碎片が散漫に出土しており、拾い上げられたものが1.94グラムあった(図版27-11 a, 11 b)。以上のほかに同定のできなかった種子が総計で5粒あった。

第14表 K113遺跡北35條地點出土炭化種子表

第9章 木製品の保存処理および樹種同定

財北海道埋蔵文化財センター資料調査課 田口 尚
岡本育子

第1節 K113遺跡北35条地点出土木製品の樹種同定および保存処理について

1 はじめに

遺跡から発見される木製品（水漬出土材）は、微生物（腐朽菌）によって細胞組織が分解され脆弱となり、本来の性質を失っている。これは主成分であるセルロースやヘミセルロースを構成する多糖類が分解され、著しく減少した結果である。出土木製品の組織の隙間は土壌中の過剰な水分によって補われ、なんとか当時の形状を保っている状態である。そのまま乾燥すると著しい収縮と分解が起こり、文化財としての価値を失うことになる。これを防止するためには、遺物の形状を保ちながら含有水分を安定した物質に置き換えることや、組織の隙間を強化したり、強制的に水分を除去する保存処理が必要となる。その処理方法の選択には木製品の現状把握が重要であり、充分な観察の後、写真撮影および樹種同定を行う必要がある。写真撮影は現状の形態や劣化状況を記録するとともに、処理後の形状変化や色調変化の確認のほか、修復時の参考資料となる。樹種同定は樹種選択や環境復元のみならず、木製品の内部組織の劣化状況を知るために必要な作業のひとつである。

今回処理した木製品は、擦文時代の2軒の住居跡HP1, HP4から出土した柱根、加工材片および樹皮等である。これらは発掘調査後、札幌市埋蔵文化財センターにおいてコンテナ内に水漬状態で保管されていたものである。保存処理対象の木製品には当方で遺構別にNo.1~7の試料番号を付し、樹種同定及び保存処理を実施した（表-1）。以下に処理方法の概略を述べる。

2 保存処理方法

処理方法は木製品の劣化状態や形状から、以下のふたつの処理方法を選択した。

① **PEG含浸法**：水に可溶で、科学的に安定したロウ状の高分子物質のポリエチレングリコール（PEG4000）を使用する方法である。この水溶液に木製品を浸し、加熱保温（約65℃）しながら徐々に濃度を上げ、最終的に木製品中の水分を100%PEGに置き換えて形状を維持させる一般的な処理方法である。世界的に定着した方法であり、国内の多くの文化財機関で採用している。比較的に簡単な装置で処理が可能であり、十分な強度を得ることができる。しかし、処理が長期間にわたること、重量が増加する、高温・高湿度環境では溶解する、黒色化する等の問題点もある。また、最近では長期間にわたる加熱状態の継続による溶液の酸化分解が指摘され、機器の腐食や遺物への影響が懸念されている。

② **Mannitol+PEG+真空凍結乾燥法**：水に可溶な科学的に極めて安定した物質であるMannitolとPEG4000に順次、木製品を浸し、真空凍結乾燥機を用いて氷結した木材内部の水分を高真空状態で昇華させる最新の処理方法である。組織に残留したMannitolの結晶が木材を強化し、PEGがその隙間を埋めて木製品の形状を維持する方法である。Mannitolとは植物の分泌液であるマンナの主成分として、アルコール抽出液から得られる糖アルコールである。常温では針状や斜方状の結晶であり、吸湿性が少ない上に空気中で変質する恐れがない。工業的には食品添加物（チュウイントガムや飴類の粘着防止剤）、医薬品として使用されている。この方法は処理期間を大幅に短縮でき、重量も軽く、色調の変化も少い。炭化部分や彫刻などのある製品では加工・色変化がより鮮明となる。

そのため、この方法を採用する機関が増えつつある。しかし、強度があまりないため小型の木製品処理には向くが、重量バランスの悪い木製品や大型の木製品については、処理後の移動や取扱いに細心の注意が必要である等の問題点もある。広く採用されているPEG含浸法に比べ、経年変化等のデータがまだ充分ではない。

3 作業工程

- I 遺物受入れ 試料番号付。遺物の現状観察。付着物、沈着物のクリーニング。
- II 処理計画作成 処理方法の決定
- III 処理前写真撮影 形態や表面の劣化状況を記録。
- IV 樹種同定 樹種同定、内部の劣化状況の調査。
- V 前処理作業 界面活性剤（EDTA）の1%溶液に浸漬。
- VI クリーニング 界面活性剤（EDTA）を流水により洗浄。
- VII-① PEG含浸法による作業工程（試料No.5～7）
PEG含浸槽浸漬→PEG20%～40%～60%～80%～100%→乾燥→クリーニング（通常約1年間以上）

- ① PEG 20%～② PEG 40%～③ PEG 60%～④ PEG 80%～⑤ PEG 86%で遺物取り出し（沈着物などの溶脱により、濃度飽和状態）⑥拭き取り⑦乾燥⑧析出したPEGをクリーニング
⑨ホウ酸+ホウ砂の析出確認（35%前後の段階でpH下降のため投入したもの）⑩再クリーニング。

VII-② Mannitol+PEG+真空凍結乾燥法による処理工程（試料No.1～4）

Mannitol20%浸漬→PEG40%浸漬→予備凍結→真空凍結乾燥→クリーニング（今回は約2～3か月）

- ① Mannitol 20%（7日）②拭き取り③ PEG 40%（10日）④拭き取り⑤予備凍結（-40℃以下）
⑥真空凍結乾燥開始⑦析出したMannitolとPEGをクリーニング。

- VIII 接合、修復 セメダインC、エポキシ樹脂+フェノール樹脂マイクロバルーン。
- IX 処理後写真撮影 形態変化・表面の状況・色調変化を記録。
- X 収納・梱包作業 不織布で養生後、コンテナ、シール容器に梱包。
- XI 遺物引渡し 添付書類①処理後、処理前写真（M67, R67, R35）②処理工程資料③樹種同定試料（同定結果報告、顕微鏡写真M35）。
- XII 経過観察 札幌市埋蔵文化財センターで保管・管理。

4 注意事項

- ① Mannitol+PEG+真空凍結乾燥法によるもの（試料No.1～4）は、水分を避ける。濡れた手や汗の付いた手で触れだけでも褐色のシミになるので注意すること。
- ② PEG含浸法によるもの（試料No.5～7）は、充分に乾燥していない可能性があるので自然乾燥を続けること。（再度ホウ酸+ホウ砂が析出する可能性もある）
- ③ 処理後遺物は時々、経過観察を行うこと。湿気を避け、恒温恒湿にて保管することが望ましい。

表-1

試料No.	遺構番号	木製品の状態	樹種名	保存処理法	備考
1	H P 4 柱穴 1 W-2	木端 2 点接合, 割板材, 切裁・加工痕顯著。	ハンノキ属	マンニ+PEG+真空凍結乾燥法	シール容器
2	H P 4 柱穴 2	木端大小 3 点, 割材, 切裁・加工痕顯著。	ハンノキ属	マンニ+PEG+真空凍結乾燥法	シール容器
3	H P 4 柱穴 1 W-1	板材征目取り,	ニレ属	マンニ+PEG+真空凍結乾燥法	シール容器
4	H P 1 柱穴 3	木質細片・樹皮細片。	ハンノキ属	マンニ+PEG+真空凍結乾燥法	写真無, シール容器
5	H P 1 柱穴 1	柱銀, 丸木材, 上部脆弱, 先端切裁痕顯著。一部樹皮残存。	ハンノキ属	PEG含浸法	コンテナ収納
6	H P 1 柱穴 4	柱銀, 丸木材, 全体脆弱, 先端一部切裁痕あり。	ハンノキ属	PEG含浸法	コンテナ収納
7	H P 1 柱穴 2	柱銀, 丸木材, 上部脆弱, 先端切裁痕顯著。樹皮残存。	ハンノキ属	PEG含浸法	コンテナ収納

第2節 樹種同定について

1 試料について

樹種同定は農林水産省森林総合研究所平川泰彦氏の指導のもとで行った。試料は充分な水洗の後, 木口, 柱目, 板目の 3 断面を両刃カミソリを用いて切片(薄片)として採取した。採取した切片は試料番号ごとにガムクロラールで封入し, プレパラートを作成した。同定作業には光学顕微鏡(ニコンラボフォト 2)を使用した。同定の結果は以下のとおりである。(表-2 参照)

2 識別結果

7 点の試料はすべて広葉樹であり, 2 科 2 属が確認された。

ハンノキ属 (試料 No. 1. 2. 4. 5. 6. 7)

散孔材である。道管は 2~数個で放射複合管孔をなしている。放射組織は単列かつ同性放射組織であり, 集合放射組織を形成する。道管要素は階段せん孔をもち, らせん肥厚は存在しない。

樹種としては, ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ等が推定される。

ニレ属 (試料 NO. 3)

環孔材である。孔圈部の道管は 2~3 列となり, 孔圈外では多数の小道管が接合して集合管孔を形成し, 花束状, 斜線状に, 接線方向にかなり規則的に配列する。放射組織は 1~7 細胞幅である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管の側壁には交互壁孔が存在し, 内壁にはらせん肥厚が存在する。

樹種としては, ハルニレ, オヒョウが推定される。

3 考察

ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキは陽樹であり, 湿潤で肥沃な土壤を好み, 河川流域や湖畔などに群生するが多く, 生長が早い。材は現在でも建築材(床柱, 梁など)や土木材(杭, 土留板など)に利用されることから, 遺跡周辺に群生していたものを伐採し, 柱や構築材として用いたと推測される。ただし, アイヌ語ではケネ(血の木)と呼ばれ, 補血強壮剤や赤褐色の染料として用いられていた。弱く腐りやすい木とされることから薬剤や染料としての使用も考えられる。

ハルニレ, オヒョウはやや陽性を帯び, 適潤あるいはやや湿気のある土壤を好む。オヒョウは谷あいまたは緩傾斜面に多く生育する。ハルニレは建築材(板など)や器具材(家具, 斧の柄など)に利用される。アイヌ語ではチキサニ(火をつくる木)と呼ばれ, 発火具として利用された。樹皮はオヒョウやシナノキとともに織物の材料にもされた。オヒョウは器具材(挽物細工など), 繩や編み物として利用される。アイヌ語ではアッニ(紐をとる木)と呼ばれ, 樹皮繊維で布を織って着物を作った。出土遺物は板状に加工されていることから, 用材の木端またはヒキリ棒やヒキリ板などの発火具原材とも考えられる。

表-2

試料No.	遺構番号	科名	属名	推定される樹種
1	H P 4 柱穴1 W-2	カバノキ Betulaceae	ハンノキ <i>Alnus</i>	ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ
2	H P 4 柱穴2	カバノキ Betulaceae	ハンノキ <i>Alnus</i>	ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ
3	H P 4 柱穴1 W-1	ニレ Ulmeceae	ニレ <i>Ulnus</i>	ハルニレ, オヒヨウ
4	H P 1 柱穴3	カバノキ Betulaceae	ハンノキ <i>Alnus</i>	ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ
5	H P 1 柱穴1	カバノキ Betulaceae	ハンノキ <i>Alnus</i>	ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ
6	H P 1 柱穴4	カバノキ Betulaceae	ハンノキ <i>Alnus</i>	ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ
7	H P 1 柱穴2	カバノキ Betulaceae	ハンノキ <i>Alnus</i>	ハンノキ(ヤチハンノキ), ケヤマハンノキ

第10章 まとめ

本遺跡の発掘調査では4軒の竪穴住居跡と18カ所の焼土、2カ所の炭化物の広がりが発見された。本地域は畑の耕作やその後の自動車運転教習所の造成により、浅い遺物包含層はかなり搅乱を受けていた。

4軒の竪穴住居跡のうち、第1号住居跡からは土器が全く出土しなかった。他の3軒の出土土器に関する秋山の検討結果では第3、4号竪穴住居床面出土土器は前期前半から後半に属し、第2号竪穴住居床面出土土器は中期後半に属するという。床面から時間幅を持つ土器が発見される事実に関し、民族学的事例の検討をとおして解釈しようと試みている。第1号竪穴住居跡は、その構築年代を決定するにいたる資料が全く発見されていない。

第1号竪穴住居跡からは柱根がかなり良好な状態で出土し、第4号竪穴住居跡からは主柱の根固めに使われたと思われる加工痕のある木片の出土も注目される。

焼土群と竪穴住居跡の時間的前後関係を明らかにする資料としては、第4号住居跡床面出土土器とF-1が形成された層の下層から出土した土器が接合することから、F-1が新しく形成されたことが確認できた。また、第2号竪穴住居跡床面出土須恵器片が、09-04区の地割れの中からF-18の焼土に乗って陥没した状態で出土した大型破片と接合したことから両者が同一時代であるか、あるいはF-18の方がわずかに古い時代の形成であると考えることもできる。

焼土群のなかでも竪穴住居跡の煙道部に形成される焼土は、旧琴似川流域の他の集落でも同様なあり方が見られるものである。

その他の焼土と竪穴住居跡群の関係では、竪穴住居跡群が河川沿いに構築され焼土群はその後背地に位置している。この関係から見ると後背地での作業にともなう焼土群と見ることが可能である。しかし、焼土群から発見された炭化種子のうち栽培種子の発見が極めて少ないため、農耕にともなう作業により形成されたとする積極的な結論は得られない。

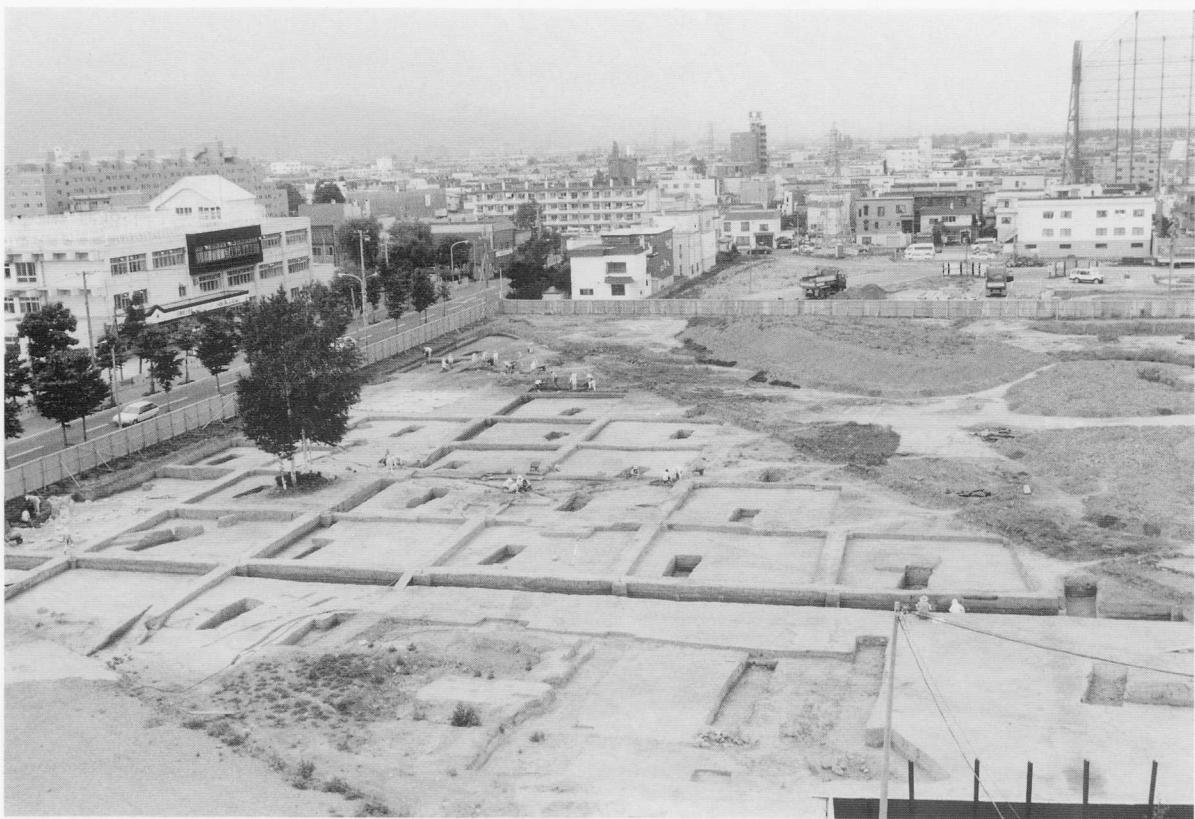
動物遺存体や炭化種子の分析については、各執筆者による詳細な報告があるがウグイ漁の卓越性、第4号竪穴住居跡からの数例の少ないソバ属の種子の発見等特筆すべきものがある。

図 版

縮 尺 土器・礫石器・柱根（約3分の1）
炭化種子・木製品樹種（図版に記載）



K113遺跡北35条地点付近空中写真 (1 : 10,000)
(△印発掘地点, ○印北34条地点, 平成4年5月31日(株)シン技術コンサル撮影)



A K 113遺跡北35条地点全景（南東より）



B K 113遺跡北35条地点発掘状況（南東より）



A K113遺跡北35条地点 (11-03区南北壁セクション 南より)



B K113遺跡北35条地点 (11-06区南北壁地割れ 南東より)



A K113遺跡北35条地点 (11-03区東西壁セクション 北より)



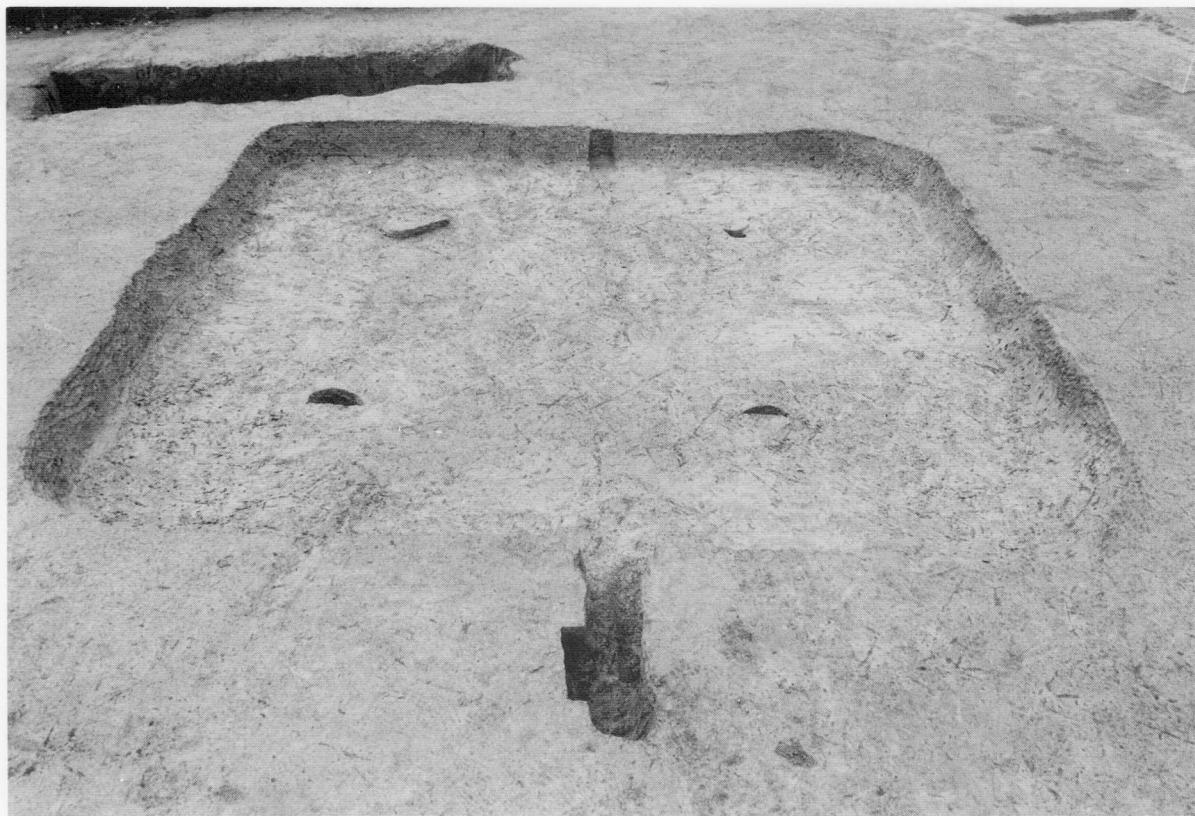
B K113遺跡北35条地点 (10-03区東西壁セクション 北より)



A K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡発見状態（北東より）



B K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡炭化物出土状態（北東より）



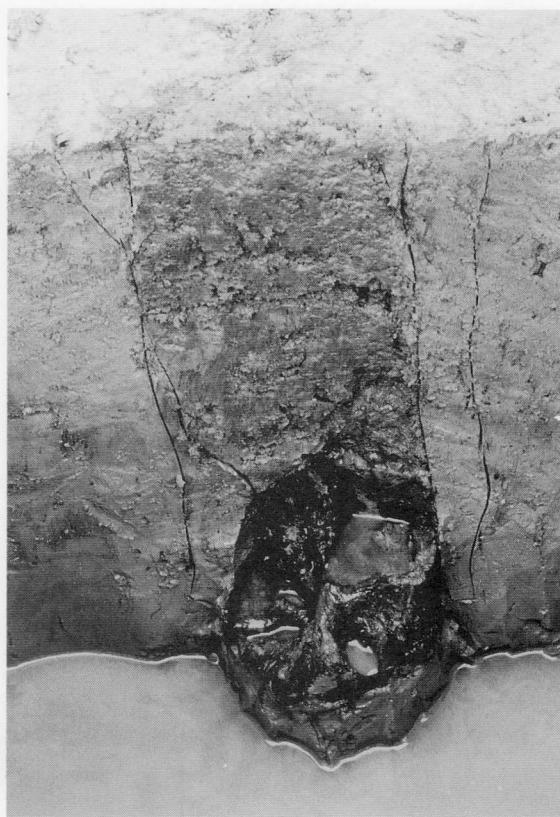
A K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡（北東より）



B K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡かまど（南西より）



A K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴1 断面(右), 完掘(左)(南西より)



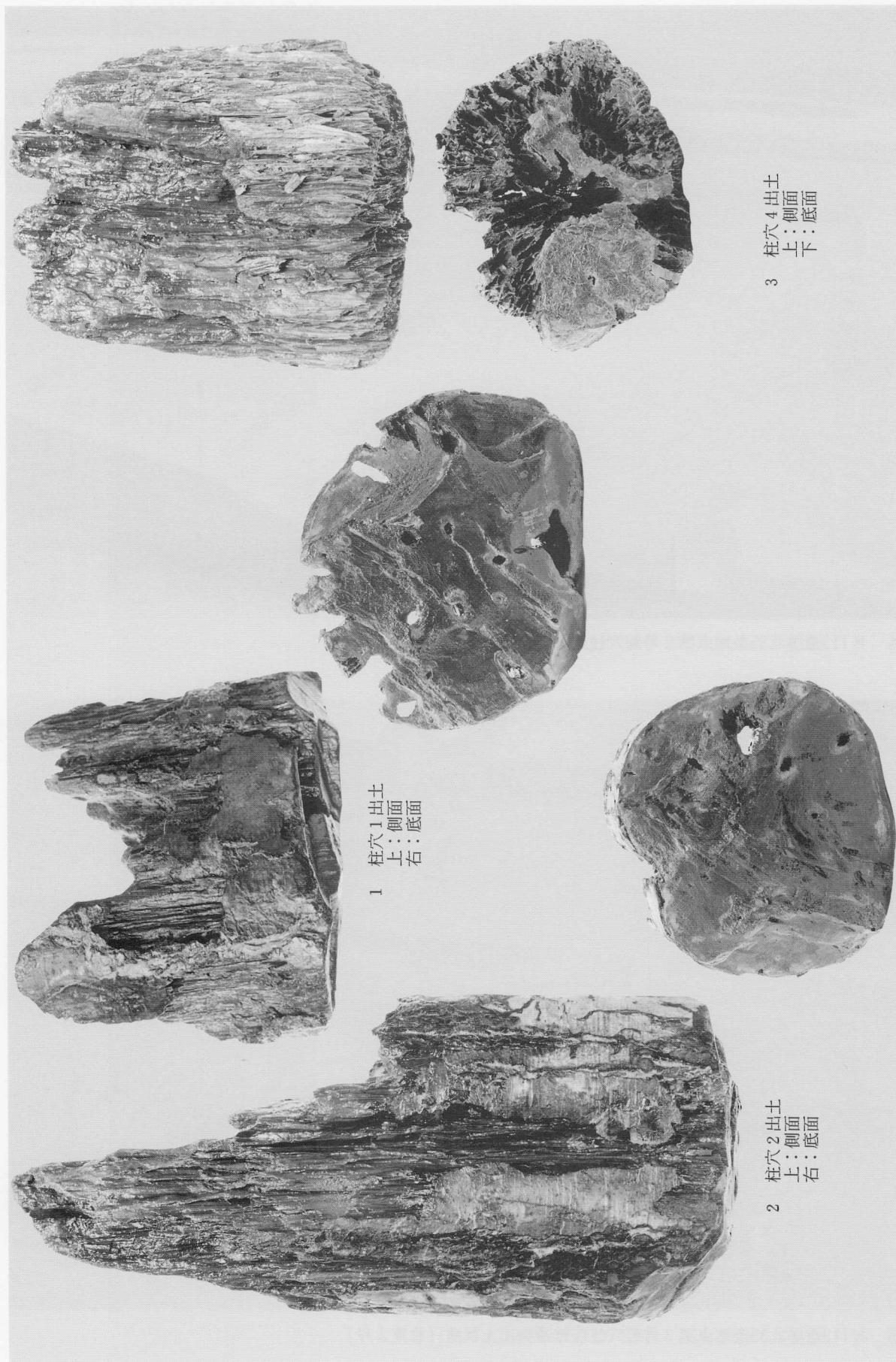
B K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴2 断面(右), 完掘(左)(南西より)



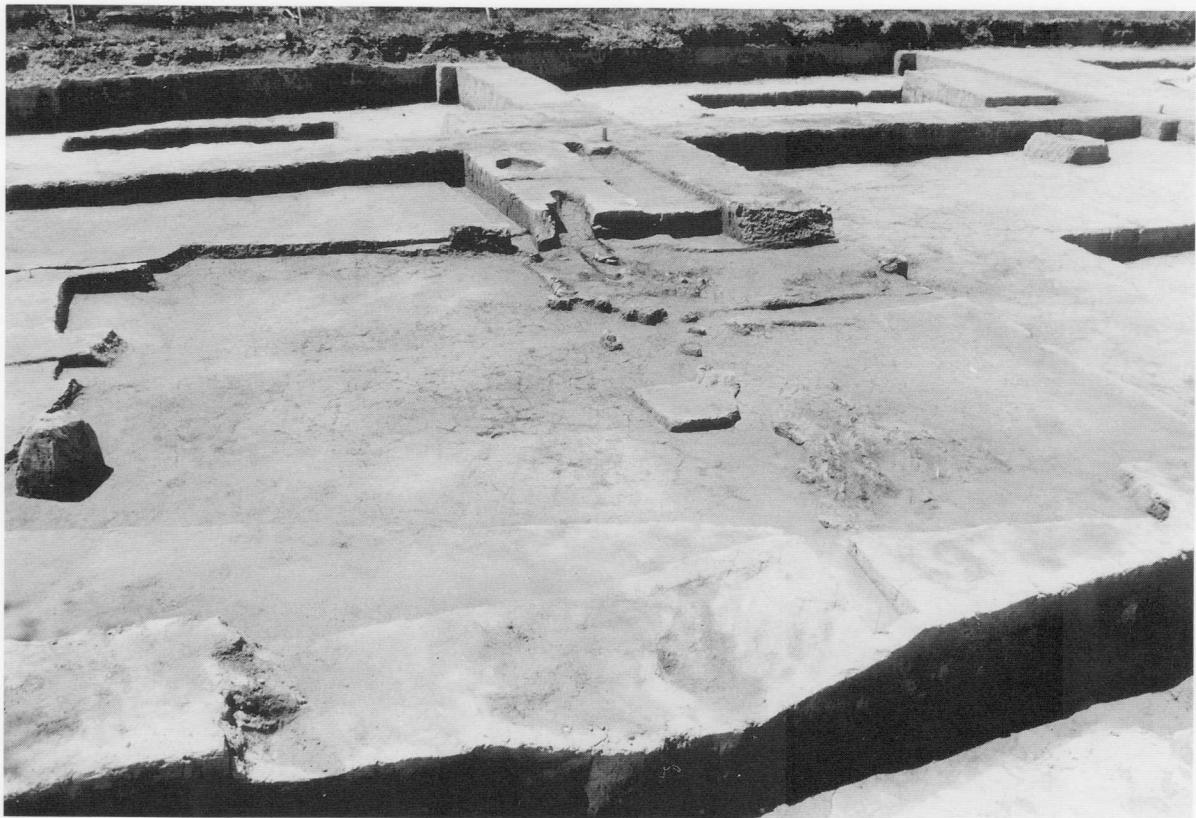
A K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴3 断面(右), 完掘(左)(南西より)



B K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡柱穴4 断面(右), 完掘(左)(南西より)



K113遺跡北35条地点第1号竪穴住居跡出土柱根（約3分の1）



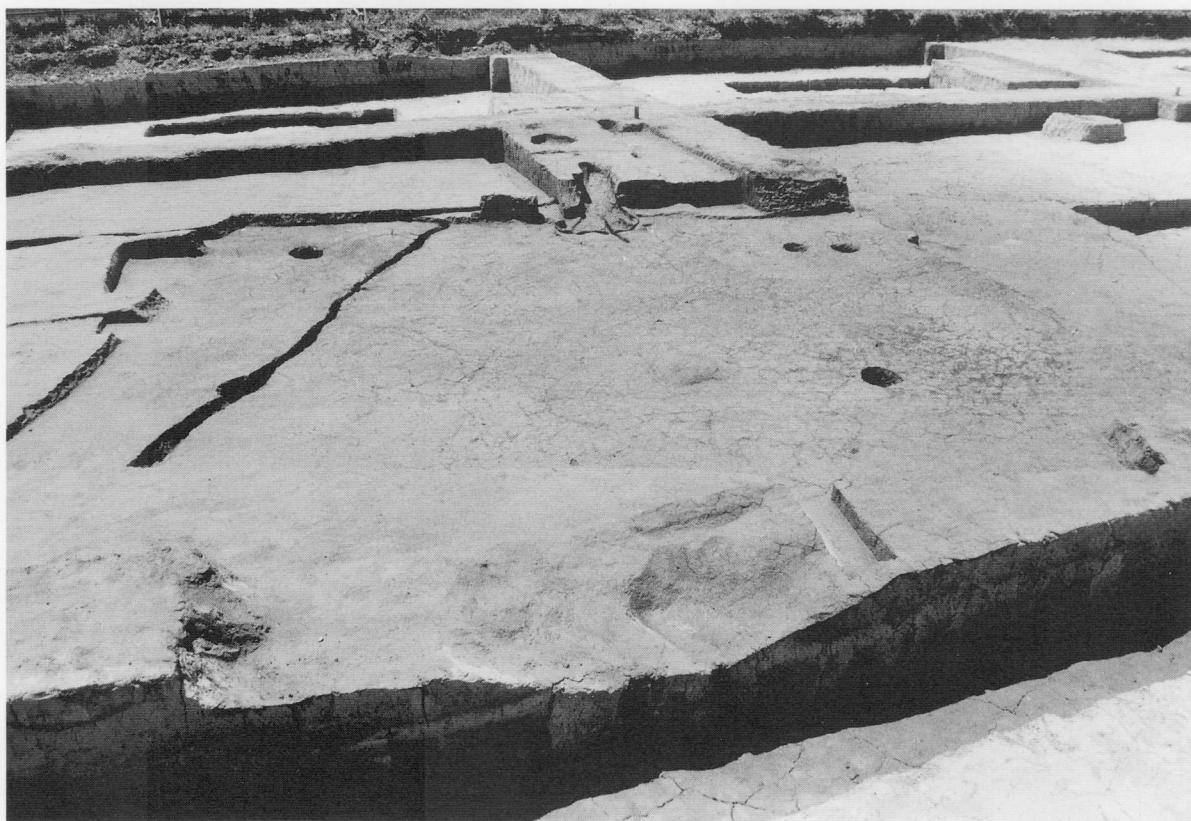
A K 113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡（北東より）



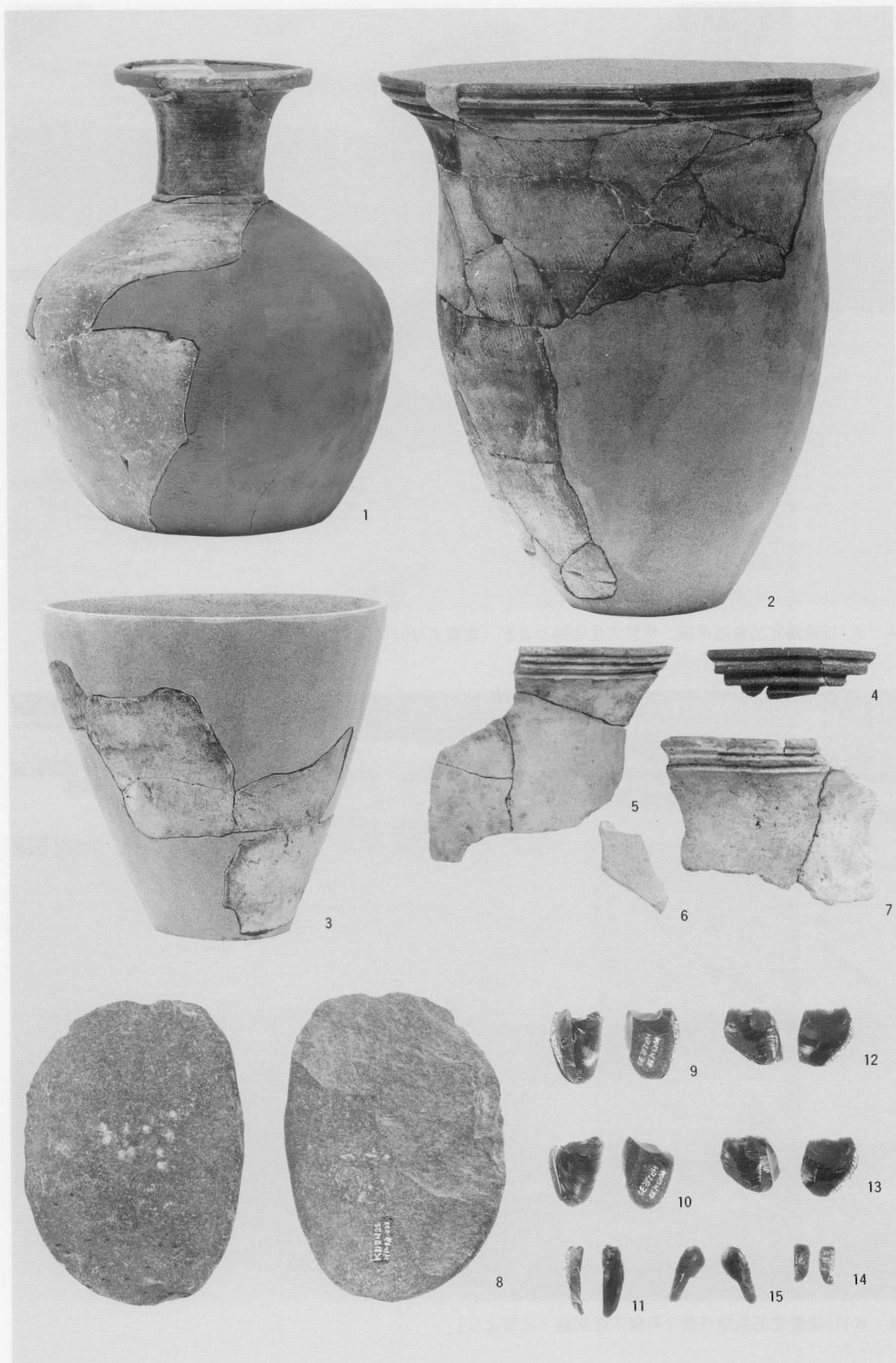
B K 113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡遺物出土状態（北東より）



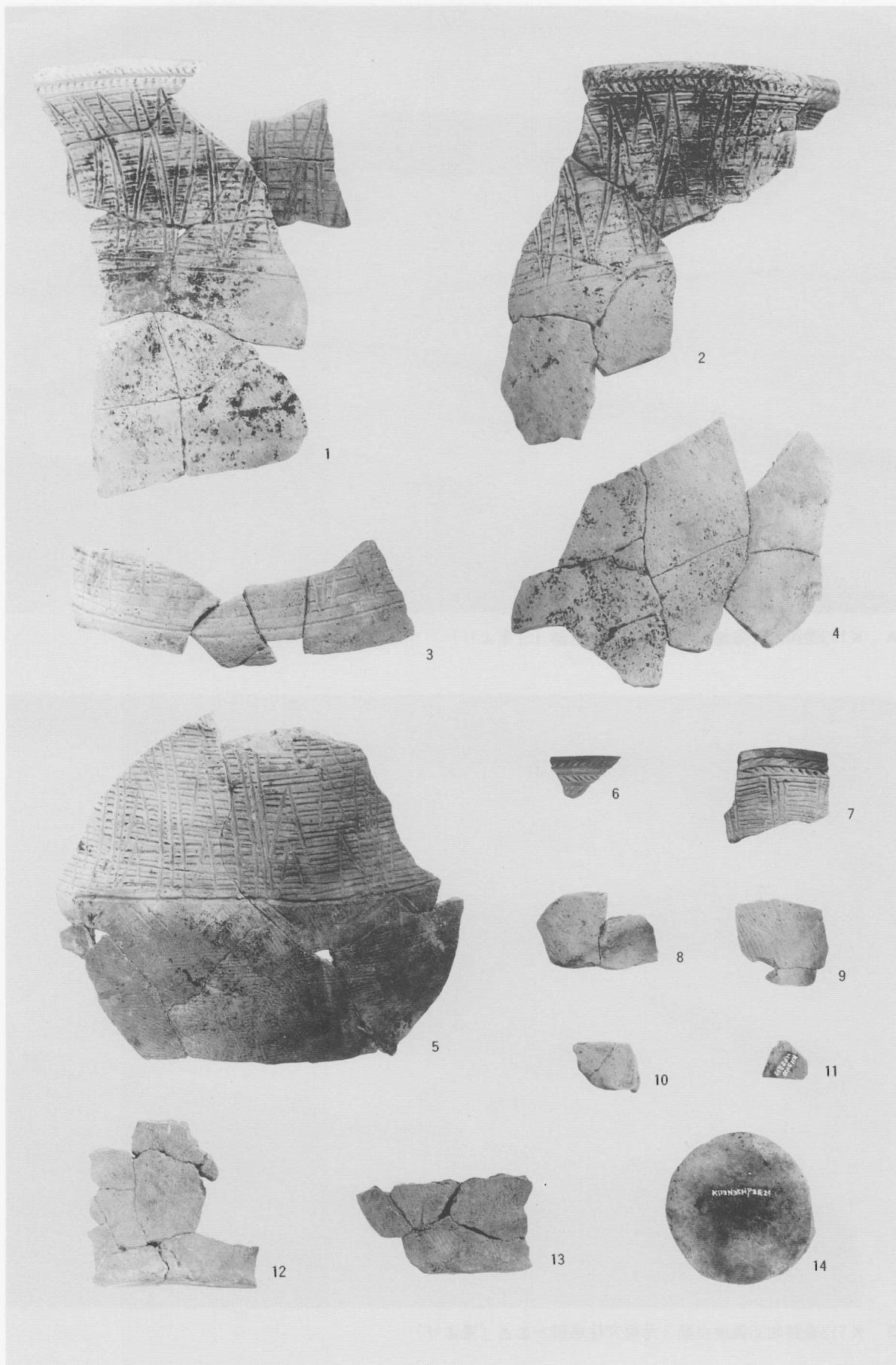
A K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡かまど（北東より）



B K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡（北東より）



K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(1) (9は10, 11, 12は13, 14の接合)
100



K113遺跡北35条地点第2号竪穴住居跡出土遺物(2)



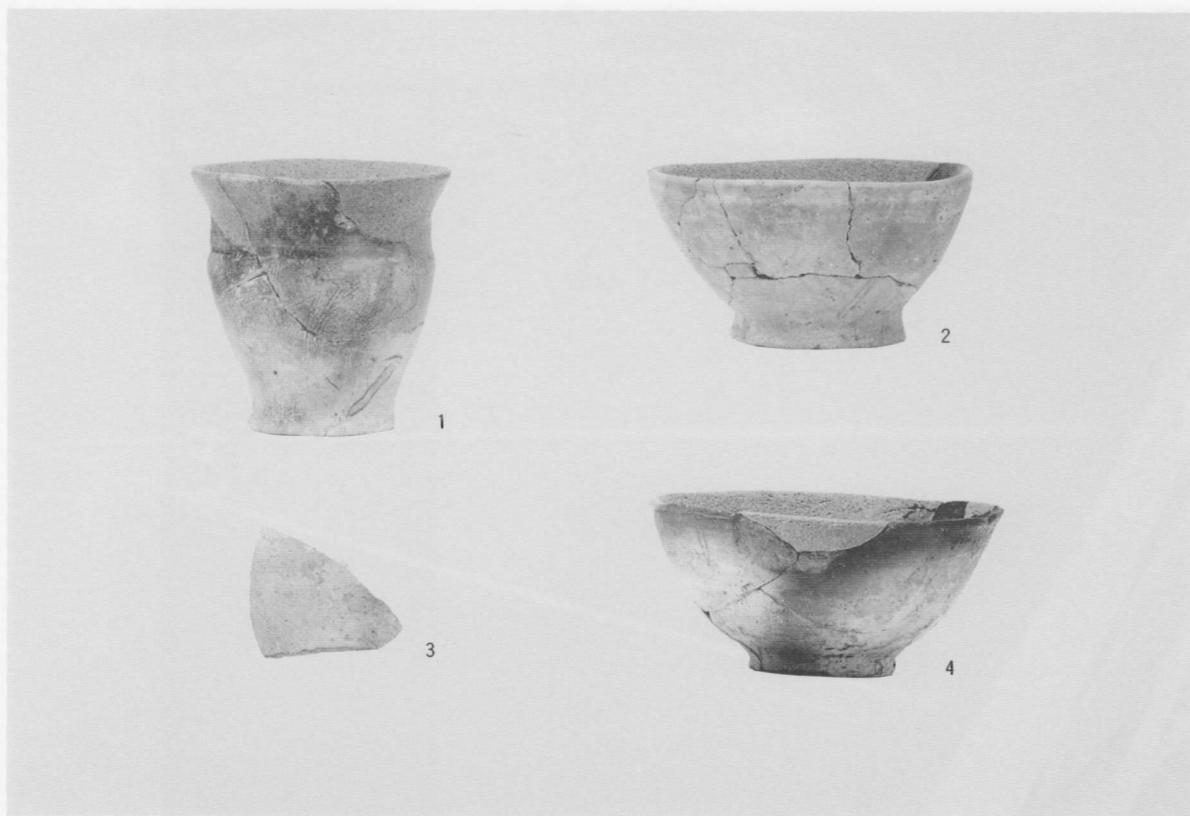
A K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡（北東より）



B K113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡かまど（東より）



A K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡炭化物出土状態（北西より）



B K 113遺跡北35条地点第3号竪穴住居跡出土遺物



A K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡（北より）



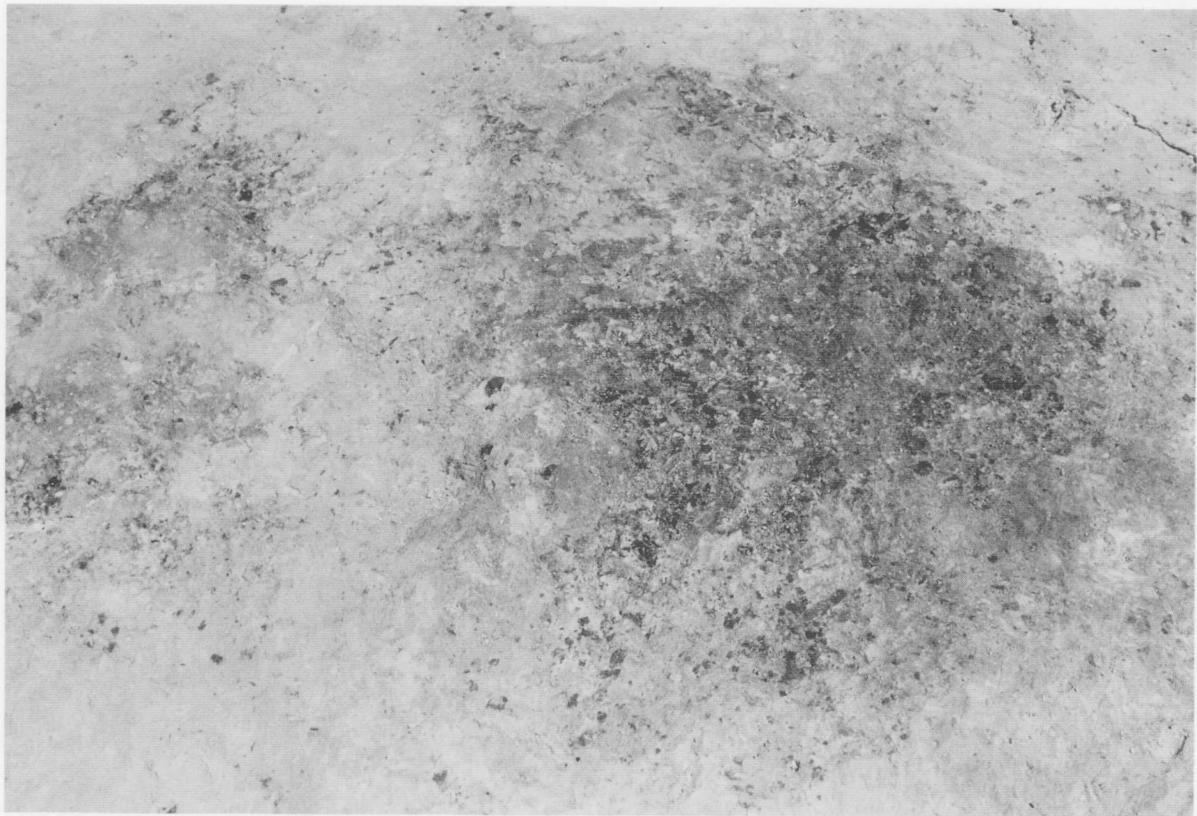
B K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡（南より）



A K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡礫・炭化物出土状態（南東より）



B K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡礫・炭化物出土状態（西より）



A K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡焼土1（北東より）



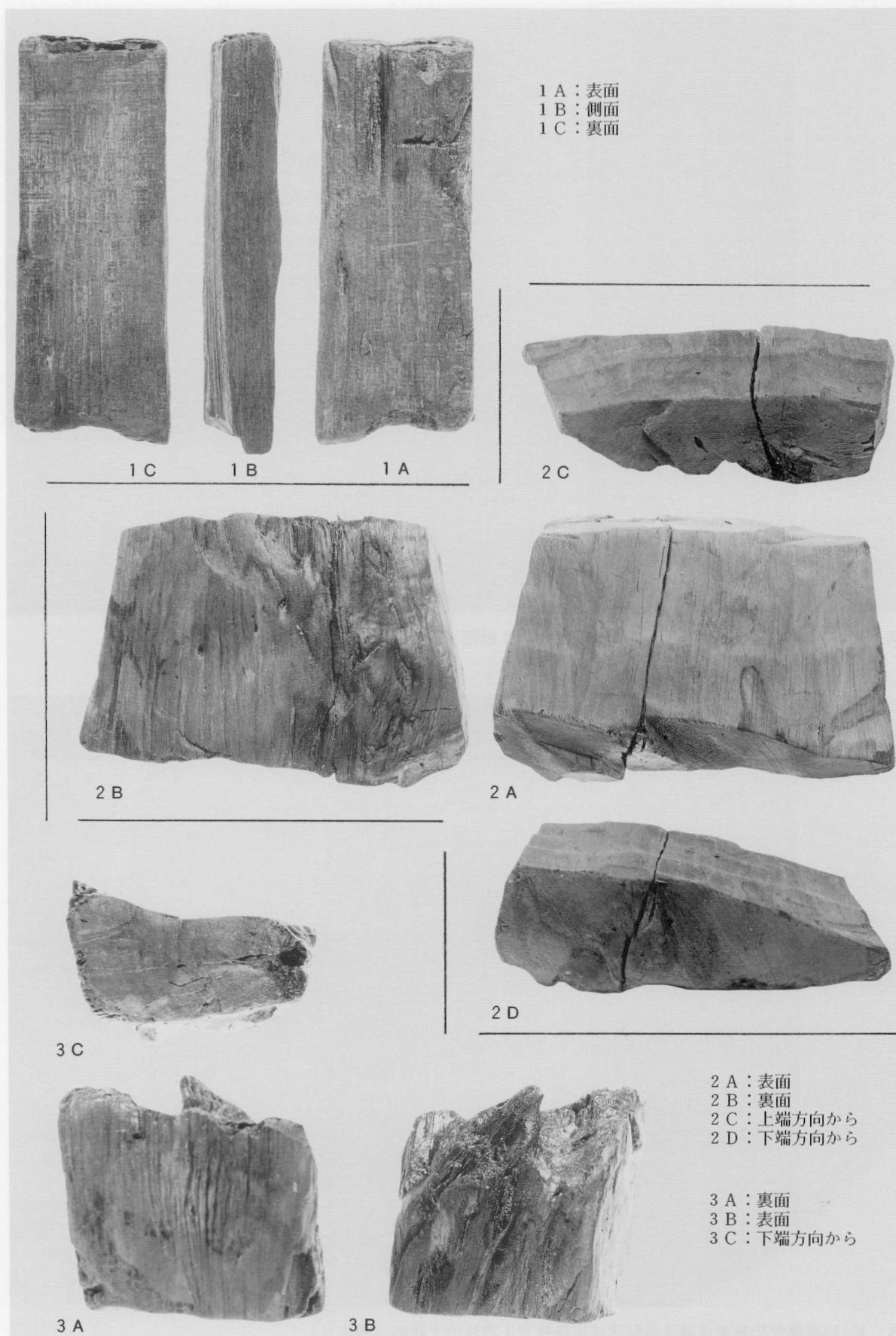
B K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡Pit1（西より）



A K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴1断面（西より）



B K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴1木片出土状態（西より）



K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡柱穴出土木製品 (1・2:柱穴1, 3:柱穴2出土)



K113遺跡北35条地点第4号竪穴住居跡出土遺物



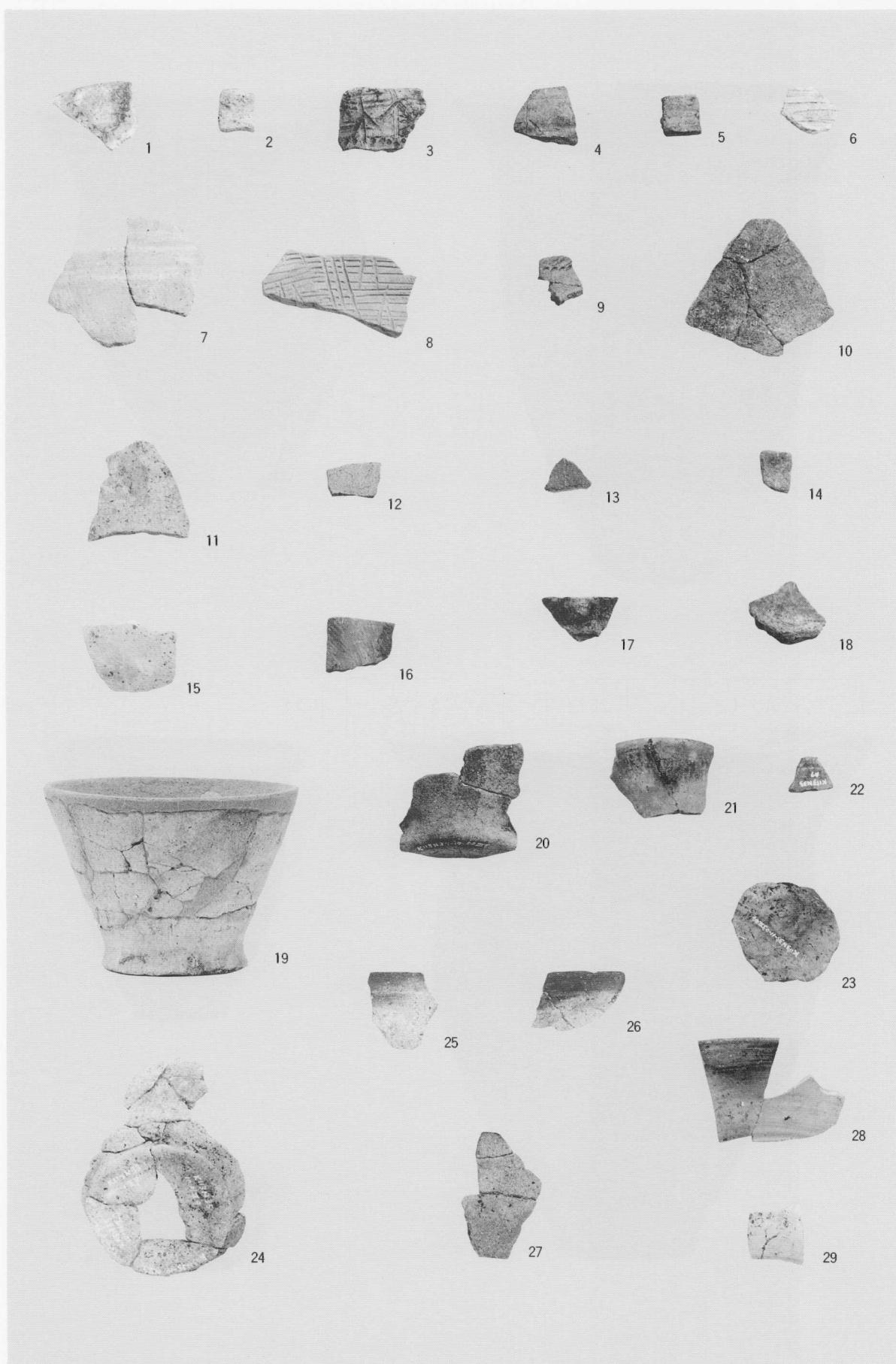
A K113遺跡北35条地点焼土10・18（南より）



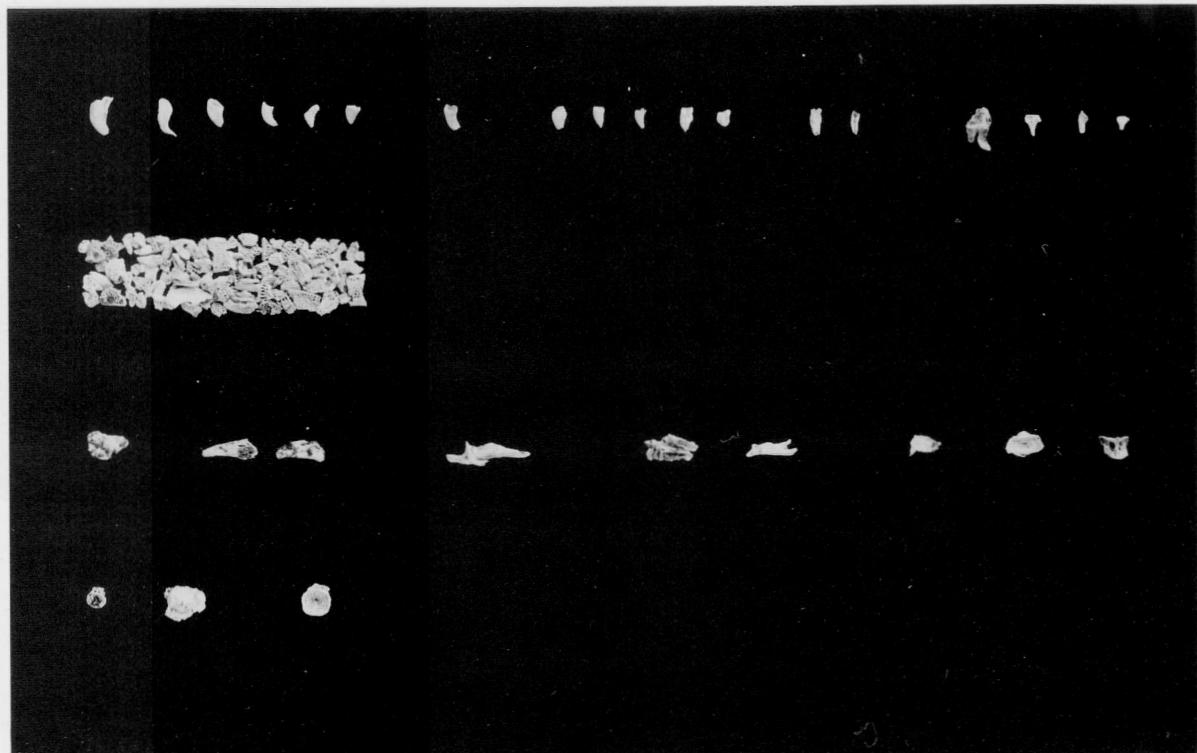
B K113遺跡北35条地点焼土18地割れ部分土器出土状態（西より）



K113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(1)



K 113遺跡北35条地点発掘区出土遺物(2)
112



サケ科犬歯状歯 Canine-like teeth of Salmonidae

Aタイプ

Bタイプ

Cタイプ

C2タイプ

D2タイプ

サケ椎骨

Vertebra of Salmonidae

ウグイ属 *Tribolodon*

方骨 R

歯骨 L

角骨 R

基後頭骨

尾舌骨

M

M

第1椎骨

第2椎骨

腹椎

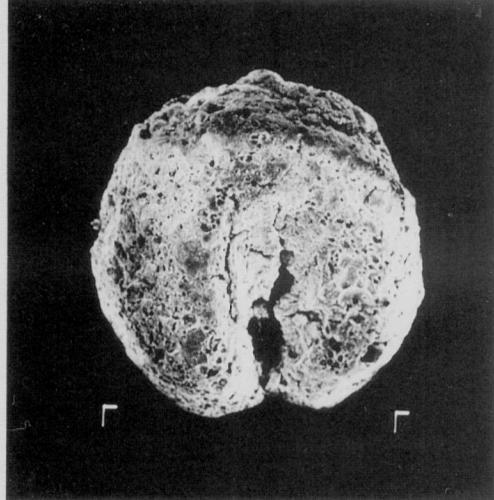
ニシン科 *Clupeinae* コイ科 *Cyprinidae*

腹椎

翼耳骨

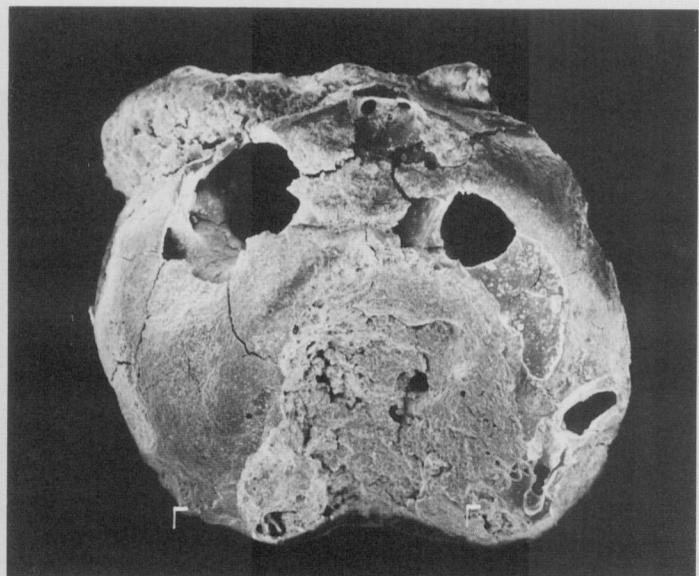
腹椎

K113遺跡北35条地点出土動物遺存体 Animal remains from the K113 site Locality N35



1 アワ

L 1.2mm, W 1.1mm, T 0.8mm



2 キビ

L 1.7mm, W 1.8mm, T 1.2mm



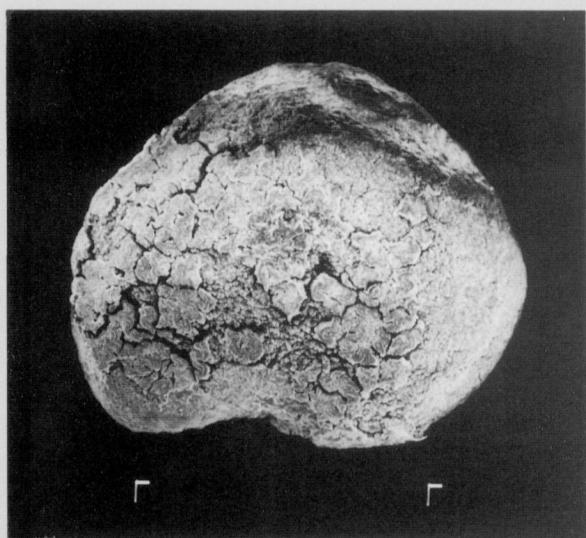
3 ソバ

L 2.8mm, W 2.3mm



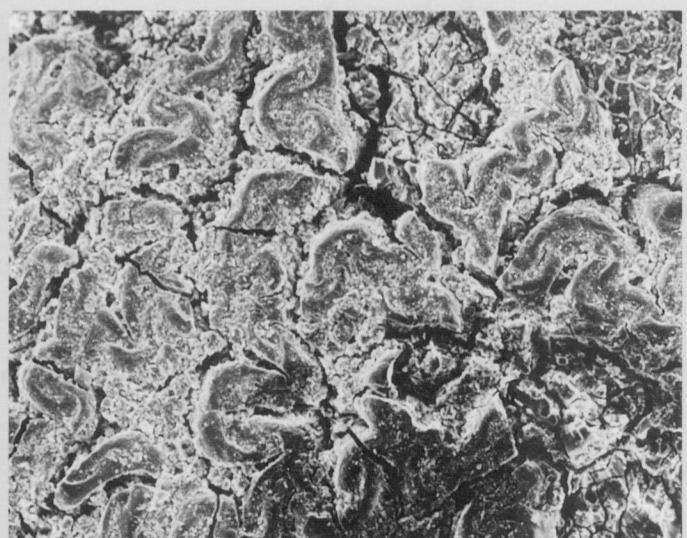
4 アサ

L 3.6mm, W 2.8mm

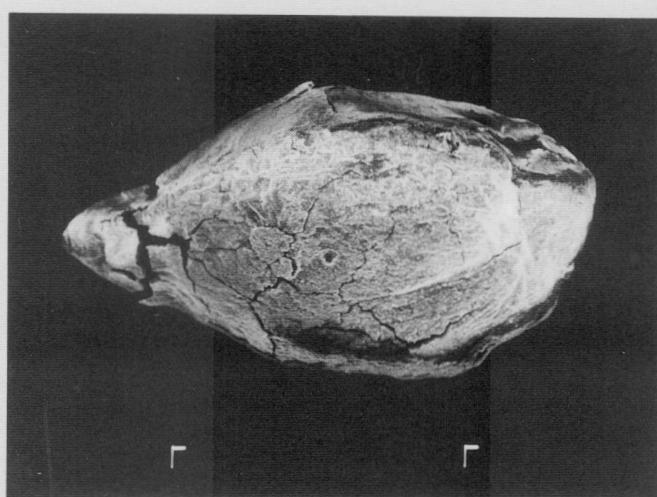


5 a ナス科

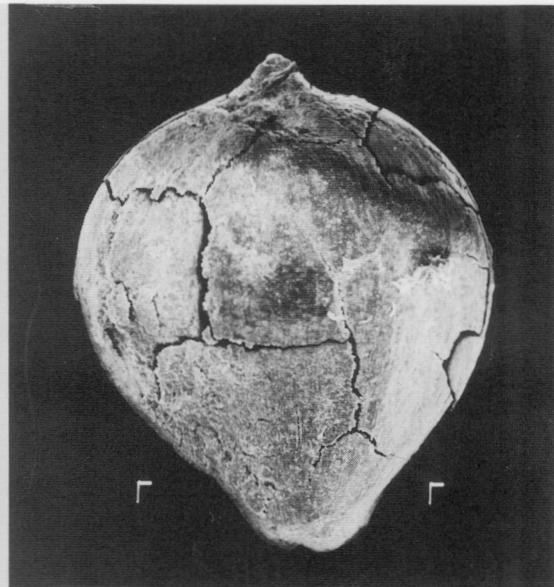
L 1.6mm, W 1.2mm, T 0.7mm



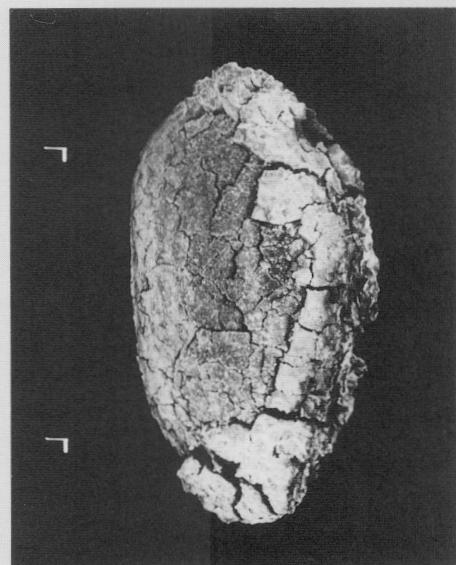
5 b 5 a の拡大 表面組織



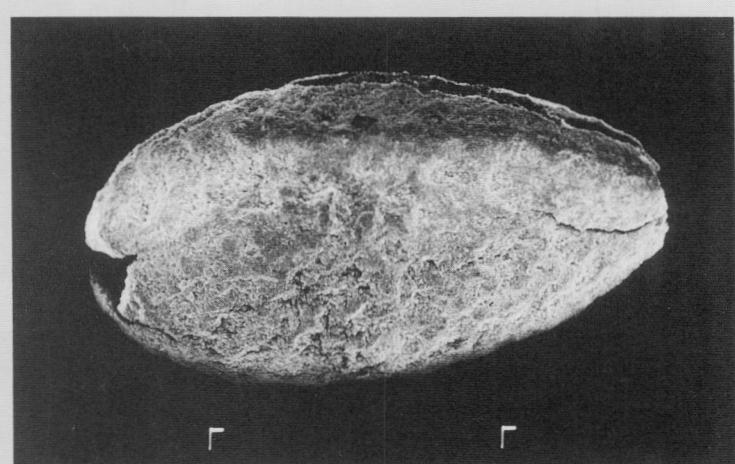
6 タデ属
L 1.9mm, W 1.1mm



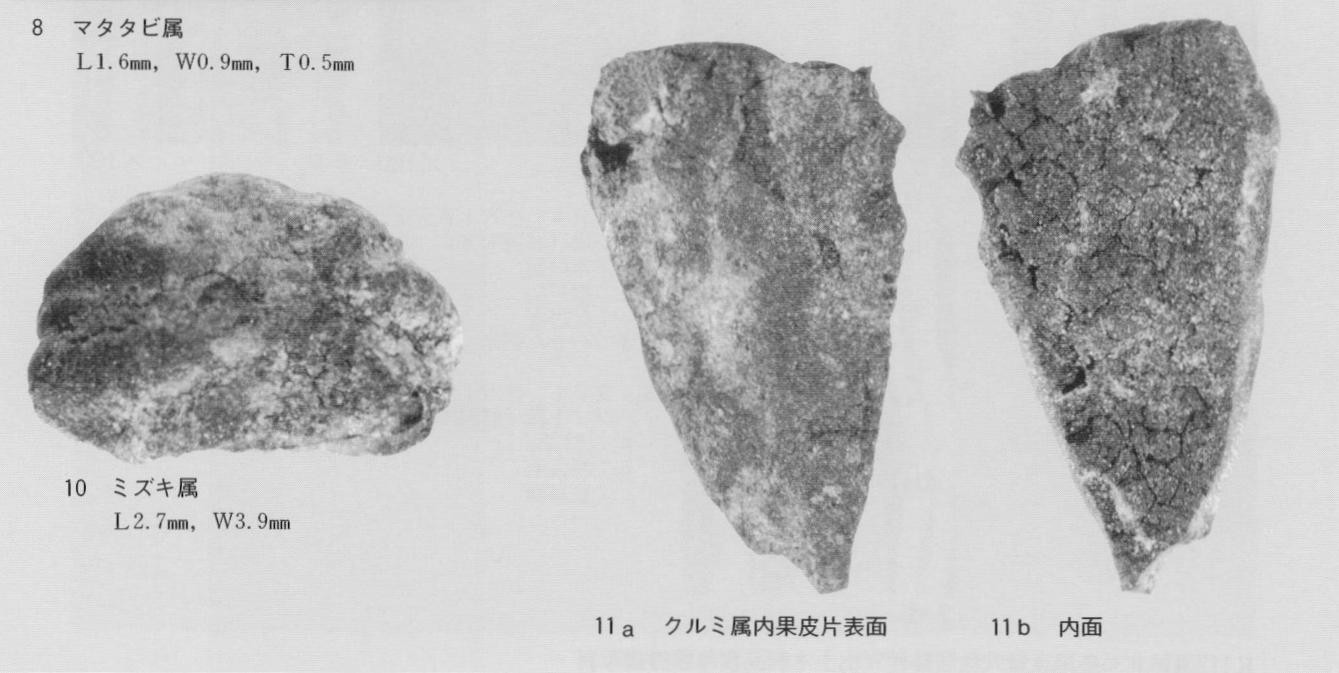
7 カヤツリグサ科
L 1.7mm, W 1.45mm, T 0.75mm



8 マタタビ属
L 1.6mm, W 0.9mm, T 0.5mm



9 ニワトコ属
L 2.1mm, W 1.1mm, T 0.6mm

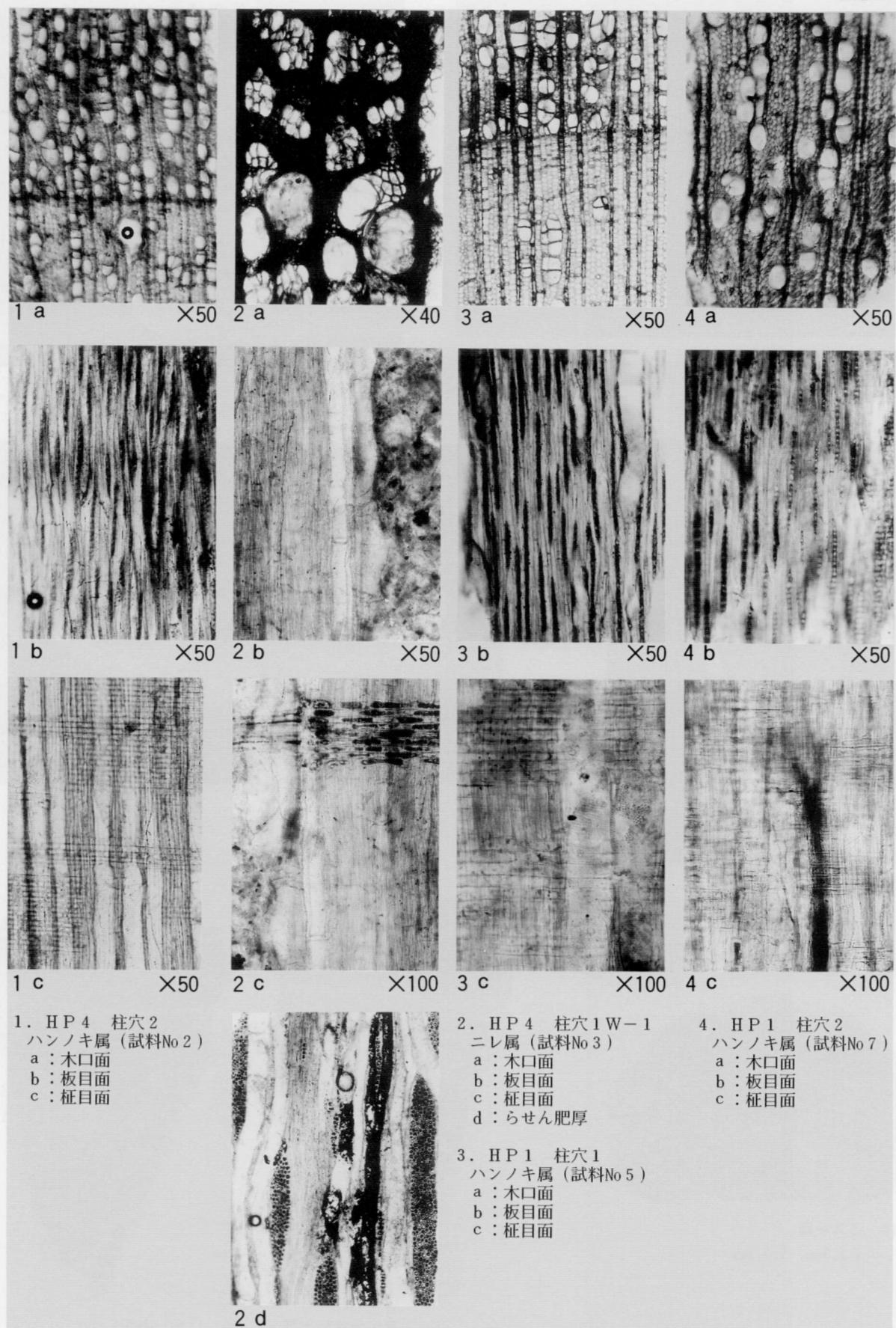


10 ミズキ属
L 2.7mm, W 3.9mm



11 a クルミ属内果皮片表面

11 b 内面



K113遺跡北35条地点堅穴住居跡柱穴出土木製品樹種顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	けいひゃくじゅうさんいせききたさんじゅうごじょううちてん							
書名	K113遺跡北35条地点							
副書名								
卷次								
シリーズ名	札幌市文化財調査報告書							
シリーズ番号	53							
編著者名	加藤 邦雄・秋山 洋司							
編集機関	札幌市教育委員会(札幌市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒064 札幌市中央区南22条西13丁目 TEL 011-512-5430 Fax 011-512-5467							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
K113	札幌市北区北35条 にしろく、ななちょうどめ 西6、7丁目	市町村 01102	遺跡番号 113	43° 6' 02"	141° 20' 27"	19940601～ 19940930	3,900	整地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
K113	集落	擦文時代前期～中期	堅穴住居跡 焼土・炭化物	4軒 21ヶ所	擦文式土器	第1号堅穴住居跡 柱穴に柱根残存		

札幌市文化財調査報告書53

K113遺跡

北35条地点

平成8年3月25日印刷

平成8年3月29日発行

発行者 札幌市教育委員会

060 札幌市中央区南1条西14丁目

編集者 札幌市埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南22条西13丁目

TEL. 011(512)5430

FAX. 011(512)5467

印刷所 (株)アイワード

凡 例

焼土

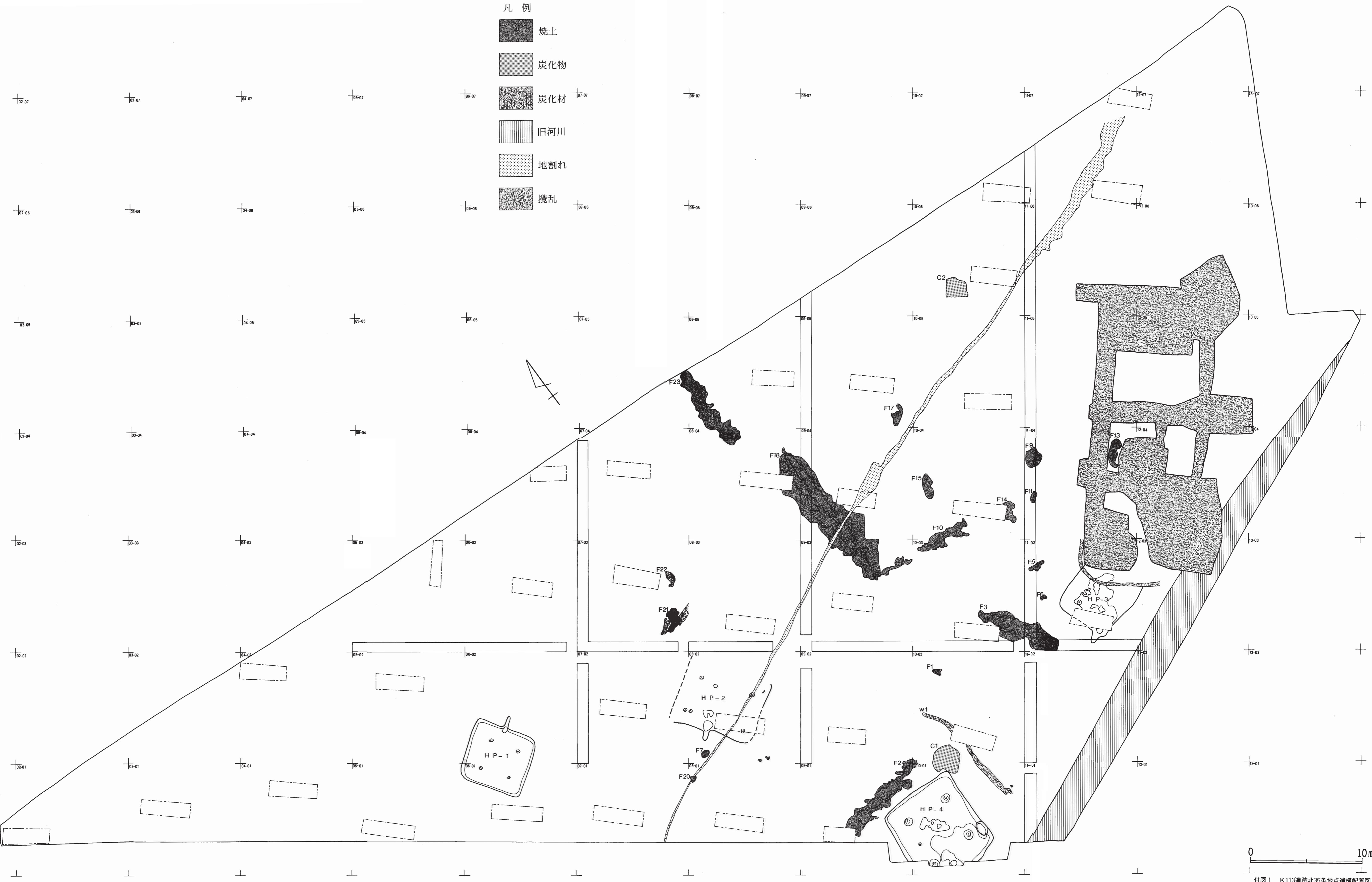
炭化物

炭化材

旧河川

地割れ

攪乱



付図1 K113遺跡北35条地点遺構配置図

